The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	英語のレトリック・日本語のレトリック　（冊子）
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88417
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

言語文化共同研究プロジェクト２０２１

英語のレトリック・日本語のレトリック

渡　辺　秀　樹
大　森　文　子
岡　部　未　希
竹　森　ありさ
Luke Malik
友　繁　有　輝

大阪大学大学院言語文化研究科

２０２２

言語文化共同研究プロジェクト２０２１

英語のレトリック・日本語のレトリック

渡　辺　秀　樹
大　森　文　子
岡　部　未　希
竹　森　ありさ
Luke Malik
友　繁　有　輝

大阪大学大学院言語文化研究科

２０２２

英語のレトリック・日本語のレトリック
（言語文化共同研究プロジェクト **2021**）

目次

渡辺秀樹先生を称えて　大森　文子　1

Shakespeare における時の擬人化のヴァリエーション　渡辺　秀樹　3
英国 16-17 世紀の詞華集・詩語集を基礎資料にした
Time の epithets と apostrophes 再考

時のメタファーとシェイクスピア　大森　文子　17

Dickinson の詩における宝石の比喩　岡部　未希　31
―9 種の宝石に着目して―

色彩語 white を含む強意直喩表現の分析　竹森　ありさ　43
―white as snow/ a sheet/ marble の比較―

The Cognitivist/Non-Cognitivist Divide in Metaphor Studies　Luke Malik　55

George. H. W. Bush’s Metaphors in Speeches Delivered in 1989　Yuuki Tomoshige　71
How Freedom Is Metaphorized in Speaking of Freedom

渡辺秀樹先生を称えて

大森文子

私たちの共同研究プロジェクトは、2001 年に発足した大阪大学大学院言語文化研究科の科内研究会「言語文化レトリック研究会」における共同研究を母体としています。その成果をまとめて毎年刊行してきた共同研究プロジェクト報告書は、本報告書で 21 冊目になります。この研究会の立ち上げの時から長年にわたり共同研究を牽引し、私たちをお導きくださいました渡辺秀樹先生を称え、本報告書『英語のレトリック・日本語のレトリック：言語文化共同研究プロジェクト 2021』は、渡辺秀樹先生退職記念特集号としてお送りいたします。

渡辺秀樹先生は、1980 年に千葉大学を御卒業の後、1985 年に東京大学大学院修士課程を修了、同年東京大学大学院博士課程に進学されるも、わずか 1 年後、1986 年に大阪大学言語文化部助手に採用され、1988 年に同講師に、1991 年に同助教授に昇任されました。2003 年に千葉大学大学院で博士の学位を取得され、2008 年に大阪大学大学院言語文化研究科教授に昇任され、2022 年 3 月 31 日に退職を迎えられます。

渡辺先生の研究の御業績を振り返りますと、第一に記すべきは、フィロロジストとしての歩みを貫き、御研究を大きく発展させてこられたことです。1985 年、修士論文完成、修士課程修了と同時に東京大学英語学研究会発行の学術誌に発表された古英詩 *Beowulf* に関する論文が渡辺先生の処女論文でありますが、この研究を継続的に発展させた論文が 2000 年に権威のある学術誌 *Neuphilologische Mitteilungen* に掲載され、この論文は多くの *Beowulf* 研究や校訂本に引用され、学界の定説となっています。他にも *Beowulf* および古英語文献全般を対象とした古英語の意味研究を数々の論文として、また講演、シンポジウム等で発表され、その御研究は世界の研究者に引用されています。修士論文から始まった古英詩の研究が、世界が認める大きな研究として結実する。先生の歩みは若い学徒にとってはこの上ない励ましであり、鑑であり、理想であります。

渡辺先生の御研究の射程は、古英詩にとどまるものではありません。聖書翻訳の歴史、ヨーロッパ古典文学、Shakespeare から近現代英米詩に至るまで高い見識を持たれ、日本文学にも精通しておられます。言語文化レトリック研究会ではこれまで 11 回にわたって発表されましたが、そのテーマは、*Beowulf* の文体論はもとより、Milton の認知詩学、戦争詩人 Owen の詩の意味分析、英字紙やニュース雑誌の文体分析、*OED* の文献学的分析、映画 *My Fair Lady* のレトリック、芭蕉俳句英訳のレトリック、芭蕉連句の西洋人の理解、漱石俳句のレトリックなど、多岐にわたります。私たち共同研究者は御発表を拝聴し、プロジェクト報告書に掲載された御論文を拝読するたびに、古今東西の文学作品をこよなく愛され、その文体や意味を分析される先生の御研究の広さと深さと鋭さに対し、常に畏敬の思いを新たにしてきました。私自身は、科研費の助成を受けた研究で何度も渡辺先生と共同研究をさせていただき、そのうちの一つは、言語文化レトリック研究会を長年支えてくださったジェリー・ヨコタ名誉教授が本研究科在籍当時に研究代表者を務められた大型の科研費助成研究（2009-2012）で、研究分担者として渡辺先生、アンドリュー村上スミス先生とご一緒しましたが、それらの共同研究でも、実に多くを学ばせていただきました。

渡辺先生は、和歌や俳句、連句にいたっては、学術的分析だけではなく、実作までなさいます。俳号をお持ちで、吟行に赴いては四季折々の景を句にしたためられ、御友人と連句を巻かれます。昨年の 10 月には、先生の御歌が読売歌壇に首席入選作として掲載されました。

渡辺先生に会うために大阪大学に来訪されたある他大学の教授が、先生の研究室に一歩入った途端、「なんと cozy な空間だろう」と驚かれたと伺ったことがあります。その居心地の良さの要因は、膨大な数の学術書や文学全集が整然と並べられ、緑の樹影がそよぐ大きな窓から爽やかな風と小鳥の声が流れ込むことだけではありますまい。アメリカ大統領の演説から三島由紀夫に至るまで、多種多様な研究テーマを掲げる本研究科の院生の誰に対しても、その学識を縦横無尽に駆使して助言を施され、来室する相手の興味に寄り添って朗らかに学問談義、文学談義に花を咲かせる、その先生の佇まいの美しさが cozy な空間を生み出すのです。それは、薫陶を受けてきた私たち研究会仲間や指導院生誰もが知るところであります。私たちは渡辺研究室の楽しい雰囲気に浸りながらも、学問を志す者としていつも目を見開かされ、姿勢を正されるのです。

私たちは、大阪大学御着任以来 36 年の長きにわたる渡辺秀樹先生の本研究科、本共同研究プロジェクトへの多大なる御貢献に敬意を表し、深い感謝をこめて本特集号を捧げます。

Shakespeare における時の擬人化のヴァリエーション
英国 16〜17 世紀詞華集を基礎資料にした Time の epithets と apostrophes 再考[1]

渡辺　秀樹

§ 1　はじめに[2]

前の共同研究プロジェクト 2020 では大森文子教授と共に Shakespeare の *Sonnets* のレトリックを考察し、筆者は同一名詞、接続詞、文型の「繰り返しのパタンと効果」について論じ、名詞 time が 3 度現れる XIX では devouring, swift-footed, old という形容辞 (epithets) のヴァリエーションと出現順序について、接続詞については行頭の and 連続と when と then の繰り返しが見られる 7 篇（II, XII, XV, XXX, XLIII, LXVI, CVI）の比較を行った。この論考で時の副詞 when, then が多用される篇では *The Sonnets* 全体の基調である「時間の経過と美の消滅」について他篇に増して強く述べられていることが分かった。今回はその Sonnet XIX から論考を再開する。下では議論の対象となる語句に下線を施し time は太字で示す。[3]

Devouring **Time**, blunt thou the lion's paws,
And make the earth devour her own sweet brood,
Pluck the keen teeth from the fierce tiger's jaws,
And burn the long-lived phoenix in her blood,
Make glad and sorry seasons as thou fleet'st,
And do whate'er thou wilt, swift-footed **Time**,
To the wide world and all her fading sweets:
But I forbid thee one most heinous crime,
O! carve not with thy hours my love's fair brow,
Nor draw no lines there with thine antique pen.
Him in thy course untainted do allow
For beauty's pattern to succeeding men.
Yet, do thy worst, old **Time**: despite thy wrong,
My love shall in my verse ever live young.　　(*Sonnet* XIX)

この詩で起きる名詞 Time が擬人化された時の神への呼びかけであることは、それぞれが現れる同一行中の代名詞 thou, thy で明らかである。後節で見るように "devouring Time" は Shakespeare のオリジナルの句ではなく、周知のように Edmund Spenser, *Amoretti*, Sonnet LVIII の "deuouring tyme and changeful chance haue prayed/ her glories pride that none may it repayre" にも見え、古くは Ovid, *Metamorphoses* XV. 234-37 の "tempus edax rerum, tuque, invidiosa vetustas,/ omnia destruitis vitiataque dentibus aevi/ paulatim lenta consumitis omnia morte!" に遡るとされている。

これまでに *Sonnets* を何度か通読して、V, XV, XVI, XIX でのみ Time に epithets が付くこと、そして美青年への思いを歌った前半（I-CXXVI）には名詞 time が頻出するが、後半(CXXVII-CLVI) では 1 度も現れないという不均衡に気が付いた。そこで、Shakespeare 全作品での擬人化された Time を修飾する epithets, attributes の例を集めて、数種のタイプに分類し、戯曲と詩作品での相違、特に *The Sonnets* での Time のイメージの特徴を再認識すること、本論ではこれに取り組みたい。

---

[1] 本論文は以下の 2 件の科研費の補助を受けている。基盤研究(C)1「英詩メタファーの構造と歴史 II」（研究代表者渡辺秀樹、分担者大森文子）、基盤研究(C)1「英語メタファーの認知詩学 II」（研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹）。

[2] Shakespeare の *The Sonnets* と *The Rape of Lucrece* の引用は Colin Burrow, ed. (Oxford; 2002) の綴りと句読により、戯曲からの引用は The Arden Shakespeare による。他詩人の作品からは引用元を脚注で示す。以下ではソネット第 19 番は Sonnet XIX のように示す。

[3] 木村俊夫（1969:192）では Macbeth の時間論の章への後注 5)において「この作品では見物の中に temporal な不安をひき起こすものとして、when, yet, until, till, then などが効果的に使用されていることを Driver は指摘している」との付記があり、ソネットでの when, then の多用とも通じて、我が意を得た。原著の該当部は以下のようである。 "These lines have been quoted to show something of the technique by which Shakespeare plans in the spectator of a feeling of time, quite apart from the many lines which mention time directly." (Driver, 1960: 148)

論考の手順であるが、まず Shakespeare とほぼ同時代の詩華集・詩語集で記載された Time への修飾語の確認から始め、Josua Poole, *English Parnassus* (1657) に特に注目する。そして、先行するソネット連詩集の中で、Time が集中的に連続して用いられている Samuel Daniell, *Delia* (1591) と Shakespeare との比較に進み、*The Rape of Lucrece* と戯曲での擬人化された Time とその下位概念の Fate と Fortune への呼びかけに注目して、Shakespeare の詩と戯曲での Time の比喩義や象徴の相違を見る。本論考は Panofsky, Chew, 木村俊夫の論説を基にしているが、これらの著書で言及されていないコロケーションも収集・分類し、同時代の詩人の共通イメージから話を始め、Shakespeare における擬人化された Time の複数のイメージを提示した後、Time への呼びかけ (apostrophe) に注目して、同時代の詩人の影響を強く受けた擬人化と詩の構造の例、*The Rape of Lucrece* の運命への呼びかけの例、*The Twelfth Night* における 3 度の呼びかけの例を論じたい。

§ 2 同時代の詞華集に見られる Time の形容辞 (epithets)

英国のルネッサンス、16 世紀前半からギリシア・ローマの古典の研究と受容が始まり、イタリア・ルネッサンスの Dante や Petrarch に倣ったソネット形式の詩が導入された。大学教育を受けた所謂 University Wits らは劇作とともに詩作や散文作品もものして、エリザベス朝の文学機運は盛り上がった。その中で、詩作の導きとなるような詞華集や詩語集が相次いで出版されたのだが、筆者はそれらの中で Robert Allott, *England's Parnassus* (1600), *England's Helicon* (1600), Josua Poole, *English Parnassus* (1657) に注目する。その理由は、例えば、詞華集として直喩表現の現れる詩行を項目別に抜粋した Robert Cawdray, *A Treasvrie or Store-Hovse of Similes.* (1600) には "Time" の項には 6 件しか抜粋がないが、同年発行の *England's Parnassus* には 15 件の抜粋があり、主たる参考資料の Poole, *English Parnassus* に見える豊富な Time へ用いられた epithets との比較が有意となるからである。

Robert Allott (1600) は "Time" の項 (pp. 284-286) で、エリザベス朝の 10 人の詩人から 15 の抜粋を挙げている。中で 2 個の引用があるのは Edmund Spenser, Samuel Daniell, Thomas Lodge (D. Lodge と表記)、Michael Drayton (M. Dr. と表記), William Shakespeare で、Shakespeare からは *The Rape of Lucrece* の ll. 925-929 と 939-959 が引用されており、995 行の時への呼びかけ "O Time, thou tutor both to good and bad" は採られていないし 1609 年出版の *The Sonnets* からの引用はない。この 15 の抜粋部から、後の議論に関わる擬人化された Time を主語とする動詞と epithets（下線）が見えるものを引用する。

Beauties great enemie, and to all the rest
That in the garden of Adonis springs,
Is <u>wicked</u> Time, who with his <u>sithe</u> addrest,
Does <u>mow</u> the flowing herbes and goodly things,
And all their glorie to the earth downe flings,
VVhere they do wither, and are fouly marde.
He <u>flies</u> about, and with his flaggie <u>wings</u>,
Beates downe both leaues and buds without regards.
Ne euer pitie may relent his malice hard. E. Spencer. [sic] (*Faerie Queene* 1596 III. vi. 39)

上の Spenser の引用部には擬人化された Father Time の持ち物 (attributes) の草刈り鎌 (sithe =scythe)と翼 (wings) と共に、それらでなす行為が動詞 *mow* と *flies* で表されており、[4] 後で見る Poole に、これらを合わせた "mowing sith-bearing" 「草刈り鎌を持った」という措辞が出てくることを先に指摘したい。

動詞 *steal* が見えるのは Sydney の引用で、「盗む」から「忍び足で近づく」の両義と取りたい。

<u>Stealing</u> Time the subject to delay S. Ph. Sydney. (*Arcadia* 1598 p. 354 book III.)

[4] *OED* の名詞 *scythe* n. の形態欄 (Forms.) には Middle English-1600s *sith* とある。

この動詞 *steal* については *OED* の現在分詞形の形容詞が見出し語の定義文と用例がたいへん参考になる。定義中には類語の *glide*, *creep* が用いられて、初例と第 2 例はともに 16 世紀後半からで、同じ共起語 *step* を伴い、はっきりと忍び足 (stealing steps) を意味しているからだ。

Stealing, adj.　That steals or moves stealthily; that eludes observation; that glides or creeps softly along; that comes on imperceptibly.
1574 J. Higgins *1st Pt. Mirour for Magistrates* Cordila xxxv Eke nearer still to mee with stealing steps shee drewe.　1576 G. Gascoigne *Steele Glas* sig. F.ij Nor heare the trampling of his stealing steppes.

次は Shakespeare が戯曲や詩作で大きな影響を受けた Thomas Lodge の不明作品からの抜粋。[5]

No mortall orme that vnder moone remains,
Exempt from traiterons Time, continueth one.
Now montes the foud, and straight his waues restrains
Now flowes the tyde, and strait the sourse is gone,
VVho toyles by Sea, must choose the fairest gale,
For time abodes our good or bade auaile.　　D. Lodge.

第 2 行 “traiterons” は “traiterous” の<n>と<v/u>のミスプリントであろう。で、traitorous「反逆の・不忠の不実の」とはいかなる意味か、あとの Shakespeare の使用例で確認したい。
次の Daniell は注目すべきだ。

Swift speedie Time, feathered with flying howres,
Dissolues the beautie of the fairest browe.　　S. Daniell.

これは Samuel Daniell のソネット集 *Delia* (1594) の第 36 番の 11¯ 12 行であり、<s>と<f>の頭韻句で時の早さを強調したもの。

The Spanish Tragedy の作者 Thomas Kyd は「時は永遠の奴隷」と述べる。

Time is a bondslaue to eternitie.　　Tho. Kyd.

Charles Crawford の校訂版の後注には、”Untraced.　Collier referred erroneously to the Tragedy of Cornelia. I have an idea that this line is a corruption of Shakespeare, who makes Lucrece apostrophize Time as ‘Thou ceaseless lackey to eternity’. 1. 967.” とあり、Kyd の作品中には見当たらず、編者 Allott の記憶違いで Shakespeare, *The Rape of Lucrece* の文言の変形ではないかと推測されている(1913: 112)。ちなみに名詞 bondslave の *OED* 初例は　1561 J. Daus tr. H. Bullinger *Hundred Serm. vpon Apocalips* xxviii. 173 We were…uery bondeslaues of the deuil. で、新約聖書の黙示録の講釈説教文からである。
以上、15 の抜粋から興味深い語句の使用例を見た。

England’s Helicon (1600) [6]
この詞華集は 16 世紀の詩人から（献詩 Sonnet を含めて）152 篇の牧歌詩・抒情詩を集めたもので、このジャンルの詩に現れる名詞 time 約 40 件を調べて、疑人化用法で形容辞が付いているもの、連語形になっているものを下に抜き出した。

Niggard Time threats, if we miss
This large ofifer of our bliss.
Long stay ere he grant the same :
(THE SHEPHERD TO HIS CHOSEN NYMPH .Sir Phil. Sidney. p. 18)

Let them with cause complain

[5] D. Lodge の表記は Oxford 大学で教育を受け、法学院でも学んだ Lodge の Doctor の称の略と思われるが不詳。
[6] A. H. Bullen, ed. 1899 を使用、ページ番号はこの校訂版のものである。

Of cruel fortune, and of **time's abuse,**
And let not them accuse
Thee, gentle Love, that doth with bliss enfold
Within thy sweetest joys each living soul.
(THE SHEPHERD ARSILIUS' REPLY TO SYRENUS' SONG.　Bar. Young p. 98)

Time wears her not, she doth his chariot guide ;
Mortality below her orb is placed ;
By her the virtue of the stars down slide,
In her is virtue's perfect image
(THE SHEPHERD'S PRAISE OF HIS SACRED DIANA. Ignato　P. 128)

Oh, stay not, **Time**, but **pass with speedy haste,**
And Fortune hinder not her coming now !
(THE SHEPHERD ARSILIUS HIS SONG TO HIS REBECK.Bar. Young p. 181)

AURORA'S blush, the ensign of the day,
Hath waked the god of light from Tithon's bower.
Who on our bride and bridegroom doth display
His golden beams, auspicious to this hour.
Now busy maidens strew sweet flowers.
Much like our bride in virgin state ;
Now fresh, then press'd, soon dying.
The death is sweet, and must be yours,
Time goes on crutches till that date,
Birds fledged must needs be flying.
(AN EPITHALAMIUM, OR A NUPTIAL SONG, APPLIED TO THE CEREMONIES OF MARRIAGE. Christopher Brooke. p. 255)

見るべきものは "Niggard Time" 「しみったれの時」と "Time goes on crutches" 「松葉杖でよろめき歩く時」で、後者は Panofsky の指摘する Petrarch の『凱旋歌集』Trionfi の『時の凱旋』*Triumphus Temporis* のテクストに付けられた 15 世紀末の挿絵版画（Plate XXVIII, no. 52）に見える「4 枚の翼を持つ両脇に杖をつく老人」の像を思わせる。[7]

Josua Poole (1657) は "Time" の項 (p. 207) で、「老い」「（空飛ぶ）速やかさ」「貪食」を意味する語をアルファベット順ではなく任意に 58 個並べている（aged が重複記載されて、実数は 57 個）。

aged, fleeting, unstaying, unrescued, unregained, light-foot, unrecalled, irrecoverable, gray-headed, aged, crazie, growing, speedy, sluttish, wastful, restlesse, slippery, old, gliding, stealing, creeping, flying, eating, envious, journeying, feathered, winged, rolling, wheeling, posting, succeeding, encroaching, assaulting, invading, running, galloping, devouring, swift-footed, swimming, light-heeled, swift-wing'd, mowing sith-bearing, convenient, seasonable, commodious, all-gnawing, successive, ensuing, injurious, tyrannizing, domineering, waving, rusty, dusty, moldie, consuming, unreturning, , all-ripening.
（網掛けは Shakespeare's *Sonnet* XIX に見える 3 つ）

この 57 語は形式からは単純形容詞、現在分詞形、所有の意の接尾辞-ed を持つ形容詞に大別できるし、否定の接頭辞 un-を持つもの、all-を持つものなどに小区分することもできるが、後節で Time の擬人化とメタファーを論じるので、試みに語形ではなく類義のグループに分けてみる。

---

[7] Panofsky 1962. p. 81.　"In none of these ancient representations do we find the hourglass, the scythe or sickle, the crutches, or any signs of a particularly advanced age." (p. 73)　ここにはルネッサンス期に特徴的な Father Time の持物、砂時計、鎌、松葉杖が列挙されている。しかし、ルネッサンス期の時の翁の視覚像が、我々が馴染んでいる「長いローブをまとい、白髭で大鎌を持つ老人」ばかりでなく、もっと若く、筋骨隆々として、鎌で人々をなぎ倒しているイメージもあったことは次の大森論参照。

I　身体的特徴・行為

老齢・高齢の	aged, gray-headed, old,
駿足の、早く過ぎる	fleeting, light-foot, speedy, restless, journeying, rolling, wheeling, posting, succeeding, ensuing, successive, running, galloping, swift-footed, swimming, light-heeled,
翼を持つ、飛び去る	flying, feathered, winged, swift-wing'd,
戻らない	unstaying, unrescured, unregained, unrecalled, irrecoverable, unreturning,

II　攻撃的・支配的行為

忍び寄る	gliding, stealing, creeping,
攻撃する、破壊する	encroaching, assaulting, invading, mowing sith-bearing injurious
荒らす、消耗させる	wastful, rusty, dusty, moldie, consuming
貪り食う	eating, devouring, all-gnawing
支配する、独裁的な	tyrannizing, domineering,
妬む、邪悪な	crazie, sluttish, envious,
ぐらつく、むら気の	waving, slippery

III 便宜・育成的行為

育成する、便利な	growing, seasonable, convenient, commodious, all-ripening

どの形容辞がどの詩人のどの詩に現れたものか、または共通して使用している詩人がいるのか全てを調査するにはそれこそ時間がかかるが、リスト中程にある devouring と swift-footed は、併記・連続していることから Shakespeare のソネット第 19 篇の使用の写しであるはずだ。19 番の 13 行には old も出るし、Spenser, *Amoretti*, Sonnet LVIII の "deuouring tyme and changeful chance haue prayed/ her glories pride that none may it repayre" に見える "devouring Time" も見える。このように並べて見ると、よい意味の言葉が大変少ないことに気づく。ゆえに III の「育成する、便利な」の growing, seasonable, convenient, commodious, all-ripening は、「生物を育成し、実らせ、便宜を与える」時として、少ないためにかえって際立っている。こういうポジティヴなイメージを Shakespeare は用いたのだろうか。後節の議論に進む前に、Shakespeare の戯曲と詩に関して、リスト中の形容辞を他の詩人と共有している例を見たい。

§ 3　Shakespeare における Time と下位語を主語とする動詞

擬人化された Time を論じる時に、それを修飾する形容詞は注目されるが、主語となった Time が取る動詞も重要だろう。Shakespeare の作品中で擬人化された Time（及び関連・下位概念の Year, Month, Day, Hour）を主語とする動詞は多い。前節リスト中の galloping は *As You Like It* III. ii の有名な Orland と Rosalind のやり取り、有名な「人によって時の進み方は異なる」の台詞に出る（これについて *The Sonnets* との比較論考は大森文子教授の論文 2.3 節を参照）。

Rosalind
And why not the <u>swift foot</u> of time? had not that been as proper?
Orlando
By no means, sir. Time travels in divers paces with divers
persons. I'll tell you who time ambles withal, who time trots
withal, who time <u>gallops</u> withal, and who he stands still withal. (*As You Like It* III. ii. 255-258)

で、*Sonnet* XIX, 6 の swift-footed に繋がる swift foot もここで近接して現れていること、*Sonnet* LXV, 11 にも表れていることに注意したい。

動詞 running は Leontes の台詞中に見え、砂時計の砂の流れを意味して使われていること参考。[8]

[8]　「砂時計」の英語表現には *sandglass* と *hourglass* があることは意味深い。つまり sand = hour なのである。

It is: you lie, you lie:
I say thou liest, Camillo, and I hate thee,
Pronounce thee a gross lout, a mindless slave,
Or else a hovering temporizer, that
Canst with thine eyes at once see good and evil,
Inclining to them both: were my wife's liver
Infected as her life, she would not live
The running of **one glass.** (*Winter's Tale* I. ii.299-306))

creeping は *As You Like It* の Jaques の台詞に出る。

But whate'er you are
That in this desert inaccessible,
Under the shade of melancholy boughs,
Lose and neglect the creeping **hours of time**; (*As You Like It* II. vii.)

Fleeting は Sonnet 97 篇第 2 行に名詞 year の限定詞として出現し、近接して time が 2 度出ている。

How like a winter hath my absence been
From thee, the pleasure of the fleeting **year**!
What freezings have I felt, what dark days seen!
What old December's bareness every where!
And yet this **time** removed was summer's **time**,
（*Sonnet* XCVII, 1-5）

Growing は Henry VI Part I II. vi.の Plantagenet の次の台詞で time の形容辞となっている。

My father was attached, not attainted,
Condemn'd to die for treason, but no traitor;
And that I'll prove on better men than Somerset,
Were growing **time** once ripen'd to my will.
（父は捕らえられはしたが、掟に従って位を奪われたのではない、謀叛のかどで処刑はされたが、謀叛人ではない、そのあかしを立てる決闘の相手には、サマセット、きさまでは不足だ。いずれ世が移り、意に満つるときが来ればやれることだ。　小津次郎・貴志哲雄訳）

Stealing は Richard III V, iii の sir William Stanley の台詞で silent hours を主語として使用されている。

The silent **hours** steal on,
And flaky darkness breaks within the east.
In brief,—for so the season bids us be,—
Prepare thy battle early in the morning,
And put thy fortune to the arbitrement
Of bloody strokes and mortal-staring war.

All-ripening は見えないが、 "when time is ripe" 「時が熟せば」は定型表現として *Henry IV, Part I,* I, iii に見える。（*OED* には見出し語 ripe adj. 9. a. Of time: sufficiently advanced, esp. for a particular action or purpose. Frequently in (when) the time is ripe.の定義の下に第 2 例として引用され、見出し語 suddenly にもこの 1 行が引用されている）

Cousin, farewell: no further go in this
Than I by letters shall direct your course.
When time is ripe, which will be suddenly,
I'll steal to Glendower and Lord Mortimer;

§ 4　*The Sonnets* に見られる Time への呼びかけ：暴君 (Tyrant) としての Time

上で見た Poole のリスト中には tyrannizing という現在分詞形の形容辞が見えたが、Shakespeare の *Sonnet* 第 16 篇には名詞 Tyrant が現れる。

But wherefore do not you a mightier way
Make war upon this bloody tyrant, Time?
And fortify yourself in your decay
With means more blessed than my barren rhyme?
Now stand you on the top of happy hours,
And many maiden gardens yet unset
With virtuous wish would bear your living flowers,
Much liker than your painted counterfeit:
So should the lines of life that life repair,
Which this, Time's pencil, or my pupil pen,
Neither in inward worth nor outward fair,
Can make you live yourself in eyes of men.
To give away yourself keeps yourself still,
And you must live, drawn by your own sweet skill.　　(Shakespeare *Sonnet* XVI)

この Tyrant Time という頭韻句は、前節で見た Allott の引用する Samuel Daniell, *Delia* の第 36 番 *Sonnet* の 1 つ前の第 35 番第 7 行にも出るので、ここでは 14 行全文を見てみよう。

I once may see when years shall wreck my wrong,
And golden hairs shall change to silver wire,
And those bright rays that kindle all this fire,
Shall fail in force, their working not so strong,
Then beauty, now the burden of my song,
Whose glorious blaze the world doth so admire,
Must yield up all to tyrant Time's desire;
Then fade those flowers that decked her pride so long.
When if she grieve to gaze her in her glass,
Which then presents her winter-withered hue,
Go you, my verse, go tell her what she was,
For what she was, she best shall find in you.
Your fiery heat lets not her glory pass,
But phoenix-like shall make her live anew.　　(Samuel Daniell, *Delia*, Sonnet XXXV)

ここには Shakespeare 第 16 篇と全く同じ "tyrant Time" が出ているだけでなく、「歳を取った Delia が鏡を見て、昔の金髪から白髪に変わった姿に悲しむなら、その時はこの詩が彼女の若き時の美を留めているはずだ」との内容を when, then, then, when, の繰り返しで述べている。この接続詞のレトリックも Shakespeare のソネット II, XII, XV, XXX, XLIII, LXVI, CVI（2 番、12 番、15 番、30 番、43 番、66 番、106 番）に見えることは興味深い（これについては渡辺秀樹 2021「ソネットに見える繰り返しのレトリック再考　"when～, then～" の繰り返しを中心に」で既に述べた）。Allott の Daniell 引用をきっかけにしてその *Delia* を通読すると、この when, then の繰り返しパタンは XXXV に始まり XXXIX までの 5 個のソネットに連続して用いられていることが分かった。そこでは Shakespeare のソネットが美青年に対して主張するのと同じく、時が流れて、女性の若さと美が失われて、鏡を見た時（glass XXXV-10, XXXVIII-3）に映る老いた姿に悲しむときに、自分のこの詩（my verse XXXV-11; this picture which I here present thee,/ Limned with a pencil XXXIX-5-6）が若き美を後世（posterity XXXIX-10）へと伝えると、時のテーマに時の副詞・接続詞が多用されているからである。つまり、Shakespeare は Daniell の詩語と文章構造を借りて、変奏を行っていると言えよう。

The Sonnets での Time への apostrophe は冒頭にあげた第 19 篇だけでなく、123 編にも見える。

No, **Time**, **thou** shalt not boast that I do change:

Thy pyramids built up with newer might
To me are nothing novel, nothing strange;
They are but dressings of a former sight.
Our dates are brief, and therefore we admire
What **thou** dost foist upon us that is old;
And rather make them born to our desire
Than think that we before have heard them told.
Thy registers and **thee** I both defy,
Not wondering at the present nor the past,
For **thy** records and what we see doth lie,
Made more or less by **thy** continual haste.
This I do vow and this shall ever be;
I will be true despite **thy** scythe and **thee**. (*Sonnet* CXXIII)

この 123 篇は美青年を歌う 126 篇までの連鎖を締めくくるもので、19 篇での Time への呼びかけへの対照をなして抱合構造をなす。事実、この後 126 篇で "Time's fickle glass" を含む 2 回の出現の後、名詞 *time* は、いかなる意味でももう *Sonnets* には出現しないのである。

O thou, my lovely boy, who in thy power
Dost hold **Time's** fickle glass, his sickle, hour;
Who hast by waning grown, and therein show'st
Thy lovers withering as thy sweet self grow'st— (*Sonnet* CXXVI)

Sonnets における Time のメタファーについては次の大森論文参照。

§ 5 *The Rape of Lucrece* に見られる Time と Opportunity：真実を示すものと罪への導き手

The Rape of Lucrece には擬人化された時や運命への呼びかけが連続する。Time へは 2 回だが、下位語というべき Fate へ 1 回、Occasion へ 1 回、Fortune へ 6 回、Opportunity へも 6 回と、Lucrece は類義語を並べ立てて、夫が不在の晩に好色で邪悪な王子を館に泊めることになり、強姦の機会を与えて、恥を知る自分に自殺の道を選ばせた運命を呪い、強姦者 Tarquin、事件が起きた晩をも呪うのである。先にその呪詛の相手が列挙されている連を見よう。

'In vain I rail at **Opportunity**,
At **Time**, at **Tarquin**, and uncheerful **Night**;
In vain I cavil with mine infamy,
In vain I spurn at my confirm'd despite:
This helpless smoke of words doth me no right.
The remedy indeed to do me good
Is to let forth my foul-defiled blood. (*The Rape of Lucrece* 1074-1080)

764 行、771 行、799 行での、この恐ろしい晩 (Night) への呼びかけに続いて、876 行では強姦を可能にした機会 (Opportunity) へ呪いの矛先が移る。

'O **Opportunity**, thy guilt is great!
'Tis thou that executest the traitor's treason:
Thou set'st the wolf where he the lamb may get;
Whoever plots the sin, thou 'point'st the season;
'Tis thou that spurn'st at right, at law, at reason;
And in thy shady cell, where none may spy him,
Sits Sin, to seize the souls that wander by him. (*The Rape of Lucrece* 876-882)

そして Opportunity への呪詛を 7 行 7 連続けた後で、いよいよ Time への詰りが始まる。ここでは Opportunity を Time の従僕と捉えて、「過ちを正し、戦う王たちを和解させ、虚偽を暴いて真実を

示す」という Time 本来の役目・栄光 (Time's office, Time's glory) を、その従僕が裏切りって台無しにしたことから、権威・栄光を失った時に対し「奇形の」(Mis-shapen) なる形容辞がついていることが注目されよう。この語は先に見た Poole の詩華集のリストには見えないが、Allott の抜粋では採られていた。

'Mis-shapen **Time**, copesmate of ugly **Night**,
Swift subtle post, carrier of grisly care,
Eater of youth, false slave to false delight,
Base watch of woes, sin's pack-horse, virtue's snare;
Thou nursest all and murder'st all that are:
O, hear me then, injurious, shifting Time!
Be guilty of my death, since of my crime.

Why hath **thy** servant, **Opportunity**,
Betray'd the hours **thou** gavest me to repose,
Cancell'd my fortunes, and enchained me
To endless date of never-ending woes?
Time's office is to fine the hate of foes;
To eat up errors by opinion bred,
Not spend the dowry of a lawful bed

Time's glory is to calm contending kings,
To unmask falsehood and bring truth to light,
To stamp the seal of time in aged things,
To wake the morn and sentinel the night,
To wrong the wronger till he render right,
To ruinate proud buildings with the hours,
And smear with dust their glittering golden towers; (*The Rape of Lucrece* 925-945)

このように本詩においては、悪事は Night, Occasion, Opportunity が引き起こしたとされており、そうした従僕の悪事を止められなかった Time は「不具の時よ」と罵倒されているのである。その罵倒の言葉の中に実は、本来の「時の栄光」である「過ちをただす・真実を明らかにする」役目が述べられており、次ぎの *Twelfth Night* と合わせ見ることで、Time のポジティブな側面にも注目していた Shakespeare という詩人の特徴が浮かび上がりはしないだろうか。

§ 6 *Twelfth Night* の Time への呼びかけ：縛れを解くもの

戯曲では中心人物の台詞にしばしば Time とその下位語への呼びかけが見られる。よく知られているところでは Juliet の Fortune に対する、Macbeth の Fate と Time への呼びかけがある。

O **Fortune**, **Fortune**, all men call thee fickle:
If thou art fickle, what dost thou with him
That is renowned for faith? Be fickle, **Fortune**:
For then I hope thou wilt not keep him long,
But send him back. (*Romeo & Juliet* III. v. 60)

Rather than so, come **fate**, into the list,
And champion me to th'utterance. (*Macbeth* III. i. 70-71)

Time, thou anticipatest my dread exploits (*Macbeth* IV. v. 144)

Juliet の台詞では、Fate は 3 度呼びかけられ、3 度 fickle「気まぐれな・不安定な」と形容されており、"fickle Fate" は "Tyrant Time" のような、本質を示すが如き頭韻句となっている。こうした典型的な悲劇においては、自分の運命を狂わせる、悪事に向かわせる運命・時へ向けて、主人公

が嘆きつつ呼びかけているのである。

登場人物による Fate, Fortune と Time への呼びかけの連続が喜劇で見られるのは *Twelfth Night* である。[9] 男装の Viola が小性 Cesario として Orsino 公爵の恋の使いで Olivia の館に赴くが、色よい返事は貰えず、逆に、機知に溢れる問答とその美しい顔つきに Olivia が恋をしてしまう。その Olivia の台詞の終わり 4 行、1 幕 5 場の結尾に Fate への apostrophe が見える。

I do I know not what, and fear to find
Mine eye too great a flatterer for my mind.
Fate, show thy force: ourselves we do not owe.
What is decreed must be: and be this so. (*Twelfth Night* I. v. 312-315)

そして館を去った Viola へ使いをやり、Viola が渡しもしなかった指輪を返すと言って届けさせ、公爵の用でなければまた会いに来るも可、と告げ知らせるのだ。その Viola の台詞に今度は Fortune を主語にした祈願文が現れている。「運命よ、私の美しさが彼女を魅了しなかったことを」と。

I left no ring with her: what means this lady?
Fortune forbid my outside have not charm'd her!
She made good view of me; indeed, so much,
That sure methought her eyes had lost her tongue,
For she did speak in starts distractedly.
She loves me, sure; the cunning of her passion
Invites me in this churlish messenger. (*Twelfth Night* II. ii. 16-22)

そして独り言で先の会見の様子を思い出しながら、Olivia が自分を愛してしまったと確信した Viola は、長い台詞を次の押韻 2 行で結ぶ。

O **Time**, thou must untangle this, not I,
It is too hard a knot for me t'untie. (*Twelfth Night* II. ii. 39-40)

「時よ、この縺れを解きほぐすのはお前だ、私でない。こんな縺れは、私にはほどけない」と、この 2 行は所謂 rhyming tag で、劇の各場を締めくくる時に Shakespeare は多用しているが、無韻で続く詩行中に現れる押韻句は詩的情感を高めるだけでなく、ソネットでの最終押韻 2 行の如く、先行内容をまとめて結論付ける機能を果たすものだ。この Fate, Fortune と Time への呼びかけの初めがやはり 1 幕 5 場の結尾に置かれた rhyming couplets 2 連 4 行からなることも注目されよう。Olivia の呼びかけは、自分に求婚する公爵ではなく、その小姓に恋をしてしまった自分の運命に対してなされ、片や、男装して仕える公爵を女性として愛する Viola は、自分を男だと思っている Olivia との愛の縺れは、時の経過でしか解れないと、Time へ向けてなされている。Olivia と Viola による運命や時への呼びかけは、こう並べればまるで歌舞伎の渡り台詞（割り台詞）のように、女同士の恋に巻き込まれる二人への運命のいたずらを観衆に印象づけるものだが、実は第 1 幕 2 場の終わりに Viola は自分の運命を Time に委ねることを押韻句で口にしている。

What else may hap to **time** I will commit,
Only shape thou thy silence to my wit. (*Twelfth Night* I. ii. 57-58)

第 2 場の Viola の台詞を知れば、1 場のこの time も、やはり擬人化された時の翁として大文字表記されるべきだと思うが、First Folio でも大場版、Oxford 版、Arden 版、Dover Wilson 版でも小文字表記で普通名詞扱いになっている。

そして劇の終局、縺れが解けて二組の夫婦 (Sebastian と Olivia、Orsino と Viola) が誕生するとなった時、Orsino が喜び述べる台詞の中にも golden time 「黄金の時」が当然の如く現れるのだ。

[9] この戯曲中で名詞 fortune は 14 回、fate は 3 回用いられている。

He hath not told us of the captain yet,
When that is known and golden **time** convents,
A solemn combination shall be made
Of our dear souls.　(*Twelfth Night* V. i. 363-366)

この劇での Time は *The Sonnets* での暴君でも *Lucrece* での従僕に反逆される頼りない「奇形」でもなく、縺れを解き、真実を知らしめる、人を最後に祝福するものである。まさに Elizabeth 朝の諺 "Let tyme trie. Time trieth trouth in euery dothe." 「時の裁判にかけよ、いかなる疑いにも時の審判で真実が明かされる」が具現化された劇である。[10]

以上、16 世紀から 17 世紀初頭の詩華集での Time の形容辞から、同時代の類似作品、そして Shakespeare の詩作品と戯曲における様々な Time のイメージを見て来た。悲劇が主要登場人物の死で終わるなら、喜劇は登場人物の結婚で終わる。悲劇での Time が人を悪に唆し、破滅させ、名声を忘却させる神であるなら、喜劇の Time は縺れを解き、真実を露わにし、祝福する神と言えるかもしれない。

Shakespeare が当時の諺「時の審判にかけよ」"Let Time try" を引用して、時を裁判官に見立てた例を最後に見よう。[11]

Well, Time is the old justice that examines all such
Offenders, and let **Time** try. Adieu.
(*As You Like It*　IV i. 189¯ 190)

---

[10]　Habenicht (1963). *John Heywood's A Dialogue of Proverbs* (1546) p. 154. (line 1903).　Arden 版の注には、この表現の出所として Heywood の集めたこの諺は言及されていない。代わりに *Troilus and Cressida* IV. v. 224-225 の "And that old common arbitrator, Time,/ Will one day end it." が参照されている。

[11]　本稿は筆者の大阪大学大学院言語文化研究科における最後の論文である。年末年始の異常な忙しさの中、呆然としている筆者を励まし、脱稿まで導いて下さったのは、同僚で二十年来の共同研究者の大森文子教授であった。千葉大学 3 年生の時に *The Sonnets* を読み始めて、専門の古英詩研究の傍ら、沙翁の詩や戯曲を読み続けて来た。関西学院大学の英語史の初期近代英語資料として、言語文化研究科の認知レトリック論の精読テクストとして、度々Shakespeare の作品を読んだ。言語文化レトリック研究会主催者大森文子教授、主要メンバーのジェリー・ヨコタ教授、アンディー村上スミス准教授、これまでに参加された院生諸君、言語文化研究科の同僚の先生方、様々に助けて頂いた有能な事務員の方々に感謝致します。レトリック研究会は私の golden time でした。

参考文献

Allot, Robert, 1600. *Englands Parnussus*. A Scolar Press Facsimile. (1970) Menston:The Scolar Press Limited.

Booth, Stephan, 1978. *Shakespeare's Sonnets*. (Revised Edition) Yale University Press.

Bullen, A. H., ed. 1899. *England's Helicon*: *A Collection of Lyrical and Pastoral Poems published in 1600.* London: Lawrence & Bullen Ltd.

Burrow, Colin (ed.) (2002) *The Complete Sonnets and Poems*. The Oxford Shakespeare. Oxford: Oxford University Press.

Cawdray, Robert, 1600. A Treasurie or Store-House of Similes. London: Thomas Creed.

Chew, S. C., 1939. "Time and Fortune," *A Journal English Literary History*, 6, 2: 83-113.

Crawford, Charles, ed. 1913. *Englands Parnassus Compiled by Robert Allot*, 1600. Oxford: At the Clarendon Press.

Crow, Martha Foote, 1896. *Elizabethan Sonnet-Cycles. Delia by Samuel Daniel & Diana by Henry Constable*. London: Kegan Paul, Trench, Trübner and Co.

Driver, Tom, 1960. The Sense of History in Greek and Shakespearean Drama. New York: Columbia University Press.

Duncan-Jones, Katherine (ed.) (1997) *Shakespeare's Sonnets*. The Arden Shakespeare. London: Bloomsbury Publishing Plc.

Edmondson, Paul, and Wells, Stanley, eds., 2020. *All the Sonnets of Shakespeare*. Cambridge: Cambridge University Press.

Gollancz, Israel, 1919. *Shakespeare's Sonnets* (Temple Shakespeare). J. M. Dent.

Habenicht, Rudolph E., ed.,1963. *John Heywood's A Dialogue of Proverbs.* University of California Press.

Kingsley-Smith, Jane, 2019. The Afterlife of Shakespeare's Sonnets. Cambridge: Cambridge University Press.

Miller, Frank Justus, trans., 1976. *Ovid IV Metamorphoses II.* Loeb Classical Library. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

Moreira, Lida da Cruz Cordeiro, 2008. "The Conception of Time in Shakespeare's *Sonnets*," *A Cor das Letras* 8:247-264. Universidade do Estado do Rio de Janeiro.

Panofsky, Erwin, 1962. *Studies in Iconology: Humanistic Themes in the Art of the Renaissance.* Harper Torchbooks. New York: Harper & Row.

Poole, Joshua, 1657. *The English Parnassus.* The Facsimile Reprint. (1972) Menston:The Scolar Press Limited.

Post, Jonathan F. S., 2017. Shakespeare's Sonnets and Poems (A Very Short Introduction). Oxford University Press.

Quinones, Ricardo J., 1965. "Views of Time in Shakespeare" *Journal of History of Ideas* 26, 3: 327-352. University of Pennsylvania.

Rubinstein, Frankie, 1989. *Shakespeare's Sexual Puns and Their Significance*. (Second Edition) Macmillan.

Schoenfeldt, Michael, ed., 2010. *A Companion to Shakespeare's Sonnets*. Wiley-Blackwell.

Smith, J. C., 1909. *Spenser's Faerie Queene*. Two Volumes. Oxford: at the University Press.

Stern, Tiffany, 2015. "Time for Shakespeare: Hourglass, sundials, clocks and early modern theatre," Journal of the British Academy, 3: 1-33.

Tilly, Morris Palmer, 1950. *A Dictionary of the Proverbs in England in the Sixteenth and Seventeenth Centuries.* University of Michigan Press.

Vendler, Helen, 1997. *The Art of Shakespeare's Sonnet*. Harvard University Press.

Wilson, John Dover, 1966. *The Sonnets.* Cambridge: Cambridge University Press.

Wyld, Henry Cecil, 1923. *Studies in English Rhymes from Surry to Pope*. Russell and Russell.

Yuasa, Nobuyuki, 1961. "A Study of Metaphor in Spenser's *Amoretti*," *Studies in English Literature*, 37: 165-184. The English Society of Japan.

エルヴィン・パノフスキー著　浅野徹・阿天坊燿・塚田孝雄・永澤峻・福部信敏訳 2002.『イコノロジー研究』筑摩書房

大場建治（編注訳）2018.『ソネット詩集』（研究社シェイクスピア全集別巻）東京：研究社.

大森文子 2004. 「聖書に見る精神と四大のメタファー」『メタファー研究の方法と射程（言語文化共同研究プロジェクト 2003）』渡辺秀樹編集）大阪大学大学院言語文化研究科、1-9.

----- 2015.「Milton の叙事詩的比喩とメタファー認識」『言葉のしんそう（深層・真相）』385-397.

----- 2018a.「喜びと悲しみのメタファー：Shakespeare の *Sonnets* をめぐって」『レトリック、メタ

ファー、ディスコース（言語文化共同研究プロジェクト 2017）』（渡辺秀樹編集）大阪大学大学院言語文化研究科、19-28.
------ 2018b.「人の心と空模様：シェイクスピアのメタファーをめぐって」『メタファー研究 1 』（鍋島弘治朗・楠見孝・内海彰編）東京：ひつじ書房、175-104
------ 2021.「Shakespeare の *Sonnets* における逆転のレトリック」『感情・感覚のレトリック（言語文化共同研究プロジェクト 2020』（渡辺秀樹編集）大阪大学大学院言語文化研究科、15-27.
川地美子　1998.『シェイクスピアの時間論』成美堂.
川西進編 1971. 『*Shakespeare's Sonnets*』鶴見書店.
木村俊夫 1969. 『時の観点からみたシェイクスピア劇の構造』東京：南雲堂.
櫻井正一郎 1979.『結句有情—英国ルネサンス期ソネット論—』京都：山口書店.
菅井孝義　1992. 「虚構の物語における時間の二重性」『北海道教育大学紀要』43, 1: 71-81.
高松雄一訳 1986. 『ソネット集』岩波文庫.
高本愛子 2001. 「シェイクスピアと時間」『国際文化論集』24: 97-127.
中西信太郎訳 1976. 『ソネット集』英宝社.
鳴島史之 1988.「シェイクスピアの＜目＞のイメージに関する研究 (1)」『北見工業大学研究報告』19, 243-257.
藤澤博康 2012. 「『ソネット集』における嗅覚　『ソネット集』と五感研究への試論」『英語英文學研究』 56: 27-38.　広島大学英文学会
松井正道 1967. 「シェイクスピアにおける擬人化の問題」『北見工業大学研究報告』　2, 1: 137-14
嶺卓二（編注）（1974）*Sonnets by William Shakespeare.* 東京：研究社.
吉田健一訳 2007.『シェイクスピア／シェイクスピア詩集』東京：平凡社.
吉田秀夫生訳 2008. 『シェイクスピアの「ソネット集』南雲堂.
由井哲也 2010.「『ロミオとジュリエット』における時間構造」『フェリス女学院大学文学部紀要』45: 217-233.
渡辺秀樹 2004. 「人名のメタファー研究序章　シェイクスピア劇の登場人物名に由来する *OED2* の見出し語と用例考察」『メタファー研究の方法と射程（言語文化共同研究プロジェクト 2003）』（大森文子編集）大阪大学大学院言語文化研究科 23-33.
----- 2011. 「シェイクスピアにおける賞賛と罵倒のレトリック　動物名人間比喩用法の対義・類義の構造」『文化とレトリックトリック認識（言語文化共同研究プロジェクト 2010）』（大森文子編集）大阪大学大学院言語文化研究科 1-20.
----- 2019.「英詩感情語メタファーの系譜第 2 回　シェイクスピア『ソネット集』のレトリック再考：感情語の類義・反義を中心に」『レトリックとコミュニケーション（言語文化共同研究プロジェクト 2018）』（大森文子編集）大阪大学大学院言語文化研究科 1-10.
----- 2021.「ソネットに見える繰り返しのレトリック再考　“when～, then～” の繰り返しを中心に」『感情・感覚のレトリック（言語文化共同研究プロジェクト 2020）（渡辺秀樹編集）大阪大学大学院言語文化研究科、3-13.

時のメタファーとシェイクスピア

大森文子

１．はじめに[1]

本研究は、〈時〉という概念を理解するためのメタファーの構造の可能性について、Shakespeare の作品の観察を通して考察する試みである。本稿では *As You Like It* と *Sonnets* を分析対象に選び、これらの作品を通読するとともに、インターネット上のデータベース OpenSourceShakespeare を援用して、“time” および意味関係の深い “year” “month” “week” “day” “hour” “minute” が 2 作品中に出現する箇所を特定した上で、時の経過および時の作用を表す比喩表現に絞って観察した。本稿で考察した *As You Like It* の引用は Hattaway ed. (2000) を参照し、*Sonnets* の引用は Burrow ed. (2002) を参照した。本稿中の引用の下線部はすべて筆者による。

本研究のきっかけとなったのは、筆者が開講する今年度（2021 年度）の言語文化研究科博士前期課程の春夏学期の科目「認知レトリック論研究 A」での受講生との討論であった。感染症予防のためオンライン会議システムを用いた遠隔授業を余儀なくされたが、受講生諸氏の真摯な取り組みにより、実りある議論ができ、筆者自身も大いに刺激を受けた。[2]

２．経過する〈時〉

2.1　Shakespeare の「名言」を手がかりに

上記の授業では、「名言から学ぶ認知レトリック」を討論のテーマに掲げた。『シェイクスピア名言集』（小田島雄志著、1985）や『英語名言集』（加島祥造著、1993）を討論のための資料とし、名言の中に見えるレトリックに、認知言語学の観点から光を当ててみようという試みであった。

この授業で、Shakespeare の次の名言を取り上げた回があった。

(1) Time travels in diverse paces with diverse persons. (Shakespeare, *As You Like It*, III. ii.)
（時はそれぞれの人によってそれぞれの速さで歩むものです。（小田島雄志訳））

小田島（1985）はこの名言が描く「心理的時間」について、「われわれの身のまわりにも流れている。授業時間は遅々として進まないのに、昼休みはあっという間に過ぎてしまう、というように。あるいは、小学生のころは悠然たる大河と見えた時が、年をとるとともに飛沫をあげる急流と思われてくる、というように。」と述べる（pp. 142-143）。

2.2〈時〉の経過に関する Lakoff and Johnson の概念メタファー

この心理的時間について、認知言語学の観点からはどのように分析すればよいのか。授業における討論で、受講生からは Lakoff and Johnson (1980, 1999) の時の経過に関する 2 種類のメタファーの見解が提示された。〈時が動き、人（＝時を観察する者）が静止する〉というとらえ方と、〈人が動き、時が静止する〉というとらえ方である。Lakoff and Johnson (1980) は、時の経過に関するこの 2 種類の概念化とそれぞれの用例を次のように表記している。

TIME IS A MOVING OBJECT
The time will come when …
The time has long since gone when …
The time for action has arrived.

TIME IS STATIONARY AND WE MOVE THROUGH IT
As we go through the years, …

---

[1] 本研究は以下の科学研究費補助金の助成を受けている。基盤研究(C)「英語メタファーの認知詩学」（研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹）、基盤研究(C)「英語メタファーの認知詩学 II」（研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹）、基盤研究(C)「英詩メタファーの構造と歴史 II」（研究代表者渡辺秀樹、分担者大森文子）。

[2] 本授業を受講し議論に参加された受講生諸氏、TA として討論の活性化に寄与された博士後期課程 2 年の岡部未希氏、同科目「認知レトリック論研究」を開講されている関係で本授業に参加され多くの有益なコメントをくださった渡辺秀樹教授に感謝申し上げたい。

As we go further into the 1980s, …
We're approaching the end of the year.　（Lakoff and Johnson (1980:42-44) 参照）

さらに、Lakoff and Johnson (1999) は、この 2 つの概念化についてさらに精緻化して議論し、メタファーの名称を、THE MOVING TIME METAPHOR と THE MOVING OBSERVER METAPHOR という簡潔明瞭なものに変更している。それぞれのメタファーに関わる空間スキーマや、概念領域間の写像をまとめると、以下のようになる。

THE MOVING TIME METAPHOR
〔空間スキーマ〕
物体を観察する人（observer）が一人、静止して、一定方向に顔を向けている。たくさんの物体が無限に長く続く連なりとなり、一列で動いていて、人の前から後ろへと通り過ぎていく。それらの物体は動く方向に正面を向けているものとして概念化される。（p. 141 参照）
〔概念領域間の写像〕
動く物体を見ている観察者がいる場所が〈現在〉と、観察者の前に広がる空間が〈未来〉と、観察者の後ろに広がる空間が〈過去〉と、動く物体が〈時〉と、観察者のいる場所を通り過ぎていく〈時〉の動きが〈時の経過〉と対応関係を結んでいる。

The Location Of The Observer	→	The Present
The Space In Front Of The Observer	→	The Future
The Space Behind The Observer	→	The Past
Objects	→	Times
The Motion of Objects Past The Observer	→	The "Passage" Of Time　（p. 142 参照）

THE MOVING OBSERVER METAPHOR (or THE TIME'S LANDSCAPE METAPHOR)
〔空間スキーマ〕
観察者は、一定の場所にとどまることなく動いている。観察者はいくつもの場所をたどって行くが、その経路上の場所ひとつひとつが、ひとつの〈時〉である。
〔概念領域間の写像〕
観察者がいる場所が〈現在〉と、観察者の前に広がる空間が〈未来〉と、観察者の後ろに広がる空間が〈過去〉と、観察者が動いてたどる経路上にある場所が〈時〉と、観察者の動きが〈時の経過〉と、観察者が動いた距離が〈経過時間の長さ〉と対応関係を結んでいる。

The Location Of The Observer	→	The Present
The Space In Front Of The Observer	→	The Future
The Space Behind The Observer	→	The Past
Locations On Observer's Path Of Motion	→	Times
The Motion of The Observer	→	The "Passage" Of Time
The Distance Moved By The Observer	→	The Amount Of Time "Passed"　（p. 146 参照）

2.3　Rosalind の〈時〉の概念化

上記の Lakoff and Johnson の 2 種類のメタファーは説得力が高く、〈時〉という概念を動きの観点からとらえる認知言語学研究は、彼らの見解を基盤とするのが通例である。筆者の授業の受講生が、上記の名言（1）の時の経過のメタファーを考察するにあたり、Lakoff and Johnson の見解を分析の手立てとしようとしたのも無理からぬことである。

そこで授業では、（1）の名言の前後のコンテクストにまで観察の範囲を広げることを受講生たちに勧めた。（1）は *As You Like It* 3 幕 2 場における主人公 Rosalind が男装で正体を隠したまま恋人 Orlando に語りかける台詞である。この台詞の前後のコンテクストを以下に引用する。

(2) ROSALIND　Then there is no true lover in the forest, else sighing every
minute and groaning every hour would detect the lazy foot of Time
as well as a clock.
ORLANDO　And why not the swift foot of Time? Had not that been as

proper? 260
ROSALIND By no means, sir. Time travels in diverse paces with diverse persons. I'll tell you who Time ambles withal, who Time trots withal, who Time gallops withal, and who he stands still withal.
ORLANDO I prithee, who doth he trot withal?
ROSALIND Marry, he trots hard with a young maid between the contract of her marriage and the day it is solemnized. If the interim be but a sennight, Time's pace is so hard that it seems the length of seven year. 265
ORLANDO Who ambles Time withal?
ROSALIND With a priest that lacks Latin and a rich man that hath not the gout; for the one sleeps easily because he cannot study, and the other lives merrily because he feels no pain; the one lacking the burden of lean and wasteful learning, the other knowing no burden of heavy tedious penury. These Time ambles withal. 270
ORLANDO Who doth he gallop withal? 275
ROSALIND With a thief to the gallows; for though he go as softly as foot can fall, he thinks himself too soon there.
ORLANDO Who stays it still withal?
ROSALIND With lawyers in the vacation; for they sleep between term and term, and then they perceive not how Time moves. 280

(William Shakespeare, *As You Like It*, III. ii. 256-280.)

Rosalindの「だらだらした時の歩み」("lazy foot of Time" (l. 257)) という言葉に反応したOrlandoが、なぜ「速やかな時の歩み」("the swift foot of Time"(l. 259)) と言わないのか、その方が適切ではないのかと尋ねる。ここまでのやりとりは一見、Lakoff and Johnson (1999) の THE MOVING TIME METAPHOR の具現化のように思える。Rosalindはこの問いかけに対し「時が進む速度は人によって違う」("Time travels in diverse paces with diverse persons." (ll. 261-262)) と答える。これが小田島（1985）が名言と認定した（1）の台詞である。Rosalindは "I'll tell you who Time ambles withal, who Time trots withal, who Time gallops withal, and who he stands still withal." (ll. 262-263) と続ける。

ここで注目すべきは、Timeを主語とする3つの動詞（amble, trot, gallop）の使用である。[3] これら3つの動詞の意味に共通するのは、すべて馬の歩き方あるいは走り方に由来するということである。*The Oxford English Dictionary* (*OED*) にはそれぞれの語の原義が次のように示されている。

amble ***v***. 1.a. *intransitive*. Of a horse or other quadruped. To move forwards at the gait or pace of an amble (AMBLE *n*. 1). More generally: to move at a smooth, easy, or leisurely pace.
trot ***v***. 1.a. *intransitive*. Of a horse, and occasionally other quadrupeds: to go at the gait called the trot (see TROT *n*.[1] 1).
gallop ***v***.[1] 1.a. *intransitive*. Of a horse (occasionally of other quadrupeds): to go at a gallop (see GALLOP *n*. 1).

OEDではこれらの原義に基づく比喩義も記載されていて、それぞれの比喩義の用例として、*As You Like It* 3幕2場の当該箇所が掲載されている（OED "amble" *v*. 2.a., "trot" *v*. 1.c., "gallop" *v*.[1] 5.a. 参照）。

上記の原義の指示に従い、"amble" "trot" "gallop" の名詞用法を参照する。"amble" は日本語では「側対歩」と呼ばれる馬の歩き方で、OEDでは「スムーズで気楽な足取り」（a smooth or easy gait）であり、「特に長距離の乗馬に適した足取り」（particularly suitable for long-distance riding）であると記されている（OED "amble" *n*. 1. 参照）。

"trot" は日本語では「斜対歩」あるいは「速歩（はやあし）」と呼ばれ、OEDによると「歩きと走りの中間」（between walking and running）で、「対角線の二脚（右前脚と左後脚、左前脚と右後脚）をほぼ同時に動かす」（the legs move in diagonal pairs almost together）馬の歩き方である。[4]

---

[3] 厳密に言えば、"…and who he stands still withal" (l. 263) における "stand" も動きに関連する動詞だと言えるが、ここでは動きを止めた状態を表すので、いったん除外して考える。

[4] 筆者の授業でテクストとした『シェイクスピア名言集』（小田島雄志著、1985）では、上記の名言（1）に続く文

“gallop” は日本語では「襲歩」あるいは「競走駆歩」と呼ばれ、馬の最も速い駆け方を言う。OEDでも「馬（時にその他の四足獣）の最も早い動き」（The most rapid movement of a horse (occasionally of other quadrupeds)）であり、その動きでは「一駆けするたびに、脚が胴体の下で曲がって馬の体が完全に地面から離れる」（in the course of each stride the animal is entirely off the ground, with the legs flexed under the body）と説明されている。

Rosalind はさらに、時が上記の三種の歩み方をするのはどんな人の場合なのかという Orlando の問い（264行目、269行目、275行目）に順次答える。時が trot するのは婚約してから式を挙げるまでの娘の場合で、その間がたったの7日間だとしても、時の足取りはとても辛そうで、7年もの長さに思えてしまう（265-268行目）。時が amble するのはラテン語を知らない司祭の場合や、痛風にかかっていない金持ちの場合で、前者は勉強ができないからよく眠れるし、無駄な学問という重荷を背負っていない。後者は痛みを感じないから愉快に暮らすことができ、重くうんざりするような貧乏の重荷を知らずに済む。こういう人たちと一緒に進む時はゆったりとした足取りになる（270-274行目）。時が gallop するのは絞首台へ引かれていく泥棒の場合で、できるだけ足をそっと着地させても、あっという間に到着してしまったと思う（276-277行目）、と。

これら3つの動詞が本来は馬の足取りを表すことをふまえた上で、これらの動詞が登場する直前にRosalindが言った “Time travels in diverse paces with diverse persons.” (ll. 261-262) を再度観察すると、“paces” も一般的な意味での「速度」ではないことに気づく。OEDでは、

> **pace** ***n***. 6.a. Any one of the various gaits of a horse; *esp*. a recognized trained gait such as the walk, trot, canter, or gallop. Also in figurative context.

との語義が示され、このRosalindの台詞が用例として挙げられている。ここでは “diverse paces” が馬のさまざまな足取りを元の意味とする比喩義で用いられているのである。

これらの観察から、(2) における Rosalind の台詞は、馬術用語の比喩で統一されていることがわかる。そして注目すべきは、 “withal” や “with” といった前置詞の多用が明瞭に示すように、馬に喩えられた時が、人を乗せてともに動き、なおかつ乗り手の心理状態をまるで馬の如く意識しているということである。trot する時は挙式前の娘を乗せ、amble する時は司祭や金持ちを乗せ、gallop する時は処刑される泥棒を乗せて動く馬として描かれ、乗り手の気持ち（娘は目的地に早く到着したいと焦り、司祭や金持ちは愉快で気楽、泥棒は処刑を免れないことを諦めながらも少しでも遅らせたいとむなしく願う気持ち）を反映した動きである。

さらに、ここまで観察していなかった「時が人を乗せたまま立ち止まって動かない」場合についての Rosalind の Orlando への説明（278-280 行目）に目を向けると、休暇中の弁護士が挙げられている。休暇中、すなわち裁判所の開廷期と開廷期の間は弁護士は眠って過ごすため、時の経過が感じられない、と。確かに時の動きを感じるのは人間が起きて活動しているときであり、眠っている人にとっては時も止まったままである。

人馬一体となったこのような動きの観点から時の経過を捉える認識のしかたは、先に言及した Lakoff and Johnson (1980, 1999) の THE MOVING TIME METAPHOR や THE MOVING OBSERVER METAPHOR とは異質なものである。THE MOVING TIME METAPHOR では〈時〉が動き、それを観察する〈人〉は動かない。THE MOVING OBSERVER METAPHOR では〈時〉は動かない風景のようなもので、それを観察しながら〈人〉の方が動く。Rosalind のメタファーはそのいずれでもなく、〈人〉を観察者（OBSERVER）としてではなく馬上の騎手（RIDER）として認識する、〈乗馬のメタファー〉（THE HORSE RIDING METAPHOR）と名付けることができよう。

脈を、「そのあと彼女は具体例をいくつか示す。時がよちよち歩きをするのは、婚約してから式を挙げるまでの娘。時がのんびり歩きをするのは、ラテン語を知らない神父（勉強をしなくてすむ）と通風をわずらっていない金持ち（なんの苦痛もない）。時が全力疾走するのは、絞首台に引っ立てられる泥棒。時が完全停止するのは、休暇中の弁護士。」(p. 152) と説明している。「婚約してから式を挙げるまでの娘」のくだりにおける時の動作を表す語は、Shakespeare の原文では “trot” である。この “trot” の解釈を授業では話題にし、参考資料として小田島雄志訳『お気に召すまま』(1983) も参照したところ、同様に “trot” は「よちよち歩きをする」と訳されていた。 “amble” には「のんびり歩きをする」、“gallop” には「全力疾走する」という訳語が充てられ、馬の足並みを表す語としても通用するが、“trot” の「よちよち歩きをする」は、馬の動きを連想しがたく、また、この訳語では、“amble” と “trot” が表す速度の違いが逆になっているようにも感じられ、少々語弊があるのではないだろうか。

【表１】Rosalindの〈乗馬のメタファー〉（THE HORSE RIDING METAPHOR）

根源領域〈乗馬〉		目標領域〈時の経過〉
馬		時
騎手		人
馬は騎手と共に動く		時は人とともに動く
馬は騎手により進み方を変える	⇒	時は人により速度を変える
馬が側対歩（amble）で進む		時がのんびり経過する
馬が走るよりは遅い斜対歩（trot）で進む		時が速くはない速度で経過する（もどかしい）
馬が全力疾走（gallop）で進む		時が全速力で経過する
馬が停止する		時が停止する

Rosalindの（2）の台詞は、時の経過についての概念化の可能性が、〈時が動き人が動かない〉か、〈人が動き時が動かない〉かの二者択一ではないことを教えてくれる。ただし、*As You Like It* における時の経過を表す表現の基盤となる認識が〈乗馬〉のメタファーのみというわけではない。たとえば2幕7場で、森で暮らす老公爵たちに「人も寄り付かないこの荒れ地で、鬱蒼たる木々の枝の陰で、緩やかに過ぎていく時をやり過ごしておられるあなた方がどのようなお方か存じませんが、…」(But whate'er you are / That in this desert inaccessible, / Under the shade of melancholy boughs, / Lose and neglect the creeping hours of time – (II. vii. 109-102)) と言うOrlandoの台詞には、這うような緩慢な動き方をする〈時〉と、去っていく時を無頓着にやり過ごす〈人〉が描かれ、そこにはTHE MOVING TIME METAPHORが反映されている。Rosalindの（2）の台詞に見られる認識は独特なものであり、この場面以外には表現されていない。しかし、この台詞は、概念領域の要素とその対応関係を詳細に示し、写像の構造に論理的整合性があるという点で高い説得力をもつ。そして、時を過ごす私たちのその時現在の心理状態や、未来の出来事に対する認識（期待や恐怖など）によって、時の経過の速さが異なるように感じるという感覚を巧みに説明してくれる。

2.4　Shakespeareの独自性

上述したRosalindの台詞からうかがえるようなShakespeare独特の〈時〉の経過の捉え方は、他の作品には表現されているのだろうか。筆者はまだShakespeareの諸作品を広く観察するには至っていないが、Sonnets 154篇の中には〈時〉の経過に関する特異な概念化が見られる。

(3) Like as the waves make towards the pebbled shore,
So do our minutes hasten to their end,
Each changing place with that which goes before,
In sequent toil all forwards do contend.
Nativity, once in the main of light,
Crawls to maturity, wherewith being crowned
Crookèd eclipses 'gainst his glory fight,
And Time that gave doth now his gift confound.
Time doth transfix the flourish set on youth,
And delves the parallels in beauty's brow,
Feeds on the rarities of nature's truth,
And nothing stands but for his scythe to mow.
And yet to times in hope my verse shall stand,
Praising thy worth, despite his cruel hand.　(Sonnet 60)

この詩の１行目から４行目で描かれる〈時〉は "hasten"（2 行目）という語が示すようにかなり速い速度で動いているが、その動きの向きに着目したい。上述した Lakoff and Johnson (1999) の THE MOVING TIME METAPHOR における空間スキーマと概念領域間の写像は、〈時〉が〈観察者〉の前から後ろに向かって動く。観察者の前に広がる空間が〈未来〉に、観察者の後ろに広がる空間が〈過去〉に対応しているから、〈時〉の動きの方向は未来から過去であり、前方の未来からやって来て後方の過去へと去っていくものとしてとらえられている。一方、(3) の 1 行目から 4 行目では、〈時〉は終わりに向かって（to their end）動いている。〈終わり〉は〈未来〉にあるから、ここで

描かれる〈時〉の動きの向きは過去から未来へ向かう方向である。しかも〈時〉は Lakoff and Johnson の空間スキーマが示すような無限に続く縦一列の連なりではなく、浜辺に向かういくつもの波（1 行目）に喩えられ、むしろ横に並んでいることがわかる。これらの波の如く、〈時〉は互いに後先を入れ替わりながら（3 行目）、競い合って前方向に（forwards）進んでいる（4 行目）。

5 行目以降に描かれる人間の一生の経過を見ると、新生児が成長していく様を「這う」(Crawls) と移動を表す動詞で示している。新生児の生れ出た場所は "the main of light" と記されている。"main" は「広大な場所」（a broad expanse（OED "main" *n*. 5.†c.））という意味を持ち、またここでは 1 行目の "waves" との関連で「外洋」（the open sea（OED "main" *n*. 5.a.））の意味が想起される（Burrow ed. 2002, p. 500 参照）。そうすると、ここで描かれた幼少期から壮年期、老年期への推移の描写からは、波とともに（波に乗って）移動していく人のイメージが浮かび上がる。馬に乗った人のイメージとは異なるが、ここでも〈時〉と〈人〉がともに終わりに向かって同じ方向へ移動するという Shakespeare 独特の〈時〉のメタファーが見て取れる（この詩の後半に見られる〈時〉のメタファーの様々な行為については、次節で考察する）。

As You Like It と同様、*Sonnets* でも、時の経過に関して Lakoff and Johnson が示した概念化が見られないわけではない。〈時が動く〉（THE MOVING TIME METAPHOR）および〈人が動く〉（THE MOVING OBSERVER METAPHOR）というメタファー認識は、むしろ頻繁に表現されている。〈時〉が休みなく速足で動くとするとらえ方は "never-resting Time" (Sonnet 5, l. 5)、"swift-footed Time" (Sonnet 19, l. 6)、"Or what strong hand can hold his [= Time's] swift foot back?" (Sonnet 65. l. 11)、"the fleeting year" (Sonnet 97, l. 2) に示されており、やって来て過ぎ去っていく様子を描く表現は "Who will believe my verse in time to come, / If it were filled with your most high deserts?" (Sonnet 17, ll. 1-2)、"Against that time (if ever that time come) / When I shall see thee frown on my defects," (Sonnet 49, ll. 1-2)、"Ruin hath taught me thus to ruminate, / That Time will come and take my love away. (Sonnet 64, ll. 11-12)、"she knows my days are past the best," (Sonnet 138, l. 6) に見られる。また、〈人が動く〉というメタファー（THE MOVING OBSERVER METAPHOR）は、Lakoff and Johnson が THE TIME'S LANDSCAPE METAPHOR という別名をつけたことからもわかるように、その空間スキーマでは〈時〉は動かず風景の役割を果たしており、その風景の中を〈人〉が動くというメタファーであるが、このメタファーも *Sonnets* において具現されており、"thou among the wastes of time must go" (Sonnet 12, l. 10) という表現では〈時〉が荒野に喩えられ、その中を人が動いていくという認識が示されており、また"For if you were by my unkindness shaken, / As I by yours, y'have passed a hell of time," (Sonnet 120 ll. 5-6) では〈時〉が地獄に喩えられ、愛する青年がその地獄の中を通り過ぎてきたことを詩人は想像している。

しかし Shakespeare は、〈時〉の経過に対するそのような慣用的なとらえ方にとどまることなく、〈時〉と〈人〉が「ともに動く」というとらえ方をも詳細な描写で示して見せた。次の（4）では〈時〉の動きが「こそ泥のような前進」（thievish progress）[5] と表され、〈人〉の動きについては明示されていないが、鏡で自分の顔に皺を認めたときに墓穴が口を開けて待っていることが思い起こされるという文脈（5-6 行目）、また〈時〉の向かう先が「永遠」（eternity）である（8 行目）ということから、〈人〉も墓穴に入る、すなわち死後の永遠に向かう運命であることが暗示され、(3) と同様、〈時〉と〈人〉が手を携えて終焉という未来に向かって移動するというメタファー認識が反映されていると言える。ここには Shakespeare 独特の感性の鋭さがあると言えよう。

(4) The wrinkles which thy glass will truly show
Of mouthèd graves will give thee memory;
Thou by thy dial's shady stealth mayst know
Time's thievish progress to eternity. (Sonnet 77, ll. 5-8)

３．〈時〉が人間に及ぼす作用

3.1 悪事をはたらく〈時〉

前節では〈時〉の経過についての Shakespeare の独特の描き方と、その基盤となっている感性の鋭さを観察した。第 3 節では、〈時〉が人間に及ぼす影響力の大きさについて特に悪事の観点から

[5] OED "thievish" *adj*. では語義 3 として "3. Of, pertaining to, or characteristic of a thief or thieves; thief-like; furtive, stealthy." という定義が示され、Sonnets 77 のこの箇所が用例として掲載されている。

描く表現を Shakespeare の *Sonnets* から観察する（本プロジェクト報告書掲載の渡辺秀樹教授の論文は、Shakespeare とほぼ同時代の詩華集・詩語集に記載された Time への修飾語を確認して同時代の詩人の共通イメージを浮き彫りにするとともに、*Sonnets* と *The Rape of Lucrece* および *Twelfth Night* における Time への呼びかけの比較観察により、Shakespeare が Time に対して持つネガティブなイメージとポジティブなイメージの両方について詳細に論じているので参照されたい）。

〈時〉と人間の関係についての理解に強く結びついている認識は、人間の命に限りがあるということである。Lakoff and Turner (1989, pp.34-35) が述べる通り、人間は誰もが一定の時間を割り当てられており、その割り当て時間が費やされると死ぬという認識が、生命についての文化モデルを成立させている。[6] 割り当て時間との関連で死を理解するこの文化モデルに基づき、〈時〉という概念は人間に様々な悪事を働くものとして認識される。Lakoff and Turner (1989) は〈時は泥棒である〉(TIME IS A THIEF (pp. 35-40))、〈時は刈る者である〉(TIME IS A REAPER (p. 41))、〈時は貪り食う者である〉(TIME IS A DEVOURER (pp. 41-42))、〈時は破壊する者である〉(TIME IS A DESTROYER (pp. 42-43))といったメタファーを挙げ、これらのメタファーを反映した詩作品の例を示している。

〈時は刈る者である〉というメタファーを図像化したものがいわゆる〈時の翁（Father Time）〉で、大鎌（scythe）を持ち、砂時計を持つことも多く、時に前髪を残した禿げ頭の老人として描かれる（OED "time" *n*. 34. b. 参照）[7]。〈時の翁〉の図像の歴史的変遷について詳細な解説を記したパノフスキー（2002）は「ルネサンス美術やバロック美術においては、『時の翁』は通常翼を持ちたいてい裸である。大鎌か手鎌という彼がもっとも多くの場合に携えている持物の他に、砂時計、自分の尾を噛む蛇もしくは竜、黄道十二宮などが付け加えられたり、あるいはそれらが大鎌や手鎌の代りとなることもある。松葉杖をついている例も多い。」（pp. 142-143）と述べている。

Shakespeare の *Sonnets* にもこの〈時の翁〉の擬人化に基づく描写が多数見られる。大場（編注訳、2018）は、美しい青年への愛、黒い女（Dark Lady）への愛を描くこの *Sonnets* を二幕構成の劇作品として読み通すことを試み（p. xiii）、1 番から 126 番までを Act I とし、127 番以降を Act II として編集しているが、19 番に描かれた〈時〉に関する注釈として「Time の手にする scythe」と題する 1 頁にわたる解説を記し（p. 53）、〈時〉を「*The Sonnets* Act I をとおしての大いなる敵役」と位置づけている。大場はこの解説において、〈時の翁〉を描いた 2 つの図版を示している。1 つは「Crispin de Passe (the Elder), 1590 年頃」とのキャプションが付された図で、時の翁は両手に大鎌を持ち、翼を広げて空中を飛びながら地上を見下ろし、地上では倒されて息絶えた人間たちが横たわり、上方に "SIC TRANSIT GLORIA MUNDI" (= Thus the Glory of the World Passes Away.) との文言が見える。もう 1 つの図版には「Otto Cornelisz van Veen の Emblem 画集（1612）より」とのキャプションが付され、この図でも時の翁は背中で翼を広げているが、空中を飛ぶのではなく地上を走りながら、両手で大鎌を頭上高く振りかざしている。その足元には横たわりながら怯えた目で翁を見上げる男性たちが描かれ、翁の向かう先には煉瓦造りの建物の陰でおののく女性たちの姿が見える。2 つの図版はともに Shakespeare と同時代のもので、当時の〈時〉のとらえ方を明確に可視化していると言える。[8]

では、Shakespeare は *Sonnets* において、〈時〉がその手に何を持ち、人間にどのような仕打ちをするものとして描いているのだろうか。

3.2 Shakespeare が描く〈時〉の持ち物（attributes）と行為

Sonnets を通読すると、〈時〉に対する上記の大場の「*The Sonnets* Act I をとおしての大いなる敵役」という特徴づけは的を射たものであり、この連詩集では〈時〉を人間に悪事を働く者として

---

[6] Lakoff and Turner (1989) は "One of our major cultural models of life is that each of us is allotted a certain fixed time on earth. Our allotted time will eventually be used up, and we will die." (pp. 34-35) と述べる。

[7] "Frequently with capital initial. The personification of this. Also called ***(Old) Father Time***. Conventionally represented as an aged man carrying a scythe and frequently an hourglass; sometimes also as bald except for a single lock of hair (see also *to take Time by the forelock* at Phrases 6g; but cf. OCCASION *n*.1 1b)." (OED "time" *n*. 34. b.)

[8] Shakespeare と同時代の詩人 Robert Herrick（1591-1674）の "To the Virgins, to Make Much of Time" と題する詩には "Gather ye rosebuds while ye may, / Old time is still a-flying:" (ll. 1-2) とあり（Polland ed., 1898 参照）、時の翁が飛翔している様子が描かれている。Crispin de Passe (the Elder) の図像に共通する〈時〉のとらえ方である。さらに、Shakespeare と同時代の詩人による擬人化された Time の描写の詳細については、当時の詩華集・詩語集に記載された修飾語を綿密に観察した本プロジェクト報告書掲載の渡辺秀樹教授の論文を参照されたい。

見るとらえ方が際立つ。まず、悪事を実行する〈時〉の〈手〉に着目した詩は 3 編ある（60 番、63 番、64 番）。前節の（3）で引用した 60 番では “And yet to times in hope my verse shall stand, / Praising thy worth, despite his cruel hand. ”（13-14 行目）のように形容詞 “cruel” が〈時〉の〈手〉の性質を表し、また下記のように 63 番では “injurious” が、64 番では “fell” が “hand” を修飾している。いずれも〈時〉の〈手〉が冷酷、無慈悲に人間に害を及ぼすものとして描いている。

(5) Against my love shall be as I am now,
With Time’s injurious hand crushed and o’er-worn, (Sonnet 63, ll. 1-2) [9]

(6) When I have seen by Time’s fell hand defacèd
The rich proud cost of outworn buried age,
When sometime lofty towers I see down razèd
And brass eternal slave to mortal rage; (Sonnet 64, ll. 1-4) [10]

60番では、“cruel” と形容された〈時〉の〈手〉によってなされる様々な残虐行為が列挙されている。（3）では60番全体を引用したが、ここではその行為の列挙の部分を再掲する。

(7) Nativity, once in the main of light,
Crawls to maturity, wherewith being crowned
Crookèd eclipses ’gainst his glory fight,
And Time that gave doth now his gift confound.
Time doth transfix the flourish set on youth,
And delves the parallels in beauty’s brow,
Feeds on the rarities of nature’s truth,
And nothing stands but for his scythe to mow. (Sonnet 60, ll. 5-12)

（7）では、〈時〉の人間に対する仕打ちを表す5種類の動詞が示され、人間にかつて与えたものを破壊する（confound）[11]、花の盛りの青春を刺し貫く（transfix）[12]、美しい人の額に幾筋もの溝を掘る（delves）、自然が生んだ完全無欠の見本の数々を貪り食う（feeds）、あらゆるものの命を大鎌（scythe）で刈り取ってしまう（mow）という〈時〉の有害な所業が描かれる。

では、その冷酷、無慈悲な〈時〉の〈手〉は、人間に害を及ぼす道具として何を持つのか。

まず、〈時の翁〉の文化モデルが示す通り、〈大鎌〉（scythe）を挙げている詩は上述の60番に加え12番、100番、123番の計4編、〈手鎌〉（sickle）を挙げている詩は116番、126番の2編である。これらは本来、草刈りや農作物の収穫のための道具であるから、人間を〈植物〉と見立て、その命を植物のように〈刈り取る〉という性質を帯びるものとして〈時〉を描いていることがわかる。

(8) When I do count the clock that tells the time,
And see the brave day sunk in hideous night;
When I behold the violet past prime,
And sable curls all silvered o’er with white;
When lofty trees I see barren of leaves,
Which erst from heat did canopy the herd,
And summer’s green all girded up in sheaves,

---

[9] ここでの “injurious” は「不当に有害な」（unjustly harmful）の意味。Burrow (2002, p. 506) 参照。

[10] ここでの “fell” は「冷酷な」（cruel, ruthless）の意味。Burrow (2002, p. 508) 参照。

[11] Schmidt (1971, vol. I) は Sonnet 60 における “confound” の意味を “to destroy, to ruin, to make away with” と定義づけている（p. 234）。

[12] Duncan-Jones (ed. 1997) はこの詩の 9 行目への注釈で、〈時〉が大鎌のような尖った先端を持つ道具を携えており、それで若者の花盛りの若さを刺し貫く様子が想像されている（“Time is imagined as armed with a sharp-pointed instrument (such as his traditional scythe) which pierces (‘transfixes’) the flourishing beauty of the young.” (p. 230)）と解説している。本稿ではこの解釈を採用したが、一方、Schmidt (1971, vol. II) はこの “transfix” について「取り除く」（“to transplace, to remove” (p. 1251)）という定義を与えている。OED の見出し語 “transfix” にはそのような定義は見当たらないが、大鎌が除草のためにも用いられる道具であることを念頭に置くと、Schmidt の解釈も捨てがたい。

Borne on the bier with white and bristly beard:
Then of thy beauty do I question make,
That thou among the wastes of time must go,
Since sweets and beauties do themselves forsake,
And die as fast as they see others grow,
And nothing 'gainst Time's scythe can make defence
Save breed to brave him when he takes thee hence. (Sonnet 12)

12番は、詩人が愛する青年の行く末を案じる詩であるが、3行目の "violet past prime"（盛りを過ぎた菫）、5行目の "lofty trees I see barren of leaves"（落葉した高木）、7行目の "summer's green"（夏の日の緑）で植物のイメージを重ね、青年を〈植物〉の観点からとらえる素地を作り出している。"summer's green" という言い回しは何の植物かを明記してはいないが、束ねられて縛られ（girded up in sheaves）白い剛毛（white and bristly beard）を見せながら運ばれていく（Borne on the bier）という記述（7-8行目）からは、収穫された穀物が想起され（Duncan-Jones ed. 1997, p. 134参照）、[13] "summer's green" は夏の畑一面に広がる美しい緑色の描写であることが想像される。この記述の後に9行目で "thy beauty" と青年の美しさに詩人は思いをはせ、美しい者はいずれ、他の者が成長する（この "grow" も人間のみならず植物の生育をも想起させる）のと同じ速さで死んでいかねばならないことを嘆く（10-12行目）。この美しい植物と美しい青年の併記は、両者を同一視するとらえ方を想起させる。その上での13行目における「時の大鎌」（Time's scythe）の配置は、人間の命を奪う〈時〉の性質を表す比喩としての〈大鎌〉の描写に説得力をもたせている。

116番では〈時〉のもつ手鎌（sickle）が描かれるが、ここでも、その直前で唇（lips）の色や頬（cheeks）の血色を表す表現として "rosy" が配され、可憐な薔薇の花が無残にも手鎌に刈られるイメージが浮かび上がる。〈人〉の命のはかなさを〈植物〉の観点からとらえるメタファーである。

(9) Love's not Time's fool, though rosy lips and cheeks
Within his bending sickle's compass come; (Sonnet 116, ll. 9-10)

Shakespeareが描く〈時〉の持ち物は鎌だけではない。命のはかなさにおいて植物に等しい人間にとっては、大鎌や手鎌でも十分に恐ろしいが、〈時〉は人間の命よりもはるかに頑丈なものをも打ち壊す。

(10) Since brass, nor stone, nor earth, nor boundless sea,
But sad mortality o'ersways their power,
How with this rage shall beauty hold a plea,
Whose action is no stronger than a flower?
O how shall summer's honey breath hold out
Against the wreckful siege of batt'ring days,
When rocks impregnable are not so stout,
Nor gates of steel so strong, but time decays? (Sonnet 65, ll. 1-8)

65番の1行目で示された "brass" や "stone" は、1つ前の64番の記述と併せて読むと、その意味が明確になる。上記（6）の引用で示した通り、64番では贅沢で華美な建造物（rich proud cost）[14] が〈時〉の冷酷な手（Time's fell hand）にかかり、高くそびえた塔（lofty towers）が崩れ落ち、永遠と思われた真鍮の記念碑（brass）が死の破壊力に屈服しているさまが描かれる。この記述をふま

[13] Duncan-Jones ed. (1997, p. 134) はこの詩の 7-8 行目の "summer's green all girded up in sheaves, / Borne on the bier with white and bristly beard:" について注釈で "a richly inclusive image of crops which have been cut and harvested, with an implicit personification of the trussed-up and white-bearded corn (formerly green) as an old man being carried to his grave. Though a *bier* could be any kind of barrow or litter for carrying heavy goods, its strongest association was with the porterage of dead bodies, as in Ophelia's 'They bare him barefaced on the bier' (*Ham* 4.5.177-8)." と述べ、収穫され荷車で運ばれる穀物と墓地へ運ばれていく老人のイメージの比喩的重なりに言及している。

[14] この "rich proud cost" について、Burrow (2002) は "lavish, showy extravagant things" と解釈している。また、Duncan-Jones (1997) は "suggests the expensive splendour of elaborate funeral monuments, such as those to be seen in Westminster Abbey or St Paul's." と述べている。

えて65番に目を向けると、1行目の “brass” からは真鍮の碑が、 “stone” からは石碑あるいは石造りの建物が想起される。両者とも、時を超えて永続させることが意図された建造物である。しかしそれらは大地や海と同様、結局は悲惨な死に屈服するのだから、一輪の花ほどの力しかない美がその猛威に立ち向かえるはずがなく、槌で叩きつける（batt’ring）ような日々の攻撃に夏の甘い息吹が耐えられるわけがない、堅固な岩（rocks impregnable）も鉄の城門（gates of steel）も、時の破壊行為に耐えられるほど強くはないのだから、と65番は述べる。6行目の “batt’ring” について Burrow (2002) は “The days are like battering rams.” と注釈をつけている。battering ramとは、城壁や城門などを破るのに用いられた「破壊槌」と呼ばれる攻撃用具である。65番の記述からは、〈時〉が植物を刈り取る鎌どころか、破壊槌という圧倒的な武器をも持つことが含意されており、岩であろうと城門であろうと、真鍮や石で造られた記念碑でも建物でも容易に破壊する力をもつこと、このような〈時〉の猛威に対し、植物ほどの力しかもたない人間（4行目の “no stronger than a flower” の直後の5行目の “summer’s honey breath” も人間の息を夏に咲く花の甘い香りに喩えた表現として解釈できる）が立ち向かえるはずがないことが示されている。

さらに注目に値するのは、Shakespeare は上記のような〈時〉の情け容赦のない派手な破壊行為のみならず、もっと地味で微妙な、しかし詩人にとっては許しがたい、美に対する損傷行為を描いていることである。それは、詩人の愛する美しい青年に皺を刻むという行為である。

(11) My glass shall not persuade me I am old,
So long as youth and thou are of one date,
But when in thee time’s <u>furrows</u> I behold,
Then look I death my days should expiate. (Sonnet 22, ll. 1-4)

22 番 3 行目の “time’s furrows” は「皺」を指すが、furrow は元来「鋤で地面に付けた溝、畝間」を表す語であるから（OED “furrow” *n.*, 1.a の定義 “A narrow trench made in the earth with a plough, esp. for the reception of seed.” 参照）、ここでは〈時〉の持ち物として〈鋤〉（plough）が（明示されてはいないが）含意されていると言える。青年の滑らかな肌を平らな地面に見立て、そこに〈時〉が〈鋤〉で皺という溝を作っていくというイメージが喚起される。

100 番では、〈時〉が人の顔に皺をつける行為は “grave”（彫る）という動詞で示されている。

(12) Where art thou, Muse, that thou forget’st so long
To speak of that which gives thee all thy might?
Spend’st thou thy fury on some worthless song,
Dark’ning thy pow’r to lend base subjects light?
Return, forgetful Muse, and straight redeem
In gentle numbers time so idly spent.
Sing to the ear that doth thy lays esteem,
And gives thy pen both skill and argument.
Rise, resty Muse, my love’s sweet face survey,
If Time have any wrinkle <u>graven</u> there;
If any, be a satire to decay,
And make Time’s spoils despisèd everywhere.
Give my love fame faster than Time wastes life,
So thou prevent’st his <u>scythe</u> and <u>crookèd knife</u>. (Sonnet 100)

（12）は詩の女神（Muse）に呼びかけ、〈時〉が我が物顔に青年の美しさに傷をつけ台無しにするという行為（Time’s spoils）[15] に対抗するよう促す詩である。14 行目では〈時〉の持ち物として大鎌（scythe）と刃の曲がったナイフ（crooked knife）が挙げられている。前者は〈時の翁〉の伝統的文化モデルが示すように人の命を植物のように刈り取る道具であるが、後者は（10 行目の “graven” という語が示すように）言わば彫刻刀のごとき役割を果たして若々しい顔に皺を彫りつけ、人間に老いをもたらす道具であると言える。

[15] Duncan-Jones (ed., 1997, 310) では 100 番 12 行目の “Times’ spoil” について “time’s conquest of beauty, or marring of it” と説明している。

(13) Devouring Time, blunt thou the lion's paws,
And make the earth devour her own sweet brood,
Pluck the keen teeth from the fierce tiger's jaws,
And burn the long-lived phoenix in her blood,
Make glad and sorry seasons as thou fleet'st,
And do whate'er thou wilt, swift-footed Time,
To the wide world and all her fading sweets:
But I forbid thee one most heinous crime,
O carve not with thy hours my love's fair brow,
Nor draw no lines there with thine antique pen.
Him in thy course untainted do allow
For beauty's pattern to succeeding men.
Yet do thy worst, old Time: despite thy wrong,
My love shall in my verse ever live young. (Sonnet 19)

19 番は〈時〉に対して「時の翁よ」(“old Time”(13 行目))と明示的に呼びかける詩であるが、ここでは〈時〉の悪事の残忍さと俊敏さを “Devouring Time”(1 行目)や “swift-footed Time”(6 行目)のように Time に付された修飾語で示し、[16]「獅子の爪をすり減らす」「大地に自分が育んだ子供らを食らわせる」「虎の顎から鋭い歯を抜き取る」「不死鳥を生きたまま焼く」「季節を楽しくも悲しくも変える」「この広い世界やそのはかない美に対して好き放題のことをする」といった〈時〉の残虐で勝手気ままな行為を列挙し、そのすべてを承認した上で、「だが一つ、最も凶悪な罪だけは犯すことを禁ずる」(“But I forbid thee one most heinous crime,” 8 行目)と言い渡す。それは、詩人の愛する人の美しい額に時間を刻む(carve)こと(9 行目)、古く奇怪なペン(antique pen)[17] で線を描く(draw)こと(10 行目)である。ここでは〈時の翁〉の持ち物としてペンが明示され、また “carve” という動詞からは彫刻刀が暗示されている。

一般的な常識に照らせば、大鎌や手鎌の切断力、あるいは破壊槌の破壊力に比べ、ペンや彫刻刀からはさほどの威力は感じられず、恐怖感も喚起されない。しかし、ペンや彫刻刀を用いて若く美しい肌に皺をつけるという行為を「最も凶悪な罪」(one most heinous crime)とする詩人の記述からは、その行為を、大鎌や手鎌、破壊槌を振るって命を奪ったり建造物を破壊したりする残虐行為にも劣らぬ非道で許しがたい行為として詩人が嫌悪していることがうかがえる。

では、ペンや彫刻刀の威力とは何か。真っ白な紙にペンで一旦線を引けば、二度と真っ白な紙には戻らない。同様に、滑らかな素材に彫刻刀で線を一彫り刻んだだけで、元の滑らかな表面に戻ることは二度とない。ペンや彫刻刀は小さな道具でありながら、それらには、いわば「取り返しのつかないことをやってのける力」があると言える。この〈復元不可能な変更を加える力〉は、〈時〉の作用の〈不可逆性〉に写像される。人は「あの頃に帰りたい」「時を戻したい」といくら願っても、その願いがかなえられることはない。詩人にとっては、その虚しさを最も強く感じるのが、愛する人の美しく滑らかな肌に皺が刻まれているのを見る瞬間なのであろう。その瞬間が来ることに対する恐怖が、詩人の「だが一つ、最も凶悪な罪だけは犯すことを禁ずる」(But I forbid thee one most heinous crime)という〈時〉への呼びかけの強い語調に表れている。

当然のことながら、〈時の翁〉の〈復元不可能な変更を加える力〉から〈時〉の作用の〈不可逆性〉への写像は、〈時の翁〉のいずれの持ち物を用いても成立する。大鎌や手鎌で切断された物はもはや元通りに戻ることはなく、破壊槌で粉砕された物も同様である。むしろ、大鎌や手鎌や破壊槌の殺傷能力、破壊力の高さの方が容易に〈不可逆性〉への写像を喚起させるとも言える。しかし、Shakespeare は伝統的文化モデルに示された顕著な殺傷力を誇る武器のみに頼ることなく、ペンや彫刻刀といった、本来芸術のために用いる小さな道具にまで着目し、〈時の翁〉にこれらを持たせることにより、〈死〉への恐怖のみならず〈老い〉への恐怖、特に恋人の美しい肌に皺を認

[16] 19 番の Sonnet における Time への形容辞(epithets)については本プロジェクト報告書掲載の渡辺秀樹教授の論文も参照されたい。

[17] Duncan-Jones (ed., 1997,148) は “antique pen” について “an old pen, but also one that produces grotesque or fanciful effects” と説明している。

める瞬間の衝撃と嫌悪をも〈復元不可能な変更〉の観点から効果的に描写して見せたのである。

Shakespeare の *Sonnets* において言及された、あるいは含意された〈時の翁〉の持ち物（attributes）とその用途、それらと〈時〉の作用との対応関係をまとめると以下の通りである。

【表２】Shakespeare の *Sonnets* における〈時の翁〉のメタファー写像

根源領域〈翁〉			目標領域〈時〉
〈持ち物〉	〈用途：復元不可能な変更を加える〉		〈作用：不可逆性をもつ〉
大鎌（scythe）、手鎌（sickle）	命を刈り取る	⇒	人に死をもたらす（命を奪う）
破壊槌（battering ram）	建造物を打ち砕く		建造物を朽ちさせる
鋤（plough）、刃の曲がったナイフ（crooked knife）、ペン（pen）	皺の線を刻む（描く）		人に老いをもたらす（若さを奪う）

４．終わりに

本研究では *As You Like It* と *Sonnets* に描かれた〈時〉と人との関わりを表す比喩表現を観察し、Shakespeare の時間認識を考察した。

Shakespeare にとって〈時〉は、単に未来からやって来て過去へと通り過ぎていくだけのものではない。人間が通り過ぎながら眺める風景のようなものというだけでもない。馬のように、あるいは波のように人を乗せ、未来に向かって人とともに進むという動きもする。と言っても、人に寄り添う伴侶のような存在ではない。人に危害を加える残虐非道な老人ともなる。ただし、その悪事の道具は広く世に知られた大鎌や手鎌のみではない。破壊槌を振り回すこともある。と思うとペンや彫刻刀を道具に悪事を働くこともある。それは殺傷能力の高い他の武器を用いた悪事に比べれば、〈時〉にとっては落書き程度のちょっとした悪戯に過ぎないのかもしれない。しかしその悪戯は、恋人の美しさをこよなく愛する詩人にとっては許しがたい凶悪犯罪なのである。

Shakespeare の〈時〉は、かくも複雑な存在である。誰もが目を留めて見惚れる美しい姿を繊細な技術で造り上げておきながら、暴虐な振舞いに及んでその抜きん出た美を奪い取ってしまう（“Those hours, that with gentle work did frame / The lovely gaze where every eye doth dwell, / Will play the tyrants to the very same, / And that un-fair which fairly doth excel:”（Sonnet 5, ll. 1-4））[18]。いわば創造神と破壊神の両方の性質を兼ね備えた、気まぐれで実に手に負えない存在である。

このような残忍な暴君としての〈時〉（“bloody tyrant Time”（Sonnet 16, l. 2））に対して、人間はどうすればよいのか。Shakespeare は果敢にも対抗の手立てを考え、青年に子孫を残させることで〈時〉の大鎌に立ち向かおうとしたり（“And nothing ’gainst Time’s scythe can make defence / Save breed, to brave him when he takes thee hence.”（Sonnet 12, ll. 13-14）他）、自らが著す詩で青年の若さや美しさを永遠に残そうとしたりする（“Yet do thy worst, old Time: despite thy wrong, / My love shall in my verse ever live young.”（Sonnet 19, ll. 13-14）や “And yet to times in hope my verse shall stand, / Praising thy worth, despite his cruel hand.”（Sonnet 60, ll. 13-14）など）。〈時〉が持つペンという持ち物に対抗して、自らもペンを武器に戦おうというわけである（“You still shall live (such virtue hath my pen)”（Sonnet 81, l. 13））[19]。かと思えば、人間の無力さを思い知り、「私は嘆きながら時のご機嫌を伺うしかない」（“I must attend time’s leisure with my moan,”（Sonnet 44, l. 12））と弱気になったり、万物が栄枯盛衰の運命を免れないことを思い、いつか愛する人が〈時〉に奪われることを怖れて泣いたりもする（“When I have seen such interchange of state, / Or state itself confounded to decay, / Ruin hath taught me thus to ruminate, / That Time will come and take my love away. / This thought is as a death,

---

[18] OED の見出し語 “unfair” *v.* には “*transitive*. To deprive of fairness or beauty.” との語義が記され、用例として Sonnet 5 の当該箇所 1 例のみが記載されている。

[19] Duncan-Jones (1997) は Sonnet 19 の 9-10 行目の、詩人の愛する人の美しい額に時の翁が古く奇怪なペンで線を描くことを禁ずる呼びかけ “O carve not with thy hours my love’s fair brow, / Nor draw no lines there with thine antique pen.” に見られる “no lines” について、この歓迎すべかざる線（lines）が、詩人が永遠に残そうとする詩行（lines）と対比関係にあると指摘する（“Time’s unwelcome *lines* are in contrast to the poet’s *eternal lines* in 18.12.”（p. 148））。この指摘からは、時の翁の持つペンが皺というラインで恋人の若さを奪い、それに対抗する詩人のペンが詩行というラインで恋人の若さを永遠に保たせるという対立の描写を Shakespeare が意図したことがうかがえる。

which cannot choose / But weep to have that which it fears to lose.”（Sonnet 64, ll. 9-14））。

これらの描写には絶大な力を誇る〈時〉に対する詩人の揺れる思いが表れ、私たちの〈時〉に対する多角的な認識のしかたを映す鏡のようにも思える。Shakespeare のメタファーは、いつも人の生活のすぐ傍にある〈時〉という存在が、理不尽で無慈悲で手に負えない存在でもあるという誰もが経験する思いを雄弁に活写している。

参考文献

安部知二（訳）（1939）『お気に召すまま』東京：岩波書店.

Burrow, Colin (ed.) (2002) *The Complete Sonnets and Poems*. The Oxford Shakespeare. Oxford: Oxford University Press.

Cowden-Clarke, Mary (1881) *The Complete Concordance to Shakespeare*. London: Bickers & Son.

Duncan-Jones, Katherine (ed.) (1997) *Shakespeare's Sonnets*. The Arden Shakespeare. London: Bloomsbury Publishing Plc.

Hattaway, Michael (ed.) (2000) *As You Like It (The New Cambridge Shakespeare)*. Cambridge University Press.

加島祥造（1993）『英語名言集』東京：岩波書店.

川西進（編注）（1971）*Shakespeare's Sonnets.* 東京：鶴見書店.

Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.

------ (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.

Lakoff, George and Turner, Mark (1989) *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: The University of Chicago Press.

嶺卓二（編注）（1974）*Sonnets by William Shakespeare*. 東京：研究社.

鍋島弘治朗、楠見孝、内海彰（編）（2019）『メタファー研究２（特集：時間のメタファー）』東京：ひつじ書房.

小田島雄志（1985）『シェイクスピア名言集』東京：岩波書店.

小田島雄志（訳）（1983）『シェイクスピア全集 お気に召すまま』東京：白水社.

大場建治（編注訳）（2018）『ソネット詩集』（研究社シェイクスピア全集別巻）東京：研究社.

大森文子（2018a）「喜びと悲しみのメタファー：Shakespeare の *Sonnets* をめぐって」『レトリック、メタファー、ディスコース（言語文化共同研究プロジェクト 2017）』（渡辺秀樹編）大阪大学大学院言語文化研究科、19-28.

------（2018b）「人の心と空模様：シェイクスピアのメタファーをめぐって」『メタファー研究１』（鍋島弘治朗・楠見孝・内海彰編）東京：ひつじ書房、175-104.

------（2021）「Shakespeare の *Sonnets* における逆転のレトリック」『感情・感覚のレトリック（言語文化共同研究プロジェクト 2020）』（渡辺秀樹編）大阪大学大学院言語文化研究科、2021、15-27.

パノフスキー、エルヴィン（著）、浅野徹・阿天坊耀・塚田孝雄・永澤峻・福部信敏（訳）（2002）『イコノロジー研究』（上）東京：筑摩書房.

Polland, Alfred (ed.) (1898) *Robert Herrick: The Hesperides &Noble Number*s. Vol 1. London: Lawrence & Bullen.

Schmidt, Alexander (1971) *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary* Vols. I and II. New York: Dover Publications.

Schoenfeldt, Michael (ed.) (2007）*A Companion to Shakespeare's Sonnets*. MA: Blackwell.

瀬戸賢一（2017）『時間の言語学―メタファーから読み解く』東京：筑摩書房.

高松雄一（1986）『ソネット集（シェイクスピア作）』（岩波文庫）東京：岩波書店.

Vendler, Helen (1997) *The Art of Shakespeare's Sonnets*. Cambridge: Harvard University Press.

渡辺秀樹（2019）「英詩感情語メタファーの系譜第２回　シェイクスピア『ソネット集』のレトリック再考：感情語の類義・反義を中心に」『レトリックとコミュニケーション（言語文化共同研究プロジェクト 2018）』（大森文子編）大阪大学大学院言語文化研究科、1-10.

------（2021）「ソネットに見える繰り返しのレトリック再考：“when~then~”の繰り返しを中心に」『感情・感覚のレトリック（言語文化共同研究プロジェクト 2020）』（渡辺秀樹編）大阪大学大学院言語文化研究科、2021、3-13.

吉田健一（2007）『シェイクスピア／シェイクスピア詩集』東京：平凡社.

OpenSourceShakespeare, George Mason University, 2003-2022.（https://www.opensourceshakespeare.org/）

The Oxford English Dictionary Online, Oxford University Press, 2022.（https://www.oed.com/）

Dickinson の詩における宝石の比喩
—9 種の宝石に着目して—

岡部未希

1.　はじめに

19 世紀のアメリカの詩人、Emily Dickinson（1830–1886）は自然、愛、死、永遠、神といった、故郷ニューイングランドでは伝統的なテーマを用い、生涯に 1785 篇[1]の詩を書き上げた。4 行 4 連から 6 連構成の詩が多いものの、1 篇の平均語数は約 54 語であり、比較的短い詩が多い。最も短い詩はたった 7 語で構成されている[2]ほどである。では、限られた語数で、どのようにして豊かなイメージを膨らませるのか。その際に鍵となるのが、比喩である。

他の詩人同様、Dickinson はユニークな比喩を多種多様に用い、読者を詩の世界に惹きつける。中でも筆者が注目しているのは、宝石や鉱石などの「石」の比喩である。宝石というのは人間が特別に価値を見出した石である。詩の中で何かを喩えるために宝石が使われているのだとすれば、詩人が何に価値を見出しているのか、その価値観の一端を垣間見ることができるだろう。

そこで本稿では、特に 9 種の宝石に着目し、それらの語が Dickinson の詩の中でもつ意味、特に比喩的な意味を分析する。また、宝石の種類による傾向の類似点や相違点にも着目したい。

2.　Dickinson の詩における宝石・鉱石

詩の分析に移る前に、宝石や鉱石の定義について確認しておこう。近山（2007:8）によると、「宝石」とは「真珠など一部有機質のものもあるが、鉱物の中でも美しく、加工して装飾品になる鉱物」のことである。宝石と名のつくものは約 100 種類あるが、宝石と呼ばれるためには次の 3 つの条件を満たす必要がある：(1)色や輝きが美しいこと；(2)硬度が高く、時代を経ても変わらない耐久性を持っていること；(3)産出量が少なく、希少価値があること（ibid. 134）。一方、「鉱石」とは「金や硫黄などの有用な成分を含み、取り出して利益のある鉱物や岩石のこと」（ibid. 8）を指す。Dickinson の詩の中には宝石以外に鉱石も頻出するため、本研究では間口を広げ、鉱石も研究対象に設定している。

以下に示すのは、Dickinson の詩に現れる宝石・鉱石の語の一覧である。語はすべてレマで表記している。つまり、“gold”の語の頻度の中には “gold”, “golds”, “golden”の頻度がすべてまとめられていることになる。含詩とはその見出し語を含む詩の数のことで、この数値よりも語の頻度の方が大きい場合、1 篇の詩に同じ語が複数回使用されている場合がある。一方、1 篇の詩が複数の宝石・鉱石に言及している場合もあるため、留意点として、含詩の数値の合計は宝石・鉱石に言及している Dickinson の詩の合計に等しいわけではない、ということを挙げておく。また、このリストは現時点での暫定版であり、この先更新される可能性についても言及しておきたい。

---

[1] Johnson, Thomas H. (Ed.) (1960). *The Complete Poems of Emily Dickinson*. Little Brown and Company, New York. に収録されている詩は、タイトルの代わりに、ほぼ制作年代順に通し番号が割り振られている。番号は 1 から 1775 までだが、そのうち 9 篇には同じ内容で文体が少し異なるバージョンが存在し、それらは同じ番号の ver. 1, ver. 2 …という形で掲載されている（216, 494, 824, 1213, 1282, 1357, 1358, 1366, 1627. 唯一 1366 は ver.3 まで存在する）。そのため、それらの別バージョンも全て各 1 編とみなし、合計 1785 篇と数えている。

尚、本稿ではこの Johnson 版詩集を参照テクストとしている。詩を引用する際は、[通し番号] “詩の 1 行目”という形で表記する。

[2] [1494] “The competitions of the sky”: The competitions of the sky / Corrodeless ply.

表 1　Dickinson の詩に現れる宝石・鉱石

宝石/鉱石	和名	語の頻度	含詩
agate	瑪瑙	1	1
amethyst	**アメシスト**	6	6
amber	琥珀	22	19
beryl	**ベリル(緑柱石)**	4	4
chrysolite	**カンラン石**	2	2
coral	珊瑚	2	2
crystal	水晶	1	1
diamond	**ダイヤモンド**	14	13
emerald	**エメラルド**	12	11
garnet	石榴石	3	2
gold	金	57	52
iron	鉄	2	2
lead	鉛	6	6
marble	大理石	7	7
onyx	縞瑪瑙	1	1
opal	**オパール**	5	4
pearl	真珠	29	27
pyrite	黄鉄鋼	1	1
quartz	石英	2	2
ruby	**ルビー**	8	8
sapphire	**サファイア**	4	4
silver	銀	27	27
topaz	**トパーズ(黄玉)**	3	3

表 1 から分かるように、Dickinson は詩中で様々な宝石・鉱石の語を用いており、一度に網羅的な説明を行うのは難しい。そこで本稿では、表中で太字になっている 9 種類の宝石（amethyst, beryl, chrysolite, diamond, emerald, opal, ruby, sapphire, topaz）に限定して分析を行う。これらを選んだ基準は単純で、比較的有名な宝石で、ある一定頻度詩に出現しており分析しやすい、というものを選んだ[3]。

これらの宝石が現れる詩を 1 篇 1 篇じっくりと読み、詩全体の解釈を行なった上で、各語が文字通りの意味で使われているのか、比喩として使われているのか、という点で 2 分類した。次の表 2 は、9 種類の宝石がそれぞれ詩の中でどのような意味で使われているかをまとめたものである。数値はそれぞれ語の頻度を示し、文字通り・比喩的な意味で使われている語の頻度の合計は、表 1 における語の頻度の数値に等しくなっている。

表 2　9 種類の宝石の詩中での扱い

宝石	文字通りの意味	比喩的な意味
amethyst	0	6
beryl	1	3
chrysolite	1	1
diamond	9	5
emerald	2	10
opal	0	5
ruby	4	4
sapphire	0	4
topaz	1	2

[3] あまりメジャーではない chrysolite が含まれているのは、beryl や emerald などの緑系統の宝石と比較を試みたからである。

この分類はどのように行われたのか。たとえば、エメラルドとダイヤモンドが同時に出現する次の 2 篇[4]、[460] “I know where Wells grow — Droughtless Wells —” と [375] “The Angles of a Landscape —” を比べてみよう。[460]で枯れることのない不思議な井戸は、途中までエメラルドがはめ込まれ、ダイヤモンドが入り混じったギザギザの石壁で出来ている。宝石に言及して何か別のものを指しているわけではなく、この詩の世界の中では実際に井戸の壁に宝石がはめ込まれているのである。以下はこの詩の前半部分である。

I know where Wells grow — Droughtless Wells —
Deep dug — for Summer days —
Where Mosses go no more away —
And Pebble — safely plays —

It's made of Fathoms — and a Belt —
A Belt of jagged Stone —
Inlaid with **Emerald** — half way down —
And **Diamonds** — jumbled on —

一方、[375]では目覚めるたびに窓から見える景色について述べている。以下に示すのは詩の後半部分だが、ここでのエメラルドは外に見える緑色の植物のこと、雪が北極の宝石箱から運んできたダイヤモンドとは白銀の雪景色のことである。語り手の眼に移る景色の中に宝石が浮かんでいるわけではない。これらの語はメタファー（隠喩）、すなわち比喩だと解釈するのが妥当である。本稿では特に、このような宝石の比喩的な意味に着目して分析を進める。

The Seasons — shift — my Picture —
Upon my **Emerald** Bough,
I wake — to find no — **Emeralds** —
Then — **Diamonds** — which the Snow

From Polar Caskets — fetched me —
The Chimney — and the Hill —
And just the Steeple's finger —
These — never stir at all —

3. 9 種類の宝石の比喩

Dickinson の使う語彙について網羅的かつ詳細に記述しているエバウェイン（編）（2007:191）は、「宝石」について、「ディキンスンのイメージの種類のなかで、副次的だが、それでも重要な役割を果たしている」とし、その語の機能について、「価値の高い物質に言及することによって、無形のものに価値を認める大きなイメージのネットワークの一部として、宝石が機能している」と述べている。では宝石で何を暗示するのかというと、具体物や色、抽象的なイメージなど、詩によって様々である。次の表 3 は、比喩的な意味で使われている宝石の語を、さらにどのような類似性に基づくメタファー（隠喩）かという点で分類しまとめたものである。各行の数値の合計は、表 2 における比喩的な意味の語の頻度に等しくなっている。

[4] 詩の引用部における太字は筆者によるもの。以降、特に言及がなければ他の詩の引用においても同様。

表 3　9 種類の宝石のメタファー

宝石	色と輝き	希少価値	硬さ	宝石のもつイメージ
amethyst	5	0	0	1
beryl	※3	0	※1	0
chrysolite	1	0	0	0
diamond	1	3	1	0
emerald	※10	0	0	※1
opal	4	0	0	0
ruby	3	0	0	1
sapphire	4	0	0	0
topaz	2	0	0	0

表 3 を見ると、宝石特有の色と輝きの類似性に基づく比喩が多く使われていることが分かる。宝石の希少性や硬質性も 2 節で宝石の条件として挙げたが、宝石のように珍しいもの・硬いものという表現は Dickinson の詩では少数派だ。また、宝石のもつイメージというのは、恐怖や情熱など、宝石から連想される抽象的な感覚のことで、このような表現も限られた詩の中で見受けられた。尚、表中に※がついた数字がある。これは[737] “The Moon was but a Chin of Gold”のベリルと[1593] “There came a Wind like a Bugle —”のエメラルドが 2 つの類似性に基づく比喩だと判断し、どちらのカテゴリーにもカウントしているためである。したがって、ベリルとエメラルドは各行の数字の合計が、表 2 における比喩的な意味の語の頻度プラス 1 となっている。詳細は後述する。

次節以降、これらのメタファーが詩中でどのように使われているのか、具体例を観察していく。3.1 節では希少価値、3.2 節では硬さ、3.3 節では宝石のもつイメージ、最後に 3.4 節では最も数の多い色と輝きの類似性に基づく比喩について考察する。

3.1　希少価値の類似性に基づくメタファー

宝石というのはどこでも大量に採れるわけではない。限られた場所で、わずかな量しか採掘できない、その希少性が人々を惹き付ける。Dickinson の詩の中で希少な宝石の代表例として挙げられているものはダイヤモンドである。

たとえば、[700] “You've seen Balloons set — Haven't You?”では、気球が舞い上がる様子を黄金の海を流れるように離れる白鳥にたとえているのだが、その気球は滅多にない“Duties Diamond”「ダイヤモンドの任務」のために地上にいる「君」を見捨てたのだ、と言う。頭韻[d]が 3 つ重なり合い（“discarded”, “Duties”, “Diamond”）、より印象的なフレーズとなっている。

You've seen Balloons set — Haven't You?
So stately they ascend —
It is as Swans — discarded You,
For Duties **Diamond** —

Their Liquid Feet go softly out
Upon a Sea of Blonde —
They spurn the Air, as 'twere too mean
For Creatures so renowned —

上記の引用は詩の前半部分で、空へ向かう堂々とした気球の姿が描かれている。ただ、最後には“The Gilded Creature strains — and spins — / Trips frantic in a Tree —” 「その金めっきされた生き物は捻れ、回り、狂ったように木に突っ込んで」しまい、歓声を上げていた人々は“retire with an Oath”「罵りながら帰って」行く。冒頭でダイヤモンドのように稀で貴重な任務を負っていると言われる一方、この詩の最終行で““’Twas only a Balloon”’と貶される気球は、まさに“Glided”「金色に塗られた」存在なのである。

[397] “When Diamonds are a Legend,”では、インスピレーションを得て詩を作る詩人が、宝飾品を埋めて育てる存在にたとえられている。植物の種を埋めて芽を出したら水をやって育てるように、語り手はブローチやイヤリングを撒く。植物の種にたとえられるダイヤモンドや王冠は詩の素材やアイディアのことであろう。ありふれたものではなく、詩人にとって価値が高いそれらは、成長して“a Legend”「伝説」や“a Tale”「物語」になる。以下はこの詩の第 1 連である。

When **Diamonds** are a Legend,
And Diadems — a Tale —
I Brooch and Earrings for Myself,
Do sow, and Raise for sale —

また、貴重な物のその価値に気づかなければよかった、と嘆く詩もある。[1108] “A Diamond on the Hand”の前半では、手に入れたダイヤモンドはだんだん慣れて凄さが落ち着いてしまうため、知らないままが一番よかった、と語られる。無論、文字通りダイヤモンドという宝石のことだとも解釈できる。しかし、欲しがっていた時は素晴らしく輝いて見えたのに、手中におさめてしまえば平凡な印象に変わってしまった、そんなものが誰しも 1 つはあるはずである。たとえば今は部屋の片隅に転がっているおもちゃ、使われなくなった健康器具、昔は王子か姫・今はただの人になった恋人など。ダイヤモンドはそのような比喩だと解釈できる。

A **Diamond** on the Hand
To Custom Common grown
Subsides from its significance
The Gem were best unknown —

このように、希少価値の類似性に基づく比喩の例は 9 種の中でダイヤモンドだけであった。他の宝石が色と輝きに基づく類似性に基づく比喩に集中する中、そのようなダイヤモンドの比喩は 2 節で示した[375] “The Angles of a Landscape —”の 1 例のみである。つまり、Dickinson にとってダイヤモンドは白銀の色が美しい宝石というよりも、価値の高い宝石の代表例なのだ。宝石にはどんなものがあるか尋ねられたら、おそらくほとんどの人がダイヤモンドを 1 番に挙げるだろう。現代人も持つ感覚であるため発想としては分かりやすい。

3.2　硬さの類似性に基づくメタファー

ダイヤモンドは宝石の中で最も有名なだけでなく、最も硬い宝石でもある。そのため、価値が高いものだけではなく、硬いものの比喩としても使われる。[753] “My Soul — accused me — And I quailed —”では語り手を非難してきた魂の言葉を、“Tongues of Diamond”「ダイヤモンドの弁舌」と表現している。“Tongues”は舌で舌を使って話す能力を示すメトニミーである。また、“Tongues of Diamond”とはすなわち、ダイヤモンドという素材でできた舌のことではなく、ダイヤモンドのように硬く鋭い弁舌のことを指す。これは硬いという触覚で、人を威圧するような刺々しい話し方、聴覚、を示す共感覚表現だとも言える。語り手はそのような自らの魂の“Disdain”「侮蔑」を聞いて“smiled”「微笑んだ」のだが、それは“A finger of Enamelled Fire”「マニキュアを塗った指の灯火」のように自分を導いてくれるような言葉だと感じ、魂は“My friend”「私の友達」だと確信したからである。

My Soul — accused me — And I quailed —
As Tongues of **Diamond** had reviled
All else accused me — and I smiled —
My Soul — that Morning — was My friend —

Her favor — is the best Disdain
Toward Artifice of Time — or Men —
But Her Disdain — 'twere lighter bear
A finger of Enamelled Fire —

硬さの類似性に基づく比喩はダイヤモンドの他にもう 1 例、ベリルの詩がある。[737] “The Moon was but a Chin of Gold”の前半では月を擬人化しており、金色の顎、ブロンドの前髪、眼、眼は夏の夜露に似ていて、頬は“a Beryl hewn”「荒削りのベリル」と表現されている。月の表面が、ベリルの一種であるヘリオドールのように黄色[5]いだけでなく、さらに硬くゴツゴツしていることを表すためにこの比喩が使われているのだろう。

The Moon was but a Chin of Gold
A Night or two ago —
And now she turns Her perfect Face
Upon the World below —

Her Forehead is of Amplest Blonde —
Her Cheek — a **Beryl** hewn —
Her Eye unto the Summer Dew
The likest I have known —

宝石のように硬いものという表現は、9 種の宝石が出現する詩のうち上記の 2 篇のみで見つかった。後年に残る硬質性というのは宝石の条件であるが、Dickinson にとってさほど着目すべき特性ではないのかもしれない。

3.3　宝石のもつイメージの類似性に基づくメタファー

宝石から想起されるものは希少価値や硬さだけではない。宝石を見て心に浮かぶ抽象的なイメージの場合もある。[334] “All the letters I can write”では、珍しく美しくかけた手紙について、ビロードのような綴り、フラシ天のような文章だと言う。「この手紙」はまだ「君」のもとに届いていないのだろう。だから “Depths of Ruby”「ルビーのような深い想い」は飲み干されぬまま、言葉は「君」のために秘められたままだ、と言う。ルビーはその濃い赤色から情熱的に燃え上がるような心情のイメージがある。語り手にとって大事な人、手紙の受取手、に対する燃え上がる愛情が、ルビーに喩えられているのである。

All the letters I can write
Are not fair as this —
Syllables of Velvet —
Sentences of Plush,
Depths of **Ruby**, undrained,
Hid, Lip, for Thee —
Play it were a Humming Bird —
And just sipped — me —

[1593] “There came a Wind like a Bugle —”では暴風がやってきた日のことを描いている。以下に示すのはこの詩の前半部分である。人々は“an Emerald Ghost”「エメラルドの幽霊」を避けるように窓や戸を閉めるのだが、その瞬間、“The Doom's electric Moccasin”「その不吉な電光の靴」、つまり雷が木々の上を踏みつけるように落ちる。3・4 行目の“Green Chill”「青白い震え」、“ominous”「不気味な」という言葉を合わせると、ここでのエメラルドは闇の中で光る稲妻の緑色を指しているだけだとは考えにくい。エメラルドという宝石から感じられる人智を超えた恐ろしさ、という意味も含まれているだろう。古くから人々は石に秘められた神秘的な力を信じ、天然石や宝石をお守りとして身につけてきた。Dickinson も同様に宝石の不思議な力を感じていたに違いない。

---

[5] ベリルは緑や薄青色のものが一般的である。この詩で月の色にベリルが使われていることに関して、‘The moon is green cheese.’という表現があるためでは、と竹森ありささんからご指摘を頂いた。*OED Online* の moon (n.1.)検索すると、(P2.) **to believe that the moon is made of green cheese (also cream cheese)** and variants: to believe an absurdity. Formerly also †**to say that the moon is blue**.という慣用句が載っている。初出例は 1528 年。

There came a Wind like a Bugle —
It quivered through the Grass
And a Green Chill upon the Heat
So ominous did pass
We barred the Windows and the Doors
As from an **Emerald** Ghost —
The Doom's electric Moccasin
That very instant passed —
On a strange Mob of panting Trees

次に示す[245] “I held a Jewel in my fingers —”は読み手によって解釈が分かれる詩である[6]。語り手は穏やかな日にある宝石を握りしめて眠りにつく。なくしはしないと思っていたが、目覚めるとその宝石はどこかに行ってしまっていた。語り手に残されたのは“an Amethyst remembrance”「アメシストの思い出」だけだと言う。なくなった宝石がアメシストで、その思い出を指している、というわけではないだろう。これについて、亀井（1998:69）は「紫水晶のように透明感のある硬質の思い出」と宝石の透き通る質感や硬さの比喩だと解釈している。一方、エバウェイン（編）（2007:191）は「永続性を暗示するために宝石を動員している」と説明する。ただ単に宝石の質感を表したいのであればアメシストである必要はなく、エバウェインが述べるように何か抽象的なイメージを想起させるためだと考えるのが自然である。次節で述べるが、Dickinson は夜明けや日没に静謐な美しさを感じ、アメシストで喩えることがある。第 1 連の“warm”「暖かな」、“prosy”「普通の」という言葉と合わせると、ここでの“an Amethyst remembrance”は在りし日の「穏やかで美しい思い出」を表しているのではないだろうか。

I held a Jewel in my fingers —
And went to sleep —
The day was warm, and winds were prosy —
I said "'Twill keep" —

I woke — and chid my honest fingers,
The Gem was gone —
And now, an **Amethyst** remembrance
Is all I own —

3.1 から 3.3 節まで、9 種類の宝石の希少価値・硬さ・その宝石がもつイメージの類似性に基づくメタファーについて考察してきた。これらの比喩は数が少ないため、各宝石の表現の傾向を断定しにくい。唯一、ダイヤモンドが価値の高い宝石の代表例として捉えられているようだ、ということは分かった。

次の 3.4 節では前に示した表 3 で最も数の多かった、色と輝きの類似性に基づく比喩の例を分析する。

3.4　色と輝きの類似性に基づくメタファー

宝石の条件として色や輝きが美しいことが挙げられるように、各宝石にはそれぞれ固有の色があり、光の下できらきらと輝く。そこで Dickinson の詩では何か美しい色や輝きを表すのに宝石が用いられることがある。

では、まず、何の色と輝きを宝石でたとえているのか。次の表 4 は、そのような宝石のメタファーで喩えられているもの（主意、tenor）の一覧を示している。

[6] 中島（1973:195）はこの詩は「自分から去っていった愛が主題である」と解釈し、アメシストについて「貴重なものであると同時に生命の比喩でもある」と述べている。終わってしまった恋の大事な思い出が語り手の心の中に息づいているということであろう。実際に大事な宝石を握りしめていたのか、それとも中島（1973）のように宝石を愛の比喩ととるのか、どちらの解釈も成り立つ。

表 4 色と輝きの類似性に基づくメタファーでたとえられるもの

宝石	比喩	主意
amethyst	5	空（夕方（3）、夜明け（2））
beryl	3	植物（2）、月（1）
chrysolite	1	星（1）
diamond	1	雪（1）
emerald	10	植物（8）、鳥（1）、雷（1）
opal	4	空（夕方（2）、嵐の後（1））、家畜（1）
ruby	3	太陽の光（朝）（2）、赤ワイン（1）
sapphire	4	空（昼）（3）、牧草地（1）
topaz	2	太陽の光（夕方）（1）、花（1）

上記の表を見ると、宝石で喩えられるもののほとんどが自然物であることが分かる。人工物、たとえば、ルビーのようなリボンだとか、サファイアのような瞳だとか、そのような例は見受けられなかった。唯一、赤ワインがルビーに喩えられているぐらいである。メタファーを仮に“A is (like) B.”「A は（まるで）B だ」という図式で表すとすれば、A が自然物で B が宝石となる。また、特に空や天体が宝石に喩えられていることにも着目したい。次節以降、具体例を挙げて詳しく見ていきたいと思う。

3.4.1　宝石のような空

本節では宝石で喩えられる空の例を挙げる。どの時間帯の空かよって比喩として用いられる宝石が異なるため、夜明けから順に見ていきたい。

まず、夜明けの空の色に用いられるのはアメシストである。以下は[121] “As Watchers hang upon the East,”の後半第 2 連の引用だが、ここでは “Heaven”「天」を求める願望を、見張り番が東を待ち、乞食たちが空想のご馳走に浮かれ、喉が渇いた人が砂漠で小川のせせらぎを聞くようだ、などと喩える。さらに、見張り番が朝を迎える様子を、“when the East / Opens the lid of Amethyst”「アメシストの蓋を開き、朝を解き放つ時」と表現している。朝は暗闇の箱の中に閉じ込められており、アメシストの蓋を開く、すなわち太陽の光でだんだんと闇が紫色を帯びてくると、ようやく朝がやってくる。

As that same watcher, when the East
Opens the lid of **Amethyst**
And lets the morning go —
That Beggar, when an honored Guest,
Those thirsty lips to flagons pressed,
Heaven to us, if true,

おそらく幾人かは、「ここではアメシスト色というだけで、わざわざメタファーだと言わなくても良いのではないか」という疑問をお持ちかと思われる。しかし、“purple”ではなく“Amethyst”を使うことで、夜明けの紫色だけでなく、東の見張り番が持ち上げる蓋が宝石のように美しく、硬く、また粗末に扱うべきではない貴重なものだ、というイメージまで喚起されるのである。そう考えると、ただ色を指し示すために宝石を持ち出したとは考えにくい[7]。

また、[318]“I'll tell you how the Sun rose —”では夜明けの空の様子を“The Steeples swam in Amethyst —”「教会の尖塔がアメシストの中を泳いで」と表現している。空を背景に立つ尖塔がアメシスト色の海を泳ぐ魚に喩えられている。

続いて、昼の空の描写にはサファイアが用いられていた。[191] “The Skies can't keep their secret!”では天上の人々を“the Sapphire Fellows”「サファイアのような青い空の上に住む人々」と呼ぶ。西アフリカ沖合のテネリフ島の火山を引退する騎士に見立て、空の騎士たちに見送られるという[666]“Ah, Teneriffe!”では、夕焼けが閲兵する軍隊は“Sapphire Regiment”「サファイアのような昼空

[7] 無論、この詩では[st]の脚韻を踏むという動機づけもあっただろう。

の連隊」と呼ばれる。[291]“How the old Mountains drip with Sunset”は空の変化を描写しているのだが、“With a departing — Sapphire — feature — / As a Duchess passed —”「去っていくサファイアの影を連れて公爵夫人が通り過ぎたように」昼から夕方になると言う。後者 2 篇は他の時間帯の空と合わせて昼の空が歌われているという共通点がある。

闇が深まり夜が近づく夕方の空を表す際、夜明けの空同様アメシストが用いられる。[106]“The Daisy follows soft the Sun —”では、日が沈むにつれ雛菊が太陽に忍び寄るについて、“Enamored of the parting West — / The peace — the flight — the Amethyst —”「平和、飛翔、アメシスト、去りゆく西の空に魅了された」からだと述べる。ここでのアメシストは夕方の煌めく空の色を指す。また、太陽神が 4 頭立ての馬車で東から西に横切ることをモチーフにした[1636]“The Sun in reining to the West”では、太陽神の馬車が止まる時は音を立てずに“Whiffletree of Amethyst”「アメシストの横木」をぐるりと回す。また、“menaces of Amethyst”「アメシストの威嚇」によって我々が見ているものの力・価値・美などを夕闇はかえって露わにさせる、と語る詩（[1609] “Sunset that screens, reveals —”）もある。夕方の空はその光に照らされると脅威を感じるほどの色と光をもっているのだ。

夕方の空の色にオパールが用いられることもある。[15]“The Guest is gold and crimson —”では語り手を含む人々が朝にやってきてくれと願う日没の空を擬人化して描写している。“The Guest is gold and crimson —”「その客は黄金色で真紅色」とあるが、これは真っ赤な太陽とそこから伸びた金色の光の束のことであろう。オパールは地色によってホワイト/ブラック/ファイア/ウォーター・オパールの 4 種類に大分類されるのだが、続く“An Opal guest and gray”「オパール色で灰色」とは、太陽の周りの空の色を指し、前行と比較して青系統の色を表すと解釈できる。上着や外套は空が纏う雲のことであろう。

The Guest is gold and crimson —
An **Opal** guest and gray —
Of Ermine is his doublet —
His Capuchin gay —

He reaches town at nightfall —
He stops at every door —
Who looks for him at morning
I pray him too — explore
The Lark's pure territory —
Or the Lapwing's shore!

オパールは「見る方向により赤、青、黄色、乳白色などが混じり合い、虹のように変化する」（近山 2007:158）という特徴がある。この宝石の独特な色を利用したのが[1397]“It sounded as if the Streets were running”である。嵐が通り過ぎ、街は静かになったが、時空が歪んだのではないか人々が“Awe”「畏れ」を感じるほどであった。そして勇気のある人が隠れ家からそっと出てみると、“Nature was in an Opal Apron, / Mixing fresher Air”「自然がオパール色のエプロンをつけて新鮮な空気をかき混ぜていた」。擬人化された自然がオパール色のエプロンをつけているとはすなわち、自然のうち空がオパール色に染まっていたということだが、嵐が去って真っ青に晴れていたのならサファイアを使っても良いはずだ。しかし、ここでのオパールはただ単に青色を指しているわけでなく、様々な色に輝く宝石オパールのように、嵐の後の空も 1 色ではなく多様な色を含んでいたのである。

It sounded as if the Streets were running
And then — the Streets stood still —
Eclipse — was all we could see at the Window
And Awe — was all we could feel.

By and by — the boldest stole out of his Covert
To see if Time was there —
Nature was in an **Opal** Apron,

Mixing fresher Air.

Dickinson はよく庭に出て自然と触れ合っていたという。その庭を覆う広大な空は 1 日のいつであっても美しく感じられたのであろう。だからこそ、宝石の比喩が多用されているのである。

3.4.2　宝石のような天体

空だけでなく、空に浮かぶ月、星、太陽なども宝石に喩えられる。月をベリルに喩えた詩の例は既に 3.2 節で挙げたが、同じく緑系統でオリーブ色のカンラン石は星を喩えるのに用いられている。それが[24]“There is a morn by men unseen —” である。人には見えない神秘的な 5 月の朝を歌ったこの詩の第 3 連では、女官たちが輪になって踊る不思議な光景を、ある夏の夜に星たちが“cups of Chrysolite”「カンラン石のカップ」を揺らし、昼までお祭り騒ぎをするかのようだ、と言う。星がきらきらと光る様子を、擬人化した星がお茶の入ったカップを持ってはしゃぐ様子に喩えている。星や月、雷など、夜空に浮かぶ光が緑がかった色の宝石に喩えられる（[24], [737], [1593]）のは、やはり暗闇の中では黄色ではなく少し薄暗い色に見えるためであろうか[8]。

Ne'er saw I such a wondrous scene —
Ne'er such a ring on such a green —
Nor so serene array —
As if the stars some summer night
Should swing their cups of **Chrysolite** —
And revel till the day —

太陽の光は真っ赤なルビーか、黄色のトパーズに喩えられる。以下は[304] “The Day came slow — till Five o'clock —”の前半第 1・2 連である。朝 5 時に急に太陽が現れて明るくなる空の様子を、“Hindered Rubies”「（手の中に）隠されていたルビー」がこぼれ落ちたかのようだ、と言う。また、第 2 連では空が紫から黄色になっていく様子を、日の出が揺れ広がり“Breadths of Topaz”「トパーズの光の幅」が夜を押し込むようだった、表現している。どちらも太陽の光を表している点は共通なのだが、ルビーは太陽そのものの色、トパーズは太陽から伸びた光線の色を指しているようだ。

The Day came slow — till Five o'clock —
Then sprang before the Hills
Like Hindered **Rubies** — or the Light
A Sudden Musket — spills —

The Purple could not keep the East —
The Sunrise shook abroad
Like Breadths of **Topaz** — packed a Night —
The Lady just unrolled —

[204]“A slash of Blue —”の後半でも、太陽の色を表すためにルビーが用いられている。Dickinson にとって朝の空とは紫・赤・金色で構成されているもので、その色彩感覚は前に挙げた[304]でも共通している。

little purple — slipped between —
Some **Ruby** Trousers hurried on —
A Wave of Gold —
A Bank of Day —
This just makes out the Morning Sky.

本節では詩の中で宝石に喩えられる天体について考察を行った。月・星・太陽はどれも光を放

[8] [k]の頭韻（cups, Chrysolite）や[ait]の脚韻（night, Chrysolite）を踏むため、という要因も大きい。

ち、人間の目にはきらきらと輝いて見える。それが同じように光に当たって美しく輝く宝石に喩えられる動機づけとなっていると言える。

3.4.3　宝石のような植物

空や天体だけでなく、地上に生茂る美しい植物も Dickinson の詩では宝石に喩えられる。植物といえば青々と輝く葉が印象的なのか、エメラルドやベリルがよく用いられている。例えば、[219] “She sweeps with many-colored Brooms —”では、夕方に地上の景色が移り変わる様子を、“Housewife in the Evening West”「夕方の西空の主婦」が箒で掃いていく様子に喩えているのだが、その中で“you've littered all the East / With Duds of Emerald!”「東をエメラルドのボロ布で散らかした」というのは地上で夕陽に輝く木々や草花のことであろう。 [1183]“Step lightly on this narrow spot —”の“the Breast / These Emerald Seams enclose.”「エメラルドの縫い目が包む胸」も緑豊かな大地の色をエメラルドで表している。エメラルドの縫い目とは木々の途切れ目のことで、その縫い目が囲む胸とは母なる大地のことを指すと思われる。

ある 1 つの植物を喩えるのに宝石が使われる場合もある。[392] “Through the Dark Sod — as Education —”は擬人化された百合の成長を描く。その中で死を恐れることなく喜びを感じながら草の合間に揺れる緑色の蕾を“Beryl Bell”「ベリルの鐘」と呼んでいる。“Bell”は蕾の形の類似性に基づくメタファーである。

Through the Dark Sod — as Education —
The Lily passes sure —
Feels her white foot — no trepidation —
Her faith — no fear —

Afterward —in the Meadow —
Swinging her **Beryl** Bell —
The Mold-life — all forgotten — now —
In Ecstasy — and Dell —

さらに、 [697] “I could bring You Jewels — had I a mind to —”は、“Never a Fellow matched this Topaz — / And his Emerald Swing —”「今までこのトパーズにふさわしい人がいなかった— / それから風に揺れるエメラルドに—」という文で、黄色いホウセンカの花と緑の葉をどちらも宝石を用いて喩えている。

3.4.4　自然物は宝石である

3.4.1 から 3.4.3 節まで、宝石に喩えられる空・天体・植物の例を観察してきた。“A is (like) B.”「A は（まるで）B だ」という図式において、A が自然物で B が宝石となる例である。面白いことに、Dickinson の詩の中には、A が宝石で B が自然物、つまり「宝石はまるで自然物のようだ」という比喩を用いたものもある。次の詩、[223] “I Came to buy a smile — today —”を見てほしい。

I Came to buy a smile — today —
But just a single smile —
The smallest one upon your face
Will suit me just as well —
The one that no one else would miss
It shone so very small —
I'm pleading at the "counter" — sir —
Could you afford to sell —
I've **Diamonds** — on my fingers —
You know what **Diamonds** are?
I've **Rubies** — like the Evening Blood —
And **Topaz** — like the star!
'Twould be "a Bargain" for a Jew!
Say — may I have it — Sir?

これは語り手が宝石を対価に“Sir”「あなた」の微笑みを買おうとする取引を描いている。対価に支払う宝石は、ダイヤモンド、夕焼けの太陽や血のように赤いルビー、そして星のように黄色く輝くトパーズである。宝石に例えることで自然物の美しさを喩えようとしたこれまでの例とは逆に、美しい自然物に例えることで宝石の価値の高さを示そうとしているのだ。ただ、語り手がどんなに取引を持ちかけても男性から返事が返ってきていないことから、残念ながら取引は失敗に終わってしまうようである[9]。

4. 終わりに

本稿では Dickinson の詩における宝石の比喩について、特に 9 種類の宝石の語に着目して分析を行なった。比喩的な意味で用いられているものは大きく 4 種類のメタファーに分類されることを示し、それぞれ希少価値、硬さ、宝石のもつイメージ、色と輝きの類似性に基づくメタファーを具体例を用いて考察した。その結果、硬さや宝石のもつイメージの類似性に基づくメタファーには例が少なく宝石間の類似点や相違点を見極めることはできなかったが、ダイヤモンドが希少価値の類似性に基づくメタファーにしばしば用いられることが分かった。色と輝きの類似性に基づくメタファーは特に自然物を喩えるのに使われており、宝石固有の色を生かして空や天体、植物などを表していた。さらに、逆に自然物で宝石を喩える詩も存在することも明らかになった。

今後の課題として、まず、その他の宝石が現れる詩の分析を進め、宝石毎、もしくは色の系統毎の傾向をつかみたい。また、質的分析の裏付けとして計量分析を用いることで、主張の補強を試みたい。

参考文献

エバウェイン, D. ジェイン (編) (2007). 『アメリカ文学ライブラリー4　エミリ・ディキンスン事典』. 鵜野ひろ子(訳). 雄松堂出版.

フィッシャー, P. J. (1970). 『宝石の科学』. 崎川範行(訳). 共立出版.

Johnson, T. H. (編) (1960). The Complete Poems of Emily Dickinson. Little Brown and Company.

亀井俊介 (1998). 『対訳　ディキンソン詩集―アメリカ詩人選(3)』. 岩波書店.

中島完 (1973). 『続自然と愛と孤独と』. 国文社, 東京.

白水晴雄・青木義和 (1989). 『宝石のはなし』. 技報堂出版.

近山晶 (2007). 『鉱物・宝石の不思議』. ナツメ社.

[9] どんなに価値のある宝石をあげようとも微笑みをくれない相手の男性は誰なのだろうか。この疑問について、絶対に無理な取引を試みる相手なのだから神様ではないか、と岩根久先生と髙橋新先生からご指摘を得た。

色彩語 white を含む強意直喩表現の分析
―*white as snow/ a sheet/ marble* の比較―

竹森ありさ

1. はじめに

本研究は white を含む強意直喩表現について分析を行う。

強意直喩表現(intensifying simile) は、基本的に [(as) adj. as N]という形式をもっており、形容詞が示す性質の程度を高める proverbial な表現である。最初の as はしばしば省略されることがある。(1)に強意直喩表現の例を示す。

(1) a. good as gold
b. free as a bird
c. cool as a cucumber
d. white as snow

このうち(1d)のような形容詞に色彩語の white を含むものを本稿で扱う。as…as の直喩と異なり、色彩語メタファーには、 “white lie”、 “feel blue” など、嘘や感情といった、本来物理的色彩をもたないものに色を当てはめた表現が見られる。しかし、これらに比べて強意直喩表現は、 “Her skin is as white as snow.” のように、視覚的なつながりがある場合が多い。

強意直喩表現の特徴の一つとして、[(as) adj. as N]の名詞部分を様々に入れ換え可能な点がある。white の場合は、*white as snow* の他 *white as a sheet, white as ghost, white as marble, white as milk, white as lily* などが挙げられる。これらは基本的には全て「真っ白」の意味であるが、名詞によって強意直喩表現の使用傾向―伝えられるニュアンス、使用の文脈と直喩が修飾する語彙、いつから英語に出現したか、など―は異なる。本稿では *white as snow, white as a sheet, white as marble* の 3 つを取り上げ、共通点・相違点・意味変化を観察し、これらの使用特徴が生じる原因を探る。意味変化の観察を行うのは、強意直喩表現が古くから使われ慣用化したものがあるという点を踏まえ、分析の上で歴史的視点を取り入れることが必要だと考えるためである。

以下、2 節で先行研究を紹介し、3 節で研究方法を説明する。4 節で強意直喩表現のデータを示し、使用傾向を指摘した上で、5 節でその考察を行う。6 節で結論と今後の課題を述べる。

2. 先行研究

「強意直喩表現」は Svartengren(1918)での[(as) adj. as N]の形式をもつ直喩の呼称の訳である。この形式の直喩には ‘intensifying similes’の他様々な呼び方―'stock similes’ (Norrick1986)、‘*as*-similes’ (Moon2008)など―がある。また、本稿では、“Her skin is as white as snow.” の “her skin” にあたる最初の名詞(句)を N1、adj. as に続く二つ目の名詞(句) “snow”を N2 と呼ぶ。

強意直喩表現の特徴の一つとして、Svartengren(1918)は、文学作品によく出てくるが、新聞や論文には見られないことを指摘している(*ibid*.462)。Moon(2008)も、コーパス Bank of English から強意直喩を抽出した結果、小説には *as*-similes と強い結びつきがあると述べている(*ibid*.23)。

強意直喩表現の N2 に関して、Norrick (1986)は、N2 はその言語話者の間でよく認識されているものであり、何度も使用される N2 は、あるカテゴリー内のプロトタイプと判断できる根拠を示してくれるので、強意直喩表現は認識のパターンを考察するために重要な手掛かりになると主張している。また、一つの形容詞に異なる N2 が連なる場合、例えば *“Black as night, Black as soot, Black as the devil”*などは、それぞれの含意(connotation) があることを指摘している(*ibid*. 42)。Moon(2008)はこの主張に対し、名詞によって “humour, affective meaning, and other features of interpersonal meaning”などを伝えられると付け加えている(*ibid*. 9)。加えて、Moon(2008) は N2 が異なるのは、形容詞が多義的で意味が異なる場合があるからだと述べ、具体例を挙げ、 “*red as blood* relates to colour, *red as a beetroot* typically indicates embarrassment or anger”と説明している(*ibid*.8)。しかし、形容詞の意味に合わせて特定の N2 が選択される根拠には触れていない。*red as blood* の直喩は red の色相について強調する表現として使用されると言うが、*blood* にも直喩の使用者が意図する含意があるのではないか。

N2 の使い分けとその文脈に関して言及している研究は、吉村(1997)である。1400 年ごろの作品 *Emaré* の中で使用されている white as N2 の強意直喩表現が、主人公エマレの生活環境に合わせ、”whyte as whales bone, whyte as lylye-flowre, whyte as fome, whyte as flour” と名詞が変化すると述べている(*ibid*. 552-3)。これらの強意直喩表現について、“lylye-flowre”に関しては潔白と純粋を意味していると説明されているが(*ibid*. 553)、“whales bone”, “fome”, “flour”の言葉が何を象徴しているかを示す必要があるだろう。

以上の先行研究は、adj.と N2 のつながりに重点が置かれてきたものが多い。強意直喩表現の使用傾向と、N2 で表されるものの認識について分析するためには、N1 も合わせて見る必要があると言える。また、N2 が伝達する含意についても、その名詞が文化的にどう捉えられているかに注意した上での考察が必要である。これらの問題点を踏まえ、次節で研究方法を説明する。

3. 研究方法

本節では、*white as snow, white as a sheet, white as marble* の使用傾向の比較方法及びこの 3 つを分析する理由を述べる。

3.1 分析方法

強意直喩に慣用表現があるという性質上、歴史的な視点が分析に必要という点を踏まえ、時代を遡って強意直喩を分析するためにイギリス英語を対象とする。用例を採取したコーパス及びデータベースは表 1 の通りである。強意直喩表現は文学作品に使用される傾向が強い(Svartengren 1918、Moon 2008) ため、小説を扱った HUM19UK や BNC の書き言葉に含まれる Fiction 部分から用例を抽出した。18 世紀以前の用例は主に、英国・英語圏刊行物を集めた EEBO、ECCO からのものである。また、補助的に Google Books[1]を使用した。

表 1 本研究使用のコーパス・データベース

コーパス・データベース名	時代	ジャンル	総語数
British National Corpus (BNC[2])	1980 年代~ 1990 年代	Spoken/Written	S:約 1000 万 W:約 9000 万 FIC:約 1600 万
The Huddersfield, Utrecht, Middelburg corpus of 19th century British fiction (HUM19UK)	1800 年代~1890 年代	小説のみ	約 1300 万
Eighteenth Century Collections Online (ECCO)	1700 年代~1790 年代	Written	約 207,000 巻[3]
Early English Books Online (EEBO[4])	1470 年代~1690 年代	Written	約 7 億語 約 25,000 巻

データベースとコーパスから用例を抽出し、それぞれ 3 つの直喩の N1 と文脈(どのような状況で使用されているか)を明らかにし、使用状況の差を比較した上で N2 の認識について考察する。また、直喩のニュアンスや N1 には現代と比べて変化が起こっているのか、起こっているならばどのように変遷したかを確かめる。

---

1 Google Books の用例は British English に限定して検索した。Google Books での書誌情報はデータをスキャンした図書館の所在地に基づいているので、著者の出身地を確認した上で、イギリス英語の書籍と判断している。

2 発表年が 1980 年代〜1990 年代ではないデータ(例：Dickens *Oliver Twist* など)は除いた。

3 語数に関しての説明が公式サイト(https://www.gale.com/jp/c/eighteenth-century-collections-online)にないため、収録巻数を記載した。

4 EEBO には異綴が含まれるため、white は hewe, swite, wite, whtc, whie, whyght, whyte, quhyte ,whit, quhite を検索している。また、EEBO と ECCO で複数の版が収録されているために内容が重複したものは計上していない。

これらのデータを示した上で、使用の差異が生じる原因、現代の使用傾向に至った原因を考察する。

3.2 *white as snow/ a sheet/ marble* の調査理由

本節では、*white as snow/ a sheet/ marble* を調査する理由を述べる。BNC 全体と HUM19UK で *white* を含む強意直喩表現を抽出すると、最も頻度が高い N2 は *white as snow* と *white as a sheet* である。この二つに関しては近現代の用例が得やすいと考え、分析対象とした。

white as marble については、頻度が高くはないが、顔や体の青白さを示す用法があり、これは *white as a sheet* のもつ意味と類似しているため比較がしやすいと考えた。また、snow、sheet、marble はそれぞれ質感や用途が異なる物なので、3 つのシミリーの違いが顕著に出ることで N2 で表される物の捉え方の差異が分かりやすいという予想があることも選択理由である。

表 2　近現代コーパスにおける *white as snow/ a sheet/ marble* の頻度

	BNC 頻度/per mil	HUM19UK 頻度/per mil
white as snow	20 / 0.20	23 / 1.76
white as a sheet	24 / 0.24	11 / 0.84
white as marble	2 / 0.02	3 / 0.22

4 節ではそれぞれの直喩について、使用できる N1 の範囲や用例を観察していく。

4. 3 つの直喩の比較

4.1 N2 の語彙・強意直喩表現の出現

それぞれの直喩を比較する前に、snow/sheet/marble の 3 語の出現時期と、強意直喩表現として使用され始めたのはいつかを確認しておく。それぞれの出現時期を図 1 に明示した。snow は 9 世紀、sheet は 8 世紀から *Oxford English Dictionary* (以下、*OED*)に初例があり、どちらもゲルマン語系である。 marble は 12 世紀 からで、フランス語からの借入語である。
OED によると、as…as の形で用いられたのは、*snow* は OE からで、OED にその記載がある。*sheet* は、確認できる範囲では 1659 年が最も古く、EEBO の例である[5]。*marble* は、*sheet* よりも早い 1597 年で、こちらも EEBO 記載である。

3 つの直喩のうち、*white as snow* が最も歴史がある。sheet という単語は OE からあるものの、後発の *marble* の方が強意直喩としての使用が約 70 年早く、*white as a sheet* は 3 つの中では比較的新しい表現である。

図 1　snow/sheet/marble の語彙・強意直喩出現時期

Mod E 1500	◦*white as a sheet* 1659 ◦*white as marble* 1597
ME 1100	-marble 1180
OE 700	-snow 825 ◦*white as snow* OE　-sheet 725

※初出年は *OED* と EEBO による

[5] *white as a sheet* の OED での初例は 1752 年であり、名詞 sheet 3. c.に記載がある。*white as marble* は 1835 年で、名詞 pillar 6.a.に例が見られる。

4.2　N1 と文脈

white as snow/ a sheet / marble について、各々N1 と文脈を比較しながら共通点・相違点・意味変化を観察する。

表 3 は、現代から 19 世紀まで、表 4 は 18 世紀以前のデータから採集した 3 つの直喩の N1 の使用状況を表したものである。灰色に塗り潰した箇所は、その直喩において喩えられたものがあったことを、白い箇所はなかったことを示している。表 4 の方が表 3 より N1 項目数が少ないが、これは 18 世紀以前のデータが現代から 19 世紀までのものに比べ少数だからである。

表 3　現代〜19 世紀までの N1 の使用

			N2		
			snow	sheet	marble
N1	身体部位	shoulders			■
		breast			■
		fingers			■
		face	■	■	■
		cheeks		■	■
		forehead			■
		lips			■
		tongue		■	
		neck	■		■
		hair	■		
		beard	■		
		brow	■		
	人工物	衣服	■		
		布製品	■		■
		内装	■		
		家具	■		
		建築物	■		■
		石(建築材)			■
		料理	■		■
	自然物	動物	■		
		海の波	■		
		砂漠		■	
		月	■		
		花	■		
		氷	■		
	無形/抽象概念				

表 4　18 世紀以前の N1 の使用

	N2		
	snow	sheet	marble
skin			■
hands			■
face	■	■	■
teeth	■		
tongue		■	
neck	■		
hair	■		
beard	■		
衣服	■		
布製品			
火薬の材料			■
石(建築材)	■		■
船	■		
料理	■		
動物/虫	■	■	
海の波		■	
石/岩	■		■
地面	■		
花		■	
卵の殻			■
幽霊		■	
人種		■	
性格/感情	■		■
想像上の生物	■		

表 3､4 に設定した N1 のカテゴリーは「身体部位」、「人工物」、「自然物」、「無形/抽象概念」の 4 つである[6]。「無形/抽象概念」は 18 世紀以前の例のみに見られた。この全ての分類に *white as snow/ marble* が、3 つの分類に *white as a sheet* が使用されているが、カテゴリー内の事物一つ一つには差が出ている。*white as snow* は 3 つの直喩のうち最も幅広いと言える。特に身体部位名詞において、同一の N1 だとしても表す意味が異なる例が見られるため文脈もまた適用できる範囲が大きい。(2)は N1 が髪であり、(2a)が悪い状況に対して用いられている一方、(2b)は “venerable”の言

[6] 身体部位名詞以外を英語表記にしていないのは、その他のカテゴリーにおいて実際に使用されている単語にそれぞればらつきがあるためである。例えば「衣服」の場合 “shirt”や “dress”などが実際の例で見られるが、表の見やすさを優先し、「衣服」と表記した。

葉から分かるように賞賛である。(3)の N1 は髭であり、(3a) は老人の弱々しさを描写する一方、(3b)の髭の持ち主は “the place of honour”に座っている。

(2)a. If these men stay here much longer my hair will be **white as snow** . (HUM19UK)

b. The owner was tall, and of a venerable presence, …and his hair as **white as snow** . (HUM19UK)

(3)a. An old--old man sat in his cottage on the verge of the Black Forest. He had numbered ninety years ; his head was completely bald--his mouth was toothless--his long beard was **white as snow**, and his limbs were feeble and trembling . He was alone in the world… (HUM19UK)

b. They were assembled in the men’s tent, to the number of ten persons ; the place of honour, the corner, being given to my father’s uncle, the elder of the tribe, an old man, whose beard, as **white as snow**, descended to his girdle . (HUM19UK)

時代を遡っても white as snow は肯定的にも否定的にも使用できる例が見られる。(4)の N1 は同一のものではないが、(4a) は 鎧を着た輝く(“shone”)乙女の姿であり、(4b)は “repent”や “cursed”などの語が見られる。

(4)a .and on the hill beheld the warlike maid, as **white as snowe** vpon the alpine clift the virgin shone, in siluer armes arrai... (EEBO)

b. when gerard heard duke naymes, he changed colour, and waxed as **white as snow**, repenting in himselfe the dede that he had done to his brother, hee cursed to himselfe gybouars, in that hee beleeued his counsel… (EEBO)

その他「人工物」、「自然物」、「無形/抽象概念」の例は以下のとおりである。N1 はそれぞれ “a truly magnificent swan”、 “a dish of rice”、“contrition”。

(5)a. The robin nodded its head and flew off Two minutes later, a truly magnificent swan, **as white as snow**, came swooping in and landed on a branch nearby. (BNC)

b. Nothing could be more delicious than the meal which she had prepared : there was a dish of rice, **white as snow**, and near it a plate of roast meat , cut into small bits… (HUM19UK)

c. …why say thy sinnes were blacker then is ieat, yet may contrition make them as **white as snowe**… (EEBO)

white as a sheet は 3 つのカテゴリーに使用されてはいるものの、具体的に使える名詞はかなり限られている。分析したデータは、*white as snow* が 60 例、*white as marble* が 58 例あるが、*white as a sheet* は 81 例採集した結果この狭さが表れている。*white as a sheet* は現代では専ら顔面蒼白を意味し、(6)のように、*OED* の形容詞 white の項目にもその意味の記載がある。顔面蒼白の例は(7)に示した。(7a)は病院の場面であり、(7b)の N1 “he”は恐怖を抱いている。

(6)4. a. Abnormally pale or pallid, esp. from illness, or from fear or other emotion. Frequently in (typically hyperbolic) similes (cf. *as white as a sheet* at SHEET *n.*[1] 3c), in extended use designating an emotion causing pallor (*as white rage, white terror*), or in allusive phrases expressing cowardice (cf. WHITE-LIVER *n.*, WHITE-LIVERED *adj.*). (*OED*)

(7)a. George Cowley arrived at the hospital just as Doyle's now unconscious body was being wheeled into the emergency operating room… As Cowley walked towards the slightly hunched figure of Bodie, he was able to see Doyle's peaceful face, eyes closed, **white as a sheet**… (BNC)

b. When they took him out of the black hole after six hours ' confinement he was observed to be **white as a sheet** , and to tremble violently all over , and in this state at the word of command he crept back all the way to his cell,…

(HUM19UK)

表 3 と表 4 に "tongue"、表 3 に砂漠の N1 が見られる。これらは後述するが、顔面蒼白の用法と関連している可能性がある。

18 世紀以前には海や花に使用する例があり、近現代と比べて大きな差があると言える。

(8)a. …when the sloe-tree's as **white as a sheet**, sow your barley whether it be dry or wet…

(EEBO)

b. I am just come up from the beach, and I think I never saw a greater sea! why it breaks over the head as **white as a sheet** !!

(1767/Google Books)

white as marble は *snow* と同様にカテゴリー全てに使用されている。しかし分析した用例のうち身体部位に使用されているものが 7 割を占め、体以外の用例はまばらである。個々の N1 を見ると、*snow* よりも身体部位名詞が幅広く使える特徴が見られる。こちらも(9)に示すように、肯定否定両方に使用できる。(9a,b)は女性の額と胸の美しさを表す一方、(9c) は死体の青白さを描写する。

(9)a. Her hair was golden and wavy ; her eyes deep blue , guarded by long lashes and arched by what seemed to be a touch of an artist's pencil ; her forehead high and **white as marble** , her ears dainty in their smallness... (1901/Google Books)

b. She watched him gazing amorously at those twin orbs(=breast)[7], **as white as marble**, and as plump as pigeons. (BNC)

c. . . …an old man kneeling beside the body of a female,… Her tresses were dishevelled, and dripping with wet, as were her garments ; and her features **white as marble** .

(HUM19UK)

また、18 世紀以前の *white as marble* の用例は 19 あり、そのうち岩や建築材が喩えられているものが 8 例ある。近現代では人間の肌に使用する例が中心的であるため、使用文脈が多少変化したと言える。

(10)a. That Castle has been burnt to ashes by lightning; but the few remains of it that are left, shew it was stately Edifice; the stones it was built with, were as white as marble… (ECCO)

b. In patzolo a place of about 1000 people all swallowed up (by an earthquake), Furla another Town of about the same number of Souls, had the like fate, and the Rocks adjacent which formerly were white as Marble , are now black and as if burnt with Fire… (1694/Google Books)

ここまで *white as snow/a sheet/marble* の 3 つの強意直喩表現の N1 と文脈をかいつまんで観察した。3 つの強意直喩が、どの N1 に使えるかは差があり、*white as snow* > *white as marble* > *white as a sheet* の順に範囲が広いと言える。次節で考察するのは、①*white as snow* の文脈と N1 の広さの理由、②*white as a sheet* の文脈の狭さと狭まった原因、③*white as marble* がなぜ身体部位に使われるように定着したか、なぜ同じ身体部位でも異なる意味で使用できるか、の 3 つの問題である。

[7] 用例にかっこ内で示す内容は筆者の注である。

5　考察

前節で観察したデータより疑問点を指摘し、*white as snow*、*white as a sheet*、*white as marble* の順に、使用特徴の原因を探る。

5.1 *white as snow*

OE の時代からあるこの強意直喩は、使用文脈が幅広い。BNC では *white as a sheet* に次いで頻度が高く、HUM19UK のコーパスでは最も多いので、使用される回数が多いという特徴もある。この表現は他の言語でも一般的に見られる(Svaertengren1918:234) ので、雪は白さの典型であったと言えよう。おそらく OE の時点で、*white as snow* は white as + N の強意直喩表現のフォーミュラであったのではないか。つまり white as snow を元にした上で、名詞を様々に入れ換えて *white* を含む強意直喩表現のパターンが作られていった可能性がある。元々*white as snow* という一つの直喩が中心に用いられ、様々な文脈に使用でき、その後 *snow* 以外の名詞を入れてバリエーションが増えたものの、*white as snow* の使用範囲は他の white を含む強意直喩表現に強く影響を受けなかった。そしてその文脈の幅広さは、現代まで保持されていると思われる。

BNC と HUM19UK の用例数を見ると *white as snow* と *white as a sheet* が２強で、後はまばらである。EEBO で *white as snow* に次いで多いのは *white as milk* である。近現代の *white* を含む強意直喩表現は *white as snow/ a sheet* の二つに収斂したと言えるだろう。

現代から 19 世紀までの *white as snow* と *white as marble* を比較すると、N1 が身体部位の場合は、前者は “face”、“neck”、“beard”など顔周りの名詞に集中している一方、後者の方が N1 が幅広い上に、“shoulders”、“breast”、“fingers”など顔から離れた部位にも使用されている。二つの直喩が影響し合い担当する範囲ができた可能性がある。また、同じく現代から 19 世紀までの *white as a sheet* は専ら顔の青白さについて使用するので、身体部位の喩えとしてこの直喩も影響があったのではないか。

5.2 *white as a sheet*

3 つの強意直喩表現のうち、おそらく最も大きな変化をしているのが *white as a sheet* だと言える。現代から 19 世紀までの使用文脈は顔面蒼白のみであるが、この意味が中心となる前は、花や海の波に用いられた例が見受けられる。

(8)a. …when the sloe-tree's as **white as a sheet**, sow your barley whether it be dry or wet…
(EEBO)

b. I am just come up from the beach, and I think I never saw a greater sea! why it breaks over the head as **white as a sheet** !!
(1767/Google Books)

この(8)は布の広がる様に注目されている。水平方向に広がりをもつ白いものに対し sheet と喩えることがあり、*OED* によると初出は 1593 年である。日本語の「一面の〇〇」という表現に近いと思われる。(8a) は花が満開の様子であり、(8b) は波が眼前に広がっている様を sheet と言っているのである。*OED* の sheet の項目に記載されている意味は(11)を参照。

(11)8. A broad expanse or stretch of something lying out flat, presenting a white or glistening surface, or forming a relatively thin covering or layer.
(*OED*)

white as a sheet 顔面蒼白の使用例が最初に現れるのは 1723 年で、18 世紀から顔色の悪い様に用いられるのが固定されていったと考えられる。sheet のシンボルは「死、亡霊」(Vries 1974:573)なので、慣用化していく 18 世紀の間に、その面が際立ったと考えられる。(12)の N1 が “tongue”と砂漠の例は、体調不良や大地の不毛さが sheet の象徴「死」と結びつくものだと捉えるなら、顔面蒼白の意味が固定していく過程の中で現れた例としては不自然な存在ではないだろう。

(12)a. He was restless , an oppression and difficulty of breathing , prostration of strength , his ... tongue as white as a sheet…
(1778/ Google Books)

b ...the country being entirely a desert… the country is very even and white as a sheet , nothing vegetable grows upon them ; (1819/Google Books)

また、*Oxford IDIOMS Dictionary for learners of English* では、この直喩は “(as) white as a sheet/ghost”と表記され、sheet に「死」「亡霊」の象徴があるということを示唆している。BNC と HUM19UK では、N2 のスロットに死に関連する言葉が *ghost* の他にも現れる。BNC では *bone* と *ash*、HUM19UK では *death*、 *ashes*、*tombstone*、*gravestone*、*corpse* が見られる。これらの N2 には、Moon(2008)の言う “conceptual simile”が関わっていると考えられる。Moon (2008)は、*as*-similes の型と N2 がもっている性質を利用して新たに強意直喩表現を作ることができると指摘している。*thick as fleas/locusts/midges* などの表現に thick as NEGATIVELY-EVALUATED INSECTS という “conceptual simile” が存在することによって、例えば *thick as flies* のような新しい直喩を生み出せるという(*ibid*. 33)。

white as a sheet の場合、white as DEATH という概念シミリーを想定することができる。この概念シミリーによって sheet の象徴的意味「死」「亡霊」が際立ち、「顔面蒼白」の使用の固定化が促されたと考えられる。

5.3 *white as marble*

white as marble は身体の美しさ、または青白さを表すのが 18〜19 世紀に定着したと考えられる用法である。慣用化する以前は岩や建築材がこの直喩で喩えられる例が見られる。人間の肌よりも岩や建築材などのほうが実際の色や質感が大理石に近く、喩えとして理解しやすいはずだが、何故身体に用いられるようになったのだろうか。また、身体に使う場合でも、美しさや青白さなど異なる意味で使用できるのは何故か。

まず、顔が青白いという状況は、(9c) のように体の冷たさと隣接している場合が多いと言えよう。死体の肌は血色が悪い上に体温がなく冷たい。死体であればさらに死後硬直をも見る者に思わせるので、marble のもつ固さ[8]という側面も直喩に表れているだろう。marble の固さを表す例文は(13)に示した。

(9)c. …an old man kneeling beside the body of a female…Her tresses were dishevelled , and dripping with wet , as were her garments ; and her features white as marble . (HUM19UK)

(13)1642 Sir T. Browne *Religio Medici* (new ed.) 134 I have no conscience of Marble to resist the hammer of more heavy offences. (*OED*)

また、marble は白いという特徴以外に冷たいという側面があり、marble-minded, heart of marble などの表現に表れている。これらは人の心を大理石に喩えるフレーズであり、このような表現の存在が *white as marble* を身体部位に用いるのに作用したのではないか。*OED* の形容詞 marble の項目 3.b.にこの比喩義の記載があり、「冷たい心」で用いられているのは 1598 年が最初である。

(14)1598 J. Florio *Worlde of Wordes Inespiabile*, inexpiable,..vnmercifull, deadlie, marble-minded. (*OED*)

次に、美しさを表すことができる根拠として、大理石は「記念建造物と彫像は大理石で造られることが多いので、神、崇拝、権威を表す」ものである(Vries 1974:416)。崇拝の中に美しさが共存し得るなら、そこから人の美しさを表すようになった可能性がある。*OED* の名詞 marble の用例には、 建築材の大理石と “fair” “beautiful”の語が共起しているものがある。

(15)marble,n. I. Senses relating to the stone.

1.**a.** Limestone that has been recrystallized by metamorphism and is capable of taking a polish; *esp.* one that is pure white or has a mottled surface, such as is often used in sculpture and architecture. Also more

[8] 大森文子教授のご教示による。

generally: any stone that will take a polish and can be used for decorative purposes in building or sculpture.

β.

*a*1200 *MS Trin. Cambr.* in R. Morris *Old Eng. Homilies* (1873) 2nd Ser. 145 (*MED*) [Mary Magdalene] nam ane box ȝemaked of marbelstone.

*c*1330 (▸ ?*c*1300) *Bevis of Hampton* (Auch.) 4609 (*MED*) A faire chapel of marbel fin.

?*a*1400 (▸ *a*1338) R. Mannyng *Chron.* (Petyt) ii. 341 (*MED*) Of marble is þe stone, & purtreied þer he lies.

?*a*1425 *Mandeville's Trav.* (Egerton) (1889) iii. 9 All þe pilers er of marbill.

1474 W. Caxton tr. *Game & Playe of Chesse* (1883) iii. iv. 110 Also colde and harde as marbill.

1553 R. Eden tr. S. Münster *Treat. Newe India* sig. Fv^{v} Ouer this ryuer is a very fayre bridge of marble.

1617 F. Moryson *Itinerary* i. 162 All the pauement is most beautifull of ingrauen Marble.

1705 J. Addison *Remarks Italy* 270 Not to mention what a huge Column of Granite, Serpentine, or Porphyry must have cost... It is well known how these sorts of Marble resist the Impressions of..Instruments.

1794 A. Radcliffe *Myst. of Udolpho* II. ii. 40 From the portico they passed a noble hall to a staircase of marble.

1857 J. Ruskin *Polit. Econ. Art* i. 46 Marble..lasts quite as long as granite, and is much softer to work.

1916 *Bull. U.S. Bureau of Mines* No. 106. 122 Marble is used for foundation stone and retaining walls.

1974 M. Ayrton *Midas Consequence* viii. 187 The Greeks punched out marble in the whitest and clearest light on earth and at their best, before the steel chisel was invented, they splintered it out in particles so that the bruised stone ate the light in minute facets.

1988 *S. Afr. Panorama* May 24/2 The alternative was built-in art or clever devices..like painting concrete pillars to look like genuine marble.

加えて、慣用化する前に、大理石と色や質感の類似した岩や建築材を喩えるのではなく、身体部位を喩えるのは、新奇さや、意外性を出す意図があると言える。色彩語の直喩の意外性が高いと慣用化しにくいという可能性を須賀川(1999)は指摘している。これは *white as marble* の意外性がどのように失われていったかを考える必要がある。

5.4 考察のまとめ

ここまで *white as snow/a sheet/marble* の使用傾向と、なぜその傾向が生じるようになったかを分析した。古くからある *white as snow* は white as N の強意直喩の基本の型であり、そのために他の強意直喩表現の影響を受けづらく、幅広い文脈で使用できることを主張した。*white as a sheet* は、sheet という単語は時代によって捉え方が異なるが、強意直喩が慣用化して顔の青白さを表すようになった。sheet が「死」「亡霊」の象徴であることと、white as DEATH の conceptual simile が現代の用法の定着を促したと考えられる。*white as marble* は身体部位の美しい白さと不健康な白さ両方について表す言葉である。この使用特徴は、marble-minded, heart of marble などの marble の比喩義を表した言葉が影響し、冷たさや固さに着目する場合と、美しさに着目する場合があるので *white as a sheet* より使用文脈が幅広くなったのだと考えられる。

6. 結論と課題

本稿では強意直喩表現 *white as snow/a sheet/marble* の使用傾向の比較を行った。N1 や、N2 が文化的にどう認識された上で直喩に現れるのかが十分に分析されていないことを踏まえ、N1 の使用範囲と文脈を用例から観察した。*white as snow* の文脈の広さは、*white as snow* が white を含む強意直喩表現のフォーミュラであることが要因として考えられる。*white as a sheet* の文脈の狭さ—顔面蒼白—は、sheet のもつ象徴と、white as DEATH の概念シミリーが影響していると言える。しかし、*white as a sheet* が現代において使用頻度が非常に高い理由は今後分析する必要がある。*white as marble* については、身体部位に使用される点に着目した。肯定的に用いられる場合は、建築物や

彫像に利用されるという大理石の用途が関連しており、否定的に用いられるのは、顔色が悪い状況に付随する人間の状態が、大理石の特徴とメタフォリカルにつながるためであると指摘した。

この 3 つの強意直喩表現は、身体部位を描写する比喩という共通点がある。そのため、互いに影響し合ったことで､使用できる身体部位の N1 が現代においてある程度定まった可能性がある。おそらく、*white as snow* が white を含む強意直喩のフォーミュラだったため、出現したタイミングでは身体部位に幅広く使用でき、その後 *white as marble* の影響を受けて顔とその周辺の語彙に限定されたという予想が立つ。しかし、*white as snow* は OE から存在しているので、その後様々な強意直喩表現によって意味や使用領域が変えられた過程もあるはずだ。また、white という形容詞の使用状況の変遷も、この問題を扱うには考慮に入れなければいけない。

最後に、本稿で使用したデータベースはジャンルを統一していないという問題がある。より良い分析をするために、改善点とし、今後につなげたい。

参考文献

Berlin, B. & P. Kay. (1969). *Basic Color Terms, their universality and evolution*. Berkley: University of California Press.

Lakoff, G. & M. Johnson. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind.* Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, G.& M. Turner. (1989). *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor.* Chicago: The University of Chicago Press.

Lindquist, H. (2009). *Corpus linguistics and the description of English*. Edinburgh: Edinburgh University Press. (渡辺秀樹・大森文子・加野まきみ・小塚良孝訳(2016). 『英語コーパスを活用した言語研究』. 東京：大修館書店.)

Moon, R. (2008). “Conventionalized as-similes in English: A problem case”. *International Journal of Corpus Linguistics*. 13(1), 3-37.

Norrick, N. (1986). “Stock similes”. *Journal of Literary Semantics,* XV(1), 39–52.

Nunberg, G., I. A. Sag, & T. Wasow. (1994). “Idioms”. *Language*, 70(3), 491-538.

Richards, I. A. (1936). *The Philosophy of Rhetoric*. Oxford: Oxford University Press.

Svartengren, T. H. (1918). *Intensifying Similes in English.* Lund: Gleerupska.

Trim, R. (2011). *Metaphor and the historical evolution of conceptual mapping*. London: Palgrave Macmillan.

Vries, de, A. (1974). *Dictionary of Symbols and Imagery*. Amsterdam and London: North-Holland Publishing Company. (山下主一郎ほか訳(1984).『イメージ・シンボル事典』. 東京：大修館書店)

Wyler, S. (1992). *Colour and Language: Colour Terms in English.* Tübingen: Gunter Narr Verlag Tübingen.

坂本真樹. (2007). 「色彩語メタファーへの認知言語学的関心に基づくアプローチの検討」. 『メタファー研究の最前線』. 東京：ひつじ書房.

須賀川誠三. (1999). 『英語色彩語の意味と比喩—歴史的研究』. 東京：成美堂.

瀬戸賢一. (1997). 『認識のレトリック』. 東京：海鳴社.

新妻明子. (2013) 「心的状態を表す英語の色彩語メタファー ： 認知意味論に基づく意味拡張のプロセス」『常葉大学短期大学部紀要』第 44 号, 47-62.

福田邦夫 . (1994). 『ヨーロッパの伝統色—色の小辞典』.東京：読売新聞社.

— . (1999). 『色の名前はどこからきたか—その意味と文化』 東京：青娥書房.

— . (2017). 『色の名前事典 507 』. 東京：主婦の友社.

吉村耕治. (1997). 「中期英語の色彩表現の曖昧性」. 『英語青年』. 142(10), 550-554.

渡辺秀樹. (2005). 「強意的頭韻直喩 "as dead as a/the dodo" の発達と異種」. 『言語文化研究』, 第 31 号, 163-186.

辞書・コーパス

『ジーニアス英和大辞典』 KONISHI Tomoshichi, MINAMIDE Kosei and Taishukan, 2001 -2011

『ランダムハウス英和大辞典 第 2 版』 Shogakukan Inc., 1973,1994, and Random House, 1987.

Oxford IDIOMS Dictionary for learners of English. Oxford University Press 2001 and 2006.
Oxford English Dictionary. Oxford University Press, 2020. (https://www.oed.com)

British National Corpus. (https://www.english-corpora.org/bnc/)
Early English Books Online. (https://www.english-corpora.org/eebo/)
Google Books. (https://www.english-corpora.org/googlebooks/)
HUM19UK, Version 1. (2019). University of Huddersfield, Utrecht University, University College Roosevelt, Middelburg. (https://www.linguisticsathuddersfield.com/hum19uk-corpus)
NII-REO 人文科学系コレクション ECCO 検索
(https://reo-nii-ac-jp.remote.library.osaka-u.ac.jp:8443/hss/ecco_searchdetail)
Gale, A Cengage Company.(2021).18 世紀英語・英国出版物集成
(https://www.gale.com/jp/c/eighteenth-century-collections-online)
サイト最終閲覧日 2021 年 12 月 31 日

The Cognitivist/Non-Cognitivist Divide in Metaphor Studies

Luke Malik
lukemalikosaka@lang.osaka-u.ac.jp

Abstract

One way to classify theories of metaphor is to apply the cognitivist/non-cognitivist distinction to them. Conceptual metaphor theory is called cognitivist (Knowles and Moon 2006). Donald Davidson's theory of metaphor is called non-cognitivist (Donald Davidson 1978). The distinction comes from philosophy. There has been a paradigm shift in the study of metaphor toward cognitivist based theories. Thus the philosophical distinction should help us in distinguishing just which theories are relevant today. The problem is that the philosophical distinction does not correctly distinguish cognitivist theories from non-cognitivist theories.

The article starts by introducing a classic way to divide theories of ethics and aesthetics between cognitivist and non-cognitivist labels. This method is applied to non-cognitivist theories of metaphor. It fails to classify these correctly. Next, a more contemporary set of criteria are introduced. These criteria are associated with Elizabeth Camp and Marga Reimer. The criteria are shown to again misclassify non-cognitivist theories of metaphor. A revision is suggested. It fails to file cognitivist theories properly. Classic and contemporary philosophical ways of dividing metaphorical theories between cognitivist or non-cognitivist labels fail.

Common Criteria for Identifying Non-Cognitivist Theories

We want to establish a way to distinguish cognitivist theories of metaphor from non-cognitivist theories of metaphor. To do this, we examine how cognitivist theories of ethics (and aesthetics) are distinguished from non-cognitivist theories of ethics (and aesthetics) and extrapolate criterion from there.

There are two ways we might want to identify a non-cognitivist theory of ethics. First, a non-cognitivist theory of ethics may be distinguished propositionally. This provides for a propositional criterion. Second, a non-cognitivist theory of ethics may be distinguished psychologically. This provides for a psychological criterion. I will introduce each criterion in turn below.

A propositional Criterion

A classic criterion that we can apply to sentences and utterances in order to determine whether they have cognitive content or not is this:

> (General Propositional Criterion) A sentence/utterance has cognitive content iff the sentence/utterance has truth conditions/propositional content, and does not have cognitive content otherwise

With this is mind, we can specify the criterion for determining whether or not a theory of ethics is cognitivist or non-cognitivist:

(Propositional Criterion for Ethics) A theory of ethics is a cognitivist theory of ethics iff it entails that ethical sentences/utterances have cognitive content, and it is non-cognitivist iff it entails that ethical sentences/utterances do not have cognitive content

We can develop a criterion for aesthetics by swapping out reference to ethics and ethical sentences/utterances and replacing them with references to aesthetics and aesthetic sentences/utterances. More importantly, we can do the same for metaphorical theories. This gives us the following:

(Propositional Criterion for Metaphorical Theories) A theory of metaphor is a cognitivist theory of metaphor iff it entails that metaphorical sentences/utterances have cognitive content, and it is non-cognitivist iff it entails that metaphorical sentences/utterances do not have cognitive content

This establishes one criterion for judging whether or not theories of metaphor are cognitivist or not.

A Psychological Criterion

A second way of distinguishing a non-cognitivist theory of ethics from a cognitivist theory is psychologically. A psychological criterion that we can apply to sentences and utterances in order to determine whether they have cognitive content or not is this:

(Psychological Criterion) A sentence/utterance is cognitively significant iff the sentence/utterance expresses cognitive attitudes (like belief), and not cognitively significant iff the sentence/utterance does not expresses cognitive attitudes (like belief)

This allows us to develop a second criterion for determining whether or not a theory of ethics is cognitivist or non-cognitivist:

(Psychological Criterion for Ethics) A theory of ethics is a cognitivist theory of ethics iff it entails that ethical sentences/utterances express cognitive attitudes (like belief), and it is non-cognitivist iff it entails that ethical sentences/utterances do not express cognitive attitudes (like belief)

We can alter the criterion for theories of aesthetics or metaphor. For metaphor, the relevant criterion is this:

(Psychological criterion for Metaphor) A theory of metaphor is a cognitivist theory of metaphor iff it entails that metaphorical sentences/utterances express cognitive attitudes (like belief), and it is non-cognitivist iff it entails that metaphorical sentences/utterances do not express cognitive attitudes (like belief)

This establishes another criterion for judging whether or not theories of metaphor are cognitivist or not.

What if we apply these criteria to theories of metaphor, will they account for the non-cognitivist/cognitivist divide as it applies to these theories? No. In order to understand why, I will introduce two classic theories of metaphor. Each of which is commonly labelled non-cognitivist.

1. The Positivist Treatment of Metaphor
2. Donald Davidson's Non-Cognitivist Theory of Metaphor

We will find that only one of those theories can be correctly classified by the criteria above.

The Positivist Treatment of Metaphor

The first treatment of metaphor that I want to introduce is the positivist treatment of metaphor. Since positivists developed the non-cognitivists treatments of ethics and aesthetics (e.g. Ayer 1936, Stevenson 1937), we would expect the criteria to sort the positivist treatment of metaphor into the correct box. This would be the non-cognitivist box. They seem to.

Positivism is a broad church, so I want to be more specific about the kind of positivism in question. The kind of positivists that I have in mind are the logical positivists or verificationists. I want now to introduce some key passages from the writings of these positivists in order to infer more about how they treated nonliteral meaning. Specifically, I rely on the writings of A J Ayer and Rudolf Carnap. Let's start with Ayer. Ayer writes:

> In the vast majority of cases the sentences which are produced by poets do have literal meaning… [T]o say that many literary works are largely composed of falsehoods is not to say that they are composed of pseudo-propositions….If the author writes nonsense, it is because he considers it most suitable for bringing about the effects for which his writing is designed (Ayer 1936, 14)

We may suppose that a subset of poetic sentences are metaphorical or used metaphorically. Following Ayer, these sentences are false or absurd. For verificationists, if a sentence is false, it is meaningful and, therefore, cognitively significant. Moreover, if a sentence is absurd (logically contradictory), it is meaningful and, therefore, cognitively significant. Examples might be:

(1) The 45th President of the US was a baby [false]
(2) I am not myself today [absurd]

Ayer is arguing that many poetical sentences *are cognitively significant*. Given our examples, this is also something that can be said of sentences that are used metaphorically.

I turn now to Rudolf Carnap. Carnap (1942) divided the study of language, following C. W. Morris (1938), into pragmatics, semantics, and syntax by abstraction. Carnap (1942) introduces us to the division like this:

> [W]e may distinguish three factors involved: the speaker, the expression, and what is referred to, which we shall call the designatum of the expression (Carnap 1942, 9).
>
> But we need not necessarily also deal with speakers and designata. Although these factors are present whenever language is used, we may abstract from one or both of them in what we intend to say about the language in question. Accordingly, we distinguish three fields of investigation of languages. If in an investigation explicit reference is made to the speaker, or, to put it in more general terms, to the user of a language, then we assign it to the field of pragmatics. (Whether in this case reference to designata is made or not makes no difference for this classification.) If we abstract from the user of the language

> and analyze only the expressions and their designata, we are in the field of semantics. And if, finally, we abstract from the designata also and analyze only the relations between the expressions, we are in (logical) syntax. The whole science of language, consisting of the three parts mentioned, is called semiotic (Carnap 1942, 9).

Expressions can be abstracted from their users or uses. Alternatively, expressions can be referred to their users or uses. A *sentence* is associated with a type of expression abstracted from its use and user, the *utterance* of the sentence is associated with its use or user. This division is important to what follows.

We saw above that many *sentences* that are used metaphorically are cognitively significant. However, when we consider Carnap's writings, we find reason to believe that their *utterances* cannot be said to be cognitively significant, for no utterances that are made metaphorically are cognitively significant.

Here are two passages that support this claim:

> The aim of a lyrical poem in which occur the words "sunshine" and "clouds" is not to inform us of certain meteorological facts, but to express feelings of the poet and to excite similar feelings in us. A lyrical poem has no assertive sense, nor theoretical sense, it does not contain knowledge (Carnap 1935, 29)

> Metaphysical propositions—like lyrical verses—have only an expressive function, but no representative function. Metaphysical propositions are neither true nor false, because they assert nothing, they contain neither knowledge nor error, they lie completely outside the field of knowledge, of theory, outside the discussion of truth or falsehood. But they are, like laughing, lyrics, and music, expressive. They express not so much temporary feelings as permanent emotional or volitional dispositions (Carnap 1935, 29)

Consider the following sentence:

(3) <u>A ray of sunshine</u>$_{M}$ came through the curtains

Tracking Ayer, since the sentence has truth conditions *the sentence is cognitively significant*. But consider the sentence to be spoken metaphorically. Tracking Carnap, *the utterance is not cognitively insignificant*. This is because the metaphorical part (underlined and subscripted "M") is not being used to talk about a meteorological fact.

With all this in mind, we are now in a position to apply the criteria for judging cognitivist and non-cognitivist theories of metaphor to a positivist (or verificationist) treatment of metaphor. To start, we apply the propositional criterion to the theory above. Doing so tells us that the positivist treatment of metaphor is a non-cognitivist treatment of metaphor because all metaphorical utterances are cognitively insignificant. The second criterion to be applied is the psychological criterion. By the psychological criterion, the positivist treatment of metaphor is non-cognitivist because metaphorical utterances lack cognitive content and, therefore, cannot be said to express the kind of content that is the content of a cognitive attitude. So far, so good. Let's turn to another theory commonly associated with the non-cognitivist label.

Donald Davidson's Theory of Metaphor

I apply the criteria above to another theory that is understood to be non-cognitivist, Donald Davidson's theory of metaphor. To understand the theory, a set of key themes are introduced (by subheadings). Following that, the criteria are applied.

The Theory is a Non-Cognitivist Theory of Metaphor

According to Davidson, his theory is a non-cognitivist theory of metaphor. Davidson says, "What I deny is that metaphor does its work by having a special meaning, a specific cognitive content" (Davidson 1978, 46). *According to others,* Davidson's theory is a non-cognitivist theory of metaphor. For example, for Reimer and Camp (2006) it is archetypal non-cognitivist theory if metaphor since it is the only one they mention. So we may safely assume that Davidson's theory is a non-cognitivist theory of metaphor.

Metaphorical Utterances Made with Sentences Have Invariant Literal Meanings

In Davidson's theory, metaphors do not say anything over and above what they literally say. Words have meanings and sentences have meanings, which are their truth conditions. Words can be assigned meanings, sentences can be assigned truth conditions. These meanings and truth conditions do not shift from context to context. These meanings and truth conditions are independent of use or user. These meanings and truth conditions are, therefore, invariant to context. This is true even if we are talking about a metaphorical utterance. Davidson says: "[A] metaphor doesn't say anything beyond its literal meaning (nor does its maker say anything, in using the metaphor, beyond the literal)" (Davidson 1978, 32).

Literal Meaning Is Required for Metaphorical Effect

Metaphor produces metaphorical effect. Metaphorical effects are cognitive effects. These include attending to likenesses, making comparisons, drawing analogies and parallels, visualizing, picturing, imagining, creating ways to think, organizing, thinking and feeling, holding true, believing, etc. When we think we are paraphrasing a metaphor, we are really only elucidating the cognitive effects which we associate with the metaphor (Davidson 1978, 46). Paraphrase is relevant to what is said, not to what the point of a metaphor is (Davidson 1978, 32).

Metaphorical effects are essential to metaphorical uses. Indeed, metaphorical effect is a necessary condition of metaphorical use. If the use of a sentence does not produce a metaphorical effect, it is simply not being used metaphorically (e.g. Davidson 1978, 42). If the use of an expression once produced a metaphorical effect but no longer does, it was once but is no longer metaphorical. In such a case, we have dead metaphors or idiomatic uses (Davidson 1978, 37-38). Metaphorical uses, therefore, necessitate cognitive effects.

Literal meaning is necessary to the metaphorical effects that metaphors produce. Davidson criticizes several alternative theories. His critiques often include reference to the necessity of literal meaning to the working of metaphor. Here is a passage in which Davidson is criticizing the literal simile theory of meaning:

> [I]f we make the literal meaning of the metaphor to be the literal meaning of a matching simile, we deny access to what we originally took to be the literal meaning of the metaphor, and we agreed almost from the start that this meaning was essential to the working of the metaphor (Davidson 1978, 39)

Further passages celebrating the importance of literal sentence meaning to the working of metaphor are dotted throughout Davidson's paper. Davidson puts things most succinctly in the following sentence: "Metaphor makes us see one thing as another by making some literal statement that inspires or prompts the insight" (Davidson 1978, 47).

We may conclude: if literal utterance meaning is essential to metaphorical effect, then literal sentence meaning is essential to metaphorical effect. Furthermore, if literal sentence meaning is essential to metaphorical effect, then literal propositional content is essential to metaphorical effect. It follows that propositional content is essential to metaphorical use.

A General Assumption about Language

The next thing I want to do is to introduce a general assumption that Davidson makes about language. Consider the following introduction to his paper "Thought and Talk":

> The dependence of speaking on thinking is evident, for to speak is to express thoughts…Someone who utters the sentence 'The candle is out' as a sentence of English must intend to utter words that are true if and only if an indicated candle is out at the time of utterance, and he must believe that by making the sounds he does he is uttering words that are true only under those circumstances. These intentions and beliefs are not apt to be dwelt on by the fluent speaker. But though they may not normally command attention, their absence would be enough to show he was not speaking English, and the absence of any analogous thoughts would show he was not speaking at all (Davidson 2001, 155).

The beginning of the passage is clear, speaking is dependent on thought. The latter half of the passage is clear, the kind of thought that speaking is dependent on is belief (along with intentions based on such beliefs). The beliefs take two forms. Suppose *S* is a sentence and *S* has the literal truth conditions *p*. Then, the beliefs are these:

1. The belief that *S* is true iff *p*
2. The belief that by making such and such sounds under so and so conditions something true is uttered

How does this apply to metaphor? Straightforwardly. The following suppositions hold for the metaphorical context. Suppose *S* is a sentence* that has the literal truth conditions *p**. Suppose an utterer, *u*, utters *S**. Then *u* has thoughts about *S** and has beliefs about (as well as intentions related to) *S**. What beliefs? These:

1. The belief that *S** is true iff *p**
2. The belief that by making such and such sounds under so and so conditions something patently false or patently true is uttered

I draw these conclusions based on the following passages. First:

> The argument so far has led to the conclusion that as much of metaphor as can be explained in terms of meaning may, and indeed must, be explained by appeal to the literal meanings of words. A consequence

> is that the sentences in which metaphors occur are true or false in a normal, literal way (Davidson 1978, 41).

This passage indicates we must treat the sentences that are used to make metaphorical utterances in the normal literal way with respect to truth and falsehood. Following Davidson, we have said, *u* has thoughts and beliefs about *S*. Following Davidson, we have seen one set is about the literal truth about *S*. Following Davidson, we have said that is *S* is true iff *p*. Treating *S** and *p** in the normal literal way with respect to truth and falsehood (where *S** is the sentence used in the metaphorical context and *p** is its literal truth conditions), we get the same result: *u* beliefs that *S* is true* iff *p**.

The second ascription of belief with respect to patent falsity and truth is justified by passages like the following:

> Generally it is only when a sentence is taken to be false that we accept it as a metaphor and start to hunt out the hidden implication. It is probably for this reason that most metaphorical sentences are patently false, just as all similes are trivially true. Absurdity or contradiction in a metaphorical sentence guarantees we won't believe it and invites us, under proper circumstances, to take the sentence metaphorically (Davidson 1978, 42)

Similarly:

> Patent falsity is the usual case with metaphor, but on occasion patent truth will do as well. "Business is business" is too obvious in its literal meaning to be taken as having been uttered to convey information, so we look for another use; Ted Cohen reminds us, in the same connection, that no man is an island. The point is the same. The ordinary meaning in the context of use is odd enough to prompt us to disregard the question of literal truth (Davidson 1968, 42)

With Davidson, I am assuming that an individual who uses a sentence metaphorically understands what her words mean and do. I have said, therefore, she believes her sentence is true under such and such circumstances. Given the passages cited, in the usual cases she believes that her sentence is false. In some special cases, she believes that her sentence is true but conveys no information.

One more conclusion can be drawn from the passages cited. Whatever can be said about the speaker can be said about the hearer. The audience for the metaphorical utterance must also hold certain beliefs. These beliefs track the speaker's beliefs. This is to say, the audience for the metaphorical sentence holds:

1. The belief that *S** is true iff *p**
2. The belief that by making such and such sounds something patently false or patently true is uttered

To understand the point of a metaphor, literal meaning is required. This suggests the first belief is held. In the passages cited above, Davidson tells us metaphorical sentences are so obviously false, they *guarantee* the audience won't believe them. Or they are so true that they *appear* odd enough for us to reject their truth, which presupposes the sentences in question are believed to be patently false or obviously true. That triggers the cognitive processes by which the metaphorical effects are generated.

It is clear from our discussion, then, that sentences that are uttered metaphorically are accompanied by beliefs that are central to their use and understanding. We are now in a position to apply the criteria above to Davidson's "non-cognitivist" theory of metaphor. Is Davidson's theory of metaphor a non-cognitivist theory of metaphor? It doesn't seem to be if we apply the criteria introduced above. Let me explain.

First, let us apply the propositional criterion to Davidson's theory. If a theory of metaphor entails that a metaphorical sentence/utterance has cognitive content, then the theory is a cognitivist theory of metaphor. By this criterion, Davidson's theory is a cognitivist theory of metaphor. Metaphorical utterances entail literal sentence meanings. Literal sentence meaning entails propositional content and, therefore, cognitive content. In conclusion, metaphorical utterances entail cognitive content. This establishes that Davidson's theory is a cognitivist theory of metaphor by the propositional criterion.

Next, let us apply the psychology criterion to Davidson's theory. If a theory of metaphor entails that metaphorical sentences/utterances express cognitive attitudes, then the theory of metaphor is a cognitivist theory of metaphor. By this criterion, Davidson's theory is a cognitivist theory of metaphor. *Speaking* entails beliefs. Making a metaphorical utterance is speaking. So making a metaphorical utterance entails having beliefs. The set of beliefs include a belief about what makes the sentence true and a belief about whether or not it is true. Beliefs are cognitive attitudes. Speakers who use metaphorical sentences, therefore, hold such attitudes. They must also express such beliefs because, to quote Davidson, "their absence would be enough to show [someone] was not speaking English, and the absence of any analogous thoughts would show [they were] not speaking at all." By the criterion in question, Davidson's theory is a cognitivist theory of metaphor.

But, furthermore, what can be said of a speaker can be said of her audience. The audiences that understand metaphorical sentences and understand that they are used metaphorically must hold similar beliefs. They must believe that:

(a) The sentences uttered are true under such and such circumstances, false otherwise,
(b) The sentences uttered are patently true or false in the circumstances under conditions.
(c) The speaker believes (a) and (b)

They would not understand the speaker to be speaking metaphorically if they believed that the speaker did not believe (b). This is implied by Davidson's theory because *understanding* that the speaker is saying something that is patently false or true is what *invites* us to take the utterance metaphorically. Again, the conclusion follows, by the criterion in question, Davidson's theory is a cognitivist theory of metaphor.

By both criteria, then, Davidson's theory is a cognitivist theory of metaphor. But this is absurd since Davidson and his interpreters interpret his theory as non-cognitivist. I conclude the criteria above wrongly classify theories of metaphor and must be abandoned. We must, therefore, seek different criteria and this is what I will try to do next.

The Reimer-Camp Definition

The classical way to divide theories between cognitivism/non-cognitivism doesn't work for metaphor. We must look for an alternative. Reimer and Camp (2006), hereafter Reimer-Camp, provide more contemporary criteria

for classifying a treatment of metaphor as non-cognitivist. Presumably, theories that do not fall under that label will be cognitivist. I turn to their writing next. They write:

> The central claim of [non-cognitivist] theorists is that a sentence used metaphorically has no distinctive cognitive content aside from its literal content Non-cognitivists thus resemble Griceans in denying that the words uttered themselves have any special meaning. They depart from Griceans, though, in also denying that there is any determinate propositional thought which the speaker intends to communicate by means of those words. (Reimer-Camp 2006, 857).

Non-cognitivists are, therefore, taken to believe that:

(A) When a sentence is used metaphorically, it has no cognitive content apart from its literal content (if it has that)

(B) When a sentence is used metaphorically, there is no determinate propositional thought that the sentence communicates (or could attempt to communicate)

I make one assumption. The criteria above provide two conditions that are necessary and sufficient in distinguishing a non-cognitivist theory of metaphor from a cognitivist theory of metaphor.

We have already seen that similar criteria fail to correctly classify non-cognitivist theories correctly. I will only briefly, therefore, go through the reasons why these criteria fail to classify non-cognitivist theories correctly.

The positivist treatment of metaphor entails (A) since it implies that sentences that are used metaphorically have no other cognitive content than their literal content if they have that. It may also be supposed to imply that there is no propositional thought that a speaker communicates in using the sentence since the metaphorical *utterances* of any sentence, even literal true or false ones, are empty with respect to cognitive content. Thus the criteria above do seem to work when classifying the positivist treatment of metaphor. But we will see that they break down when applied to Davidson's theory.

Let us see how the criteria apply to Davidson's theory of metaphor. We can agree that David's treatment of metaphor requires that a sentence that is used metaphorically has no other meaning than its literal meaning. This is because literal meaning is invariant and this is true, therefore, even in the metaphorical context. But Davidson's theory requires that a sentence, *whatever it is used to do*, conveys belief. It is a condition *necessary to language* that a speaker communicates intentions and beliefs by using the words that she uses. Speaking requires the transmission of beliefs about the conditions in which the uttered sentence is true and beliefs about whether the conditions in which the uttered sentence is true make the uttered sentence true. For, *as Davidson says*, "their absence would be enough to show [someone] was not speaking English, and the absence of any analogous thoughts would show [they were] not speaking at all" (Davidson 2001, 155). Furthermore, *understanding* that the speaker is saying something that is patently false or vacuous on purpose *invites* us to think about what was uttered metaphorically. Understanding purpose requires understanding the speaker's belief about the sentence uttered in the metaphorical context, part of which is transmitted by the patent nature of the sentence uttered.

For these reasons we can conclude that cognitive attitudes are expressed or conveyed by the metaphorical utterance of a sentence. Thus, by Reimer-Camp, Davidson's theory is not a non-cognitivist theory of metaphor.

The implication is that it is a cognitivist theory of metaphor. This is truly absurd since the *only* non-cognitivist theory of metaphor that Reimer-Camp mentions is Davidson's! I conclude that the Reimer-Camp definition of non-cognitivism does not provide adequate criterion for distinguishing non-cognitivist theories of metaphor.

But, perhaps, we can think of ways to help Reimer-Camp. The problem with the criteria seems to centre upon (B). We might try to fix it in the following manner:

(C) When a sentence is used metaphorically, there is no determinate thought with *nonliteral* propositional content that the sentence communicates

This does seem to work in distinguishing non-cognitivist from cognitivist theories of metaphor correctly. None of the theories in question allow for metaphorical sentences or utterances to communicate determinate thoughts that have nonliteral propositional content. It is always literal propositional content that is communicated (if that). So we seem to have fixed the Reimer-Camp criteria. But, actually, we haven't. This can be made clear by considering a last theory of metaphor.

Francois Recanati's Theory of Metaphor

I have just considered the Reimer-Camp criteria for distinguishing between cognitivist and non-cognitivists theories of metaphor. It doesn't work. The criteria were adjusted. They seem to classify non-cognitivist theories correctly. However, as we shall, they also classify cognitivist theories under the non-cognitivist heading. That is sufficient reason to reject the rewritten criteria. To show this, I introduce a treatment of metaphor that I associate with Francois Recanati.

To understand Recanati's treatment of metaphor properly, we need to understand a bit more about Recanati's approach to literal meaning. Talking about literal vs nonliteral meaning, Recanati draws a distinction between three kinds of *literal* meaning:

1. T-literal meaning (type-literal meaning)
2. M-literal meaning (minimal-literal meaning)
3. P-literal meaning (primary-literal meaning)

T-literal meaning is the meaning that is associated with expression type meanings (the specific kind of meaning associated with a specific expression). T stands for "type." Type expression meaning is determined conventionally. M-literal meaning is the meaning that one gets when a dependent pragmatic process (which Recanati calls "saturation") is used to determine the meaning of an expression type. M stands for "minimal." A dependent pragmatic process is a pragmatic process that is governed by a semantic rule. The typical example of an expression that this applies to is an indexical. For example, "I." Such an indexical has an expression type meaning. This expression type meaning is a rule that connects the utterer of the indexical with the referent of the indexical. The M-literal meaning is the meaning that is determined when the referent is fixed. So, for example, consider:

(4) Humans are mortal
(5) We are mortal

In the first sentence, each expression has a straightforward expression type meaning, a t-literal meaning. In the second sentence, "we" has an expression type meaning, which is a rule for identifying its referent from the context of use. That is its t-literal meaning. Determining that value will determine its referent(s). That provides its m-literal meaning. T-literal meaning is not always complete in the sense it determines a set of truth conditions. Minimal meaning is complete and determines a set of truth conditions. But the M-literal meaning of an utterance often fails to match the *actual* truth conditions of an utterance. P-literal meaning succeeds in that respect.

P-literal meaning is the meaning that one gets when an independent pragmatic process is used to determine the meaning of an expression type. An independent pragmatic process is one of three processes that determines the meaning of an expression type by appealing to the context because the *context requires this* rather than because an expression type meaning mandates it. Such processes are contingent. There are three types of process:

1. Free enrichment
2. Loosening
3. Semantic transfer

Examples are:

(6) We've had breakfast
(7) He swallowed my lie
(8) The reds won

With free enrichment we enrich, or add information, to determine the truth conditions of an utterance. (6) has an m-literal meaning. But no one ever contemplates it. Rather, it is usually taken to mean:

(9) We had breakfast this morning

rather than its m-literal meaning:

(10) We've had breakfast sometime in our lives

(9) is the p-literal meaning determined by free enrichment. It provides *actual* truth conditions.

With loosening, we broaden the meaning of a term. So, for example, each expression of (7) has an expression type meaning, they combine to produce nonsense or a sentence that is invariably untrue. Again, hardly any competent speaker will associate (7) with its m-literal meaning. Rather, it is taken to mean:

(11) He believed the lie that the utterer of the sentence told

That is its p-literal meaning, determined by loosening the meaning of "swallow" to allow lies to be swallowed. Alternatively, we might say that the meaning of "swallow" has been modulated, where this is to activate some qualities associated with swallowing and deactivate others. For example, a property associated with *reception* is active in the meaning, but the property of *passing through the throat* is not.

Last, we have a metonymic use of the expression “the reds,” referring to a football team (e.g. Liverpool FC) based on the colour of the shirts the team wears. The expressions “the” and “red” have t-literal meanings and can combine to form a further complex meaning. An m-literal meaning. What is important here is the p-literal meaning. The p-literal meaning is the meaning that the expression “the reds” gets when it is used to refer to the football team in question.

Corresponding to these three types of literal meaning are three types of non-literal meaning:

1. T-nonliteral meaning
2. M-nonliteral meaning
3. P-nonliteral meaning

T-nonliteral meaning is the meaning that extends beyond t-literal meaning i.e. meanings that are determined contextually either by mandated dependent pragmatic processes or optional and contingent pragmatic processes. So, for example, a t-nonliteral meaning is m-literal meaning, p-literal meaning, or secondary meaning (yet to be introduced). M-nonliteral meaning is p-literal meaning or secondary meaning (Recanati 2004). P-nonliteral meaning is secondary meaning. But what’s that?

An example of secondary meaning is implicature. For example, consider the following set of utterances:

(12)How was the dinner?
(13)It was interesting

On the assumption that “dinner” refers to the food eaten at dinner, the answer implies:

(14)The food eaten at dinner was awful

This is an implicature. On hearing (13), an interpreter will note the answer to the question is not directly relevant. The interpreter will, thereby, understand that the speaker wants to communicate something other than any literal meaning that can be associated with (13). The interpreter will, thereof, work out that the interpreter meant (14) by saying (13). In Gricean terms, (13) will be the assumption needed to preserve the conversational principle. This kind of process is, for Recanti, always a conscious or consciously retrievable *inferential* process and this goes some way to defining secondary meaning and contrasting it to p-literal meaning. With p-literal meaning the processes that determine meaning are subpersonal, they are not conscious, even though the meanings they determine are available to the interpreter. They are also *not* inferential. This brings us to metaphor.

Consider a sentence much favoured by Recanati:

(15)The ATM swallowed the card

The p-literal truth conditions for (15) are familiar to us. The m-literal truth conditions are less so—and, in fact, given your stance on category mistakes, there may be none. The pragmatic processes that determine the p-literal truth conditions for (15) are free enrichment on each “the” and loosening on “swallow.” These pragmatic processes determine the truth conditions for (15) silently, so to speak; they are non-inferential, subpersonal, and

automatic. Though, of course, the truth conditions are consciously available. *All of this is cognitive*. (What else could it be?) Thus this is a *cognitive* treatment of *literal* meaning.

Now consider the following sentence:

(16)The surgeon is a butcher

A similar story could be told here. "Butcher" is modulated in a way that allows the particular surgeon in question to fall under it. The process is silent, subpersonal, automatic, and cognitive. Also, the meaning is available.

The sentences above might be considered metaphorical. But even if they are, they are still instances of literal meaning. As Recanati says, "The paradigm case of nonliteral meaning is metaphor. Now metaphor, in its central varieties, I count as *p*-literal" (Recanati 2004, 76).

But let us consider this sentence:

(17)Fishermen are spiders

That's commonly considered to be an inapt metaphor (Glucksberg 2008). Inapt means it doesn't strike us as a very good metaphor (Glucksberg 2008). Following Recanati, the utterance of a sentence like this will lead to a certain tension. This tension is marked by a conflict between the t-literal meanings and the p-literal meanings and a worry about how the former are related to the latter. *In such a case, the utterance appears to us as metaphorical*. That is, when *the p-literal meaning* of an utterance comes into conflict with the t-literal meaning of an utterance, we deem there is something *special* about the utterance. This *specialness* is associated with *perceived metaphoricity*. A certain phenomenological experience of an utterance is what leads us to classify a p-literal utterance as metaphorical. Key passages supporting this interpretation are these:

> [F]or something to count as nonliteral in the ordinary sense it must not only go beyond the conventional significance of the uttered words (*m*-non-literalness), but it must be felt as such (Recanati 2004, 75).

That felt nature, as we have said, is typically the felt conflict between the t-literal meaning and it's p-literal. Thus, Recanati writes:

> The more noticeable the conflict, the more transparent the departure from *t*-literal meaning will be to the language users. Beyond a certain threshold, cases of sense extension will therefore count as special and non-literal in the ordinary sense despite their *p*-literal character (Recanati 2004, 77).

Let me summarise. The sentence (17) has a t-literal meaning. The t-literal meaning either (a) fails to express a complete proposition, or (b) if it does, it expresses a literal proposition. If so, the proposition it expresses is conventionally determined. An utterance of (17) has an m-literal meaning. It expresses a literal proposition. It is semantically determined and does not involve independent pragmatic processes. It does not express a metaphorical proposition. But also the utterance of (17) has a p-literal meaning. The utterance expresses a proposition that is *literal*. Independent pragmatic processes produce not only a complete proposition but a proposition that reflects the truth conditions of an actual situation. This is a non-inferential subpersonal, automatic process and *it is a cognitive process*. Again, *the utterance does not express a metaphorical proposition*.

The sentence meaning, the t-literal meaning, and the complete and correct utterance meaning, the p-literal meaning, may give rise to a *felt conflict* between the t-literal meaning and the p-literal meaning. If so, the utterance is felt to be *special* and thereof said to be *metaphorical*. *It does not follow that the p-literal proposition is a metaphorical proposition*. (The same analysis can be given for (15) and (16) beyond the aforementioned threshold.) If this is true, the metaphorical utterance can be said to express a *literal proposition* (a p-literal proposition) *which*, we know, *is cognitively determined*. The metaphorical utterance does not express a metaphorical proposition. Therefore, the theory gives us a *cognitively determined proposition* for every metaphorical utterance. But it does not entail a *metaphorical proposition* for any metaphorical utterance. We are now in a position to apply the revised Reimer-Camp criteria to Recanati's treatment of metaphor.

The first part of the criteria says that when a sentence is used metaphorically, it has no cognitive content apart from its literal content (if it has that). This can be said to be true on Recanati's theory. When (17) is uttered, it has no cognitive content apart from its literal content, that is, it's p-literal content. The second part of the criterion says that when a sentence is used metaphorically, there is no determinate thought with *nonliteral* propositional content that the sentence communicates. This can be said to be true on Recanati's theory. When (17) is uttered, the determinate thought that is communicated is the one characterised by the p-literal meaning of (17) and that is all it can be since metaphoricity is phenomenological, not propositional. The criteria in question, therefore, renders Recanati's theory non-cognitivist. But this is surely absurd, since the meaning of a metaphorical utterance (as with any) is determined *cognitively.* The reworked version of the Reimer-Camp criteria is a dud.

Conclusion

There has been a paradigm shift in the way metaphor is studied. The paradigm shift focuses on cognitivist content and, therefore, makes cognitivist theories of metaphor more relevant. Traditionally, philosophical criteria have been used to distinguish non-cognitivist theories from cognitivist theories of metaphor. We have considered a classic version of the criteria and a contemporary version of the criteria. Both fail to classify non-cognitivist theories of metaphor correctly. These criteria must be abandoned. If the division of the theories into non-cognitivist and cognitivist is still relevant, a new criterion has to be found. Philosophical criteria don't seem to work. Perhaps, more scientific criteria will.

Bibliography

Ayer, A. J. 1936. *Language, Truth, and Logic*. Gollancz.

Carnap, R. 1935. *Philosophy and Logical Syntax.* Keagan Paul, Trench, Trubner & Co. Ltd.

Carnap, R. 1942. *Introduction to Semantics and the Formalisation of Logic*. Harvard University Press.

Davidson, D. 1978. "What Metaphors Mean." *Critical Inquiry*, Vol 5. No. 1: 31-47.

Davidson, D. 2008. *Inquiries into Truth and Interpretations*. Clarendon Press.

Glucksberg, M. 2008. "How Metaphors Create Categories — Quickly." In *The Cambridge Handbook of Metaphor and Thought*, ed. Raymond W. Gibbs. Cambridge. Pp. 67-84.

Knowles, M. and Moon, R. 2006. *Introducing Metaphor*. Routledge.

Morris, C. W. 1938. *Foundations of the Theory of Signs*. In *International Encyclopedia of Unified Science*, eds. O. Neurath, R. Carnap, &, C. W. Morris. University of Chicago Press. Pp. 77-138.

Recanati, F. 2004. *Literal Meaning*. Cambridge University Press.

Reimer, M. and Camp, E. 2006. *Metaphor*. In *The Oxford Handbook to the Philosophy of Language*, eds. E. Lepore and B. Smith. Oxford University Press.

Stevenson, C. L. 1937. "The Emotive Theory of Ethical Terms." *Mind*, Vol. 46. No. 181: 14-31.

George. H. W. Bush's Metaphors in Speeches Delivered in 1989
How Freedom Is Metaphorized in *Speaking of Freedom*

Yuuki Tomoshige

1 Introduction

This paper seeks to grasp the contours of freedom, a slippery yet commonly used concept in political discourse. The term took a life of its own in the political landscape as a rhetorical strategy amid socioeconomic turmoil. Even though the concept has been studied by numerous political scientists, the relationship between this double-edged sword and its meaning in political speeches has not been thoroughly examined. Lim (2002) convincingly argues:

(1) Political scientists who have been concerned with explicating the *theory* of the rhetorical presidency have been consciously more interested in the act of rhetoric—the quantity, timing, and location of speeches—rather than its *substance* (Lim, 2002: 330).

It is this *substance* that I would like to focus on in this study. Lim (2002: 346) also laid out five hallmarks of contemporary presidential rhetoric, as follows: anti-intellectual, abstract, assertive, democratic, and conversational. He contends that institutional transformation paves the way for rhetorical styles between pre- and post-twentieth-century presidents. It is thus natural to assume that the meaning of freedom has been dynamic, and its implications can change depending on the social situation. This dynamicity is key to scrutinizing freedom in political speeches to uncover how each president conveys their ideology, value, and attitude.

For this study, I extracted crucial speeches delivered in 1989 by George H.W. Bush from *Speaking of Freedom*, since it was on January 20, 1989, that President Bush was sworn in and delivered the inaugural address. This address is historically significant, and a form of speech mirrors American presidents and shows symbolic function (Campbell and Jamieson [1990] demonstrate the five trends[1] of the speeches). It is reasonable to examine this inaugural address as the point of departure for the analysis based on these idiosyncrasies, and this study focuses on his metaphorical conceptualization of freedom. Not only did Bush effectively use the conventional metaphor, but he also exhibited his exclusive metaphor. Thus, the study asks the following research question (RQ):

✓ How is the concept of freedom metaphorized in Bush's speeches from 1989 found in *Speaking of Freedom*?

In line with the RQ, Section 2 provides an overview of the general meaning of freedom by referencing the *Oxford English Dictionary* (*OED*). Section 3 deals with the method employed for the investigation; the analysis of the inaugural address is discussed in Section 4. Section 5 outlines high-priority source domains in the speeches, and the final section concludes the paper.

2 Dictionary Meaning and Freedom

No idea is more fundamental to Americans than freedom, which encompasses darkness, light, and many other complex layers. This antithetical yet central notion exposes the contradiction between what America claims to be and what it actually is. Foner (1998) steadfastly unfolds its classification, although freedom is a contested concept with multiple dimensions. The first pivotal aspect is "political freedom, or the right to participate in public affairs." Foner (1998) claims that the narrative starts with the American Revolution, when the apprehension of freedom was centered on a community's right to join public affairs. The second is

---

[1] 1) Unifies the audience by reconstituting its members as the people who can witness and ratify the ceremony; 2) rehearses communal values drawn from the past; 3) sets forth the political principles that will govern the new administration; 4) demonstrates through enactment that the president appreciates the requirements and limitations of executive functions; 5) each of these ends must be achieved through means appropriate to epideictic address, that is, while urging contemplation not action, focusing on the present while incorporating past and future, and praising the institution of the presidency and the values and form of the government of which it is a part, a process through which the covenant between the president and the people is renewed (Campbell and Jamieson, 1990: 15).

a Christian understanding of the idea that freedom means acting according to an ethical standard, which generates another recurring dimension: personal freedom. The third, and final, aspect of freedom is economic freedom: how economic relations constitute freedom for individuals in their work lives. From an economic perspective, as Ventura (2016: 2) points out, the idea goes hand-in-hand with neoliberalism – a set of economic and political policies and ideologies focusing on corporatism and privatization of public enterprises to reduce state power. In this way, sitting so profoundly in the cornerstone of American values, it is nearly impossible to address all aspects of freedom. Therefore, this study simply attends to the metaphorization of this misleading term. Although it has multiple connotations in politics, philosophy, and elsewhere, a dictionary allows us to observe its fundamental linguistic meaning. Table 1 shows the definitions mentioned in the *OED*.

Table 1
The Definition of Freedom in the OED

I. The state or condition of being free.
1. a. Theology. Freedom from the bondage or dominating influence of sin, spiritual servitude, worldly ties, etc.
b. Freedom or release from slavery, bondage, or imprisonment.
Freedom from arbitrary, despotic, or autocratic control; independence, esp. from a foreign power, monarchy, or dictatorship.
2
a. The condition of being able to act or function without hindrance or restraint; faculty or power to do as one likes.
b. Philosophy and Theology. The fact of not being controlled by or subject to fate; freedom of will. Frequently opposed to necessity.
c. Chiefly in plural. Each of those social and political freedoms which are considered to be the entitlement of all members of a community; a civil liberty.
3
a. Freedom to do a specified thing; permission, leave. Frequently with to or (now rare) of
b. Unrestricted use of or access to a specified thing; free run of a place
c. *Nautical*. Leave of absence; shore leave. Frequently in ***on liberty***.
4. With capital initial. Liberty personified, esp. as a woman.
5. **a.** Speech or action going beyond the bounds of propriety or custom; presumptuous behaviour; licence. Now *rare*.
b. An instance of this; a presumptuous remark or action.

The very basic idea of freedom is "the state or condition of being free" in which one can "act or function without hindrance or restraint." This rudimentary meaning can be tied to physical freedom, which is heralded as the concept's schematic meaning. Lakoff (2006) posits that freedom is "a marvel of metaphorical thought," thereby suggesting that freedom is comprehended through bodily experience. He also notes three fundamental ways of functioning with one's body, which is the basis of a conventional metaphor FREEDOM OF ACTION IS THE LACK OF IMPEDIMENTS TO MOVEMENT (Lakoff, 1999).

- reaching a desired destination (by moving through space)
- getting some desired object (by moving one's limbs)
- performing a desire action (by moving one's body)

Furthermore, this body-based understanding extends to the social dimension, in which politicians use the term ambiguously. Freedom frequently emerges in political speeches, and the audience may be puzzled by ambiguity, a vacuum in the definition of freedom. Indeed, Engel (2010: 29) points out that "Bush easily fell back on tropes that sounded routine to contemporary ears, employing broad and easily accepted terms such as "democracy," "freedom," and "stability." Nevertheless, the question arises as to how President Bush utilized metaphors to make the abstract idea of freedom into more concrete representations familiar to the American people to promote the concept.

3 Method

Bush used numerous metaphors in his inaugural address, ranging from conventional to symbolic. The use of metaphors is connected to the promotion of a particular ideology, and the purpose of metaphor is to persuade[2] the audience, instill a particular belief or agenda, and formulate future policies pertaining to morality and immorality. Lakoff (2002) proposes two moral principles that show the dichotomy—strict father morality and nurturant parent morality—between the opinions of the Democratic Party and the GOP in terms of deep-seated social issues. In short, as Lakoff suggests, the viewpoints of conservatives and liberals lie behind these two distinct models. Since President Bush was a Republican president, it seems that the strict father model prevails over its counterpart for freedom. However, the story is neither this simple nor straightforward, as the two models merely articulate a general difference, which cannot fully explain President Bush's idea of freedom vis-à-vis metaphors.

In this respect, Charteris-Black (2014: 201) provides critical insights regarding the purpose of metaphor, proposing seven potential purposes: gaining attention and establishing trust, heuristic, predictive, empathetic, aesthetic, ideological, and mythic. He succinctly illustrates the crucial aspects of using metaphors, all of which can be clues to comprehend Bush's rhetoric. A traditional approach to metaphor explanation relies solely on an aesthetic view, but Lakoff and Johnson (1980) subverted the previously taken-for-granted theory and developed an alternative theory: conceptual metaphor theory (CMT). Fundamentally, CMT sees metaphors as less of a linguistic decoration and more of a systematic cognitive function. In the Lakoffian approach, if we have an abstract concept A (target), it is common to use an "A is B" format to comprehend concept A in terms of B (source). They proposed that this relationship is a conceptual mapping of A and B. In this study, I would like to use the terms "target" and "source" to indicate the interrelation of metaphorical mapping.

Approximately four decades have passed since its inception, and cognitive linguists and discourse analysts have applied the theory to analyze political discourse (van Dijk, 1997; Hart, 2008; Musolff, 2016). In particular, Charteris-Black elaborated on the critical metaphor analysis (CMA) to scrutinize the underlying ideology or effects of metaphorical language. Many cognitive linguists have employed recent metaphorical identification procedures in analyzing political discourse (e.g., Pragglejaz group, 2007; Reijnierse et al., 2018); In this paper, however, I adopted Charteris-Black's CMA to spot patterns of metaphors by President Bush.

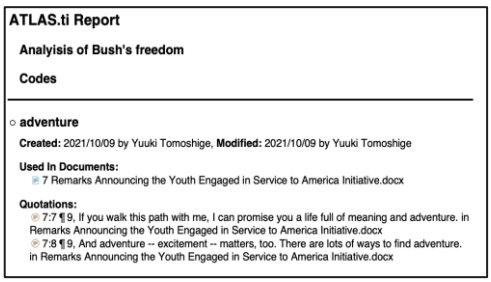
CMA has several essential steps toward finding how vocabulary choice affects the audience by providing a fair representation of speakers/writers. The first stage is to develop research questions on the metaphor potential for rhetorical impact in context: a contextual analysis. The second stage is to identify metaphors, deciding "what to count as a metaphor" (Charteris-Black, 2014: 174) in discourse. The third stage is to decide "how metaphors are to be classified, organized, and arranged" (ibid.: 175). The subsequent stage is to return to the vast social and political context to consider whether metaphors have a rapport with social conditions. All stages are of great importance in analyzing presidential speeches. For more detailed qualitative and quantitative analyses, ATLAS.ti and AntConc software were used in this study. Eleven speeches,[3] including the inaugural address, were analyzed. To investigate the kinds of metaphors used in the speeches, I employed a code function by which original codes can be created for each source domain; for example, the code of adventure is shown below.

---

[2] Charteris-Black (2014: 94) provides further insights into the persuasion that consists of mainly five traits: establishing integrity, expressing political arguments (logos), heightening emotional impact (pathos), mental representations, myths, frames, and schemata, and finally appearance (hair, dress, and gesture).

[3] Remarks to the Citizens of Michigan (April 17, 1989), Remarks at the Texas A &M University Commencement Ceremony (May 12, 1989), Remarks at the Boston University Commencement Ceremony (May 21, 1989), Remarks at the United States Coast Guard Academy (May 24, 1989), Remarks to the Citizens of Mainz (May 31, 1989), Remarks to Students at the Teton Science School (June 21, 1989), Remarks Announcing the Youth Engaged in Service to America (June 21, 1989), Remarks at the Solidarity Workers Monument (July 11, 1989), Remarks to the Citizens of Budapest (July 11, 1989), Remarks on Presenting the Presidential Medal of Freedom to Lech Walesa and the Presidential Citizens Medal to Lane Kirkland (November 13, 1989)

Figure 1
An Example of Metaphor Code


ATLAS.ti Report

Analyisis of Bush's freedom

Codes

○ adventure

Created: 2021/10/09 by Yuuki Tomoshige, **Modified:** 2021/10/09 by Yuuki Tomoshige

Used In Documents:
7 Remarks Announcing the Youth Engaged in Service to America Initiative.docx

Quotations:
7:7 ¶ 9, If you walk this path with me, I can promise you a life full of meaning and adventure. in Remarks Announcing the Youth Engaged in Service to America Initiative.docx
7:8 ¶ 9, And adventure -- excitement -- matters, too. There are lots of ways to find adventure. in Remarks Announcing the Youth Engaged in Service to America Initiative.docx

The source domain in the report above is "adventure," and this domain is used only in Remarks Announcing the Youth Engaged in Service of America Initiative, which has two quotations. Each source domain is classified using metaphorical words and phrases. Under this procedure, 73 codes were retrieved from the speeches, including metaphor, simile, metaphor from metonymy (Goossens, 1990). The rest of the sections deals with major source domains in the inaugural address and elsewhere to determine how metaphors and freedom are intertwined.

4 Major Source Domains in the Inaugural Address

In the inaugural address, the source domains tied to freedom are BREEZE, LEAVES, KITE, STORY, HOME (DOOR), and JOURNEY. A symbolic metaphor in the speech is a breeze metaphor in conjunction with parallelism. Notably, combinations of the three rhetorical devices—simile, wind metaphor, and parallelism—are depicted in the following way: "For a new breeze is blowing, and a world refreshed by freedom seems reborn" and "A new breeze is blowing, and a nation refreshed by freedom stands ready to push on." The parallelism—A new breeze is blowing, and an N refreshed by freedom—is the blend of the breeze metaphor and the extended metaphorical use of "refreshed by freedom."

Furthermore, another parallelism illustrates the importance of freedom: "We know what works: Freedom works. We know what's right: Freedom is right" and "freedom is like a beautiful kite that can go higher and higher with the breeze." The unified parallel structure—We know what V: freedom V. We know what V N: freedom V N—evidently shows his ideology revolving around the structure, that is, what X: freedom X. The breeze metaphor and these parallelisms are intertwined with a simile where freedom is reified as "a beautiful kite." This simile resorts to the kite's image that blows into the beautiful sunny sky to communicate compelling freedom or make it more concrete. In alignment with the breeze metaphor, the leave metaphor is employed in the following way: "The totalitarian era is passing, its old ideas blown away like leaves from an ancient, lifeless tree. A new breeze is blowing, and a nation refreshed by freedom stands ready to push on." The combination of breeze and leave metaphor demonstrates the dichotomy between old and new, or between totalitarianism and liberalism (American freedom).

President Bush also made ample use of a home metaphor that gives its distinctive rhetorical signature when used with a door-and-porch metaphor. A door or a room being a part of the constituents of the frame HOME, each element is inseparable; on the contrary, they boost the creation of a well-organized metaphorical connection, as in (1).

(1) a. But this is a time when the future seems like a door you can walk right through into a room called tomorrow.
b. Great nations are moving toward democracy through the door to freedom. Men and women move toward free markets through the door to prosperity. The people of the world agitated for free expression and free thought through the door to moral and intellectual satisfaction that only liberty allows.
c. We meet on democracy's front porch. A good place to talk as neighbors and as friends.

In (1a), the future is conceptualized by a door and a room, whereas the former seems to be a more distant future and the latter a relatively near future tomorrow. The successive context reveals its concrete image,

through which we can comprehend that the door opens out to freedom. In (1b), the collocation "moving toward" or "move toward" evokes the journey metaphor that shapes most of the speeches by President Bush. According to WAUDAG (1990), (1c) implies that "an ideological position: as friend and neighbor, Bush remains a detached observer of affairs. He is not a responsible agent promoting freedom in the world; rather, change comes with the weather." However, I would like to stress that a prototypical metaphor—NATION IS A PERSON—is underlined; To put simply, "friend" and "neighbor" are not unique lexicons in presidential speeches.

At any rate, the journey is fused with the door metaphor, thereby creating a composite image. From the starting point to democracy as a home, a series of metaphorical connections have become ubiquitous in the speech. Indeed, such was his belief that emerged in a different speech called remarks to the Citizens of Mainz: "The path of freedom leads to a larger home, a home where West meets East, a democratic home, the commonwealth of free nations." What lies behind the home metaphor is that democracy is mediated by freedom, a condition that is not mutually exclusive. AntConc's n-gram analysis, in this respect, allows us to recognize the configuration of such a network. For the procedure, I input the keyword "freedom" in the search box and chose an n-gram size of two sorted by frequency. The results are shown in Table 2 (the top 20 collocations).

Table 2
A bigram in the Speeches

n-gram (2)	frequency	range
freedom and	5	3
freedom in	5	3
freedom is[4]	3	2
freedom of[5]	3	1
freedom from	2	1
freedom works	2	2
freedom are	1	1
freedom as	1	1
freedom beckoned	1	1
freedom by	1	1
freedom can	1	1
freedom cannot	1	1
freedom does	1	1
freedom ended	1	1
freedom fighters	1	1
freedom for	1	1
freedom gaining	1	1
freedom leads	1	1
freedom now	1	1
freedom seems	1	1

As the table bears out, the frequency of "freedom and" and "freedom in" is conspicuous among other combinations. Concerning "freedom and," "freedom and democracy" is used three times; "freedom and ours" and "freedom and security" are used once, respectively. As the bigram shows, freedom and democracy are set concepts, as is the journey and home metaphor. Observing "freedom in" in the speeches, we can catch a glimpse of how President Bush wanted to achieve freedom not only in his own home but in Europe: "freedom in the East" is used twice; "freedom in Eastern Europe," "freedom in Europe," and "freedom in the hearts of" are used once. It is worth noting that the preposition "from" is employed as in "freedom from," a noun following the preposition has a negative connotation, and the president utilizes "freedom from misery" and "freedom from persecutions."

Another important metaphor, the story metaphor, is also linked to the breeze metaphor, as in (2).

(2) But I see history as a book with many pages, and each day we fill a page with acts of hopefulness and meaning. The new breeze blows, a page turns, the story unfolds. And so, today a chapter begins, a small and stately story of unity, diversity, and generosity—shared, and written, together.

[4] freedom is right (2), freedom is like a kite (1)

[5] freedom of a nation (1), freedom of all nations (1), freedom of man (1)

A metaphor, HISTORY IS A BOOK, underpins the systematic metaphorical link between breeze and story metaphors. According to (2), the story content includes "unity," "diversity," and "generosity." As the idea of liberalism is encapsulated in the new breeze, "a page turns, the story unfolds" refers to a situation where liberalism seeps into the American society and the world. The president emphasizes this transformation using the metaphor-related expression "a chapter begins." As for the mixed metaphor, WAUDAG (1990) contends that no agent or agency is specified by peroration, arguing that "the breeze simply blows, and the effects follow necessarily. Nor is anyone actively reading this story—in the way that an ordinary reader intentionally turns pages." Despite the fact that President Bush does not explicate the definition of freedom, which might be one of his strategies, source domains can give us a hint of how freedom is metaphorized through his perspective, so the next section unpacks how these metaphors are adopted in other speeches in *Speaking of Freedom*.

5 Metaphors for Freedom in *Speaking of Freedom*

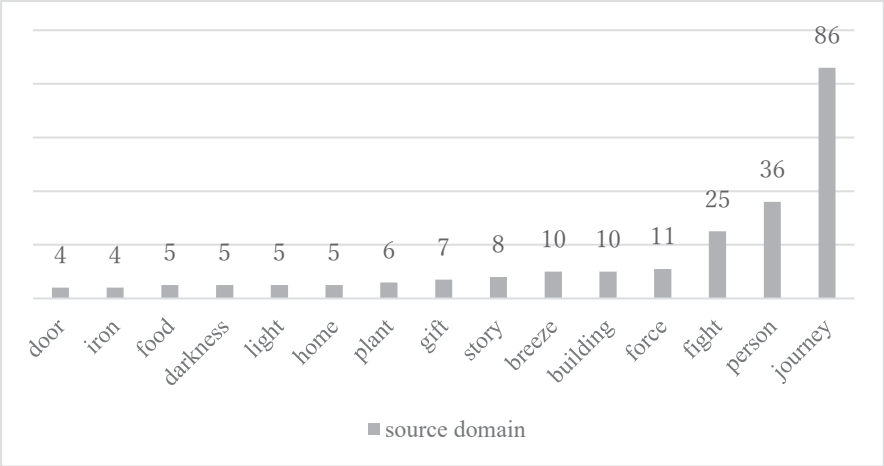
5.1 Major Source Domains

Before embarking on the main discussion, let us clarify the source domains employed in the speeches. Numerous source domains are widely utilized, in part, to maintain coherence and unity in the speeches. The speeches suffuse many types of source domains by which the audience arrives at the president's message.

Figure 2
The Word Cloud of the Source Domains

As Figure 2 shows, the president's speeches yield multiple source domains, stretching from the natural to the artificial category, and each source domain somehow contributes to conveying messages. This section, however, deals only with the source domains adopted over four times in the speech, as Figure 3 below demonstrates (other source domains are excluded). The conventional metaphors, JOURNEY, FIGHT, and PERSON (personification), are the most prototypical metaphors in the speeches.

Figure 3
Source Domains in the Speeches



The question of why the journey metaphor is customarily used and plays a vital role must be answered by the schema of a path. The fact that each speech contains journey-related lexical units shows that the presidents presuppose past events, connecting the dots to the present moment and even to the future, as Campbell and Jamieson's exposition displays. Moreover, Charters-Black (2004: 93) argues that "journey metaphors imply social effort toward achieving worthwhile goals," which is underpinned by a metaphor PURPOSEFUL SOCIAL ACTIVITY IS TRAVELING ALONG A PATH TOWARDS A DESTINATION. For the journey metaphor, in addition to the example discussed in the previous section, President Bush makes use of a similar metaphor in Remarks on Presenting the Presidential Medal: "Now my country has entered the road of freedom." In general, "freedom" is regarded as the process or means of achieving a goal. Notwithstanding the high frequency of the journey metaphor, a combination of freedom and journey metaphor is used only twice in the speeches; instead, other source domains are integral parts of the conceptualization of freedom.

An array of source domains is the clue to find the way in which freedom is portrayed. The first step in unraveling the relationship between metaphorical expressions and the conceptualization of freedom is to scrutinize the context in which metaphorical vocabularies are used (see the appendix). These source domains are the cornerstone of how presidents perceive freedom; significantly, tangible physical objects tend to be projected onto the target "freedom." For instance, DOOR, HOUSE, FOOD, GIFT, KITE, THREAD, BREEZE, and PLANT are objects that we can feel using the five senses; the breeze metaphor is in sync with touch and the food metaphor taste. Consider the example of a plant metaphor. Keywords such as "nurturing" and "rooted in" invoke the plant metaphor, and the context in the appendix shows that the economic foundation is "the proven success of the free market." This statement explains what freedom and democracy are: The success of the free market is the foundation of freedom and democracy. The belief that a free market is coupled with freedom is also depicted in the inaugural address.

As seen in the preceding section, the breeze metaphor is inevitable in comprehending President Bush's thought process. Interestingly, the force metaphor dovetails with the breeze metaphor, as the noun "force" here can mean, according to the *OED*, "As an attribute of physical action or movement: Strength, impetus, violence, or intensity of the effect. Also, regarding the force of wind described by numbers in the Beaufort scale." The sense of the wind force is not straightforwardly communicated in his speeches, but there is a possibility that the breeze metaphor helps turn the meaning of force into a breeze-related one. Again, the collocation "freedom and democracy" is identifiable in the context "as the forces of freedom and democracy rise in the East." One of the most regularly employed source domains, the fight metaphor, offers a window for observing freedom. This metaphor is enriched by "freedom fighters," "fight for freedom," and "defend freedom," all of which have the underlined assumption that those who attack freedom are enemies. In other words, if a country is in favor of President Bush's political ideology, they are considered friends or alliances.

Some metaphors appear only once in the speeches, one of which is a thread metaphor, proposing that freedom is vulnerable because it is made of slender threads and that we should weave them together. Although "freedom" is viewed as the path that extends to democracy in the inaugural address, the thread metaphor presupposes that "freedom" is a physical object (FREEDOM IS A VALUABLE POSSESSION), from which we can see the ways to conceptualize freedom vary depending on the situation. For instance, a gift metaphor gives us an awareness that freedom can be given to someone, suggesting that "freedom" involves

human relationships and social stratification within the power structure. Being socially and economically high means that they are sufficiently affluent to give a present to whomever they want. In the case of Remarks to the Citizens of Mains, the dichotomy between the West (the United States and its allies) and the East (the Soviet Union) is a common practice to instill American ideology that is superior to its enemies; the president insinuated that the U.S. would uphold whatever countries as long as they support the American view as a quid pro quo.

Another intriguing case is a food metaphor where "freedom" is recognized as food that can be tasted: "the hunger for liberty of oppressed peoples who've tasted freedom." The contrast between "hunger" and "taste" is inevitable to understand the dichotomy pertaining to the superiority of the United States. The food metaphor serves as a reaffirmation of the American role. The vivid image of hunger, the lack of access to freedom, is stimulated by the metaphor that the president announces that tasting freedom is achieved by believing in American freedom. Taken together, each metaphor functions to promote the American ideal as if it is the only answer to any problem. President Bush also navigated this norm using the house metaphor. He argues that "man of freedom, is at the White House. We think of it as the house of freedom." Comparing freedom to a house results in the metaphorical equation: THE WHITE HOUSE IS THE SOURCE OF FREEDOM

The president also taps an image of communication through a language exchange to foreground the concept of "freedom," arguing that "Everywhere, those voices are speaking the language of democracy and freedom." Metonymy is another pivotal figurative device employed in this context; the "voices" indicate opinions rather than literal sounds. Significantly, "democracy and freedom" is conceptualized as a language, and therefore, the metaphor DEMOCRACY AND FREEDOM IS A LANGUAGE emerges from this context. This metaphor implies that these two basic concepts are ubiquitous in the same way that languages are widespread as a communication tool as one of the essential qualities of human beings.

5.2 The xyz Construction Used in Remarks at the Solidarity Workers Monument

Almost all metaphors render abstract freedom a tangible object, but only one regards the concept as an abstract item. If the source domain is a dream, it cannot be touched, heard, seen, and felt; thus, a dream per se describes intangible matter. However, as far as common sense goes, having a dream for the future amounts to a purposeful life. In the speech, the president argues that "This special kinship is the kinship of an ancient dream—a recurring dream—the dream of freedom."

The president also employs a kinship metaphor using the xyz construction (Sullivan, 2013: 13). Traditionally, Brooke-Rose (1958) labeled this as A is B of C; this construction is in the form of "x is y of z," which has two types: the target-source-target pattern (TST) and the target-source-source (TSS). For example, Sullivan posits that the xyz construction, "necessity is the mother of invention" (Sullivan, 2013: 139), is correlated with the first type TST, as the constituents "necessity" and "invention" are treated as the target domains. Furthermore, Dancygier and Sweetser (2014) claimed that the construction encompasses two types of mapping: a single-scope and a metaphoric blend. A single-cope includes, for example, "Paris is the capital of France" which specifies a role/value mapping called a Specificational Copula Construction. This sentence relies on two roles and values, whereby the same relation or category (Country-and-Capital City and France-and Paris) is profiled. Furthermore, in the case of "The Rockies are the Alps of North America," it is a Predicational Copula Construction, as the subject is autonomous. The predicate ("the Alps of North America) is dependent. Dancygier and Sweetser (2014: 152), in this respect, argue that "the Alps are not connected to North America other than through the analogy with *the Rockies*." In summary, Dancygier and Sweetser (2014) claimed that "figurative meanings are built on the basis of the specific selection of frame structure and the accessibility of across-mappings between input spaces."

Turning to the construction "this special kinship is the kinship of an ancient dream," let us briefly go through the expanded context of the speech.

(3) Poland has a special place in the American heart and in my heart. And when you hurt, we feel pain. And when you dream, we feel hope. And when you succeed, we feel joy. It goes far beyond diplomatic relations; it's more like family relations—and coming to Poland is like coming home. This special kinship is the kinship of an ancient dream—a recurring dream—the dream of freedom.

The first line involves personification, NATION IS A PERSON, making the successive verbs ("hurt" and "feel") potentially figurative. Based on this anthropomorphism, President Bush also adopts the family metaphor, emphasizing its close relationship with Poland. The depiction of emotional reactions, such as joy, hope, and pain, shows how close the two countries are. Thus, the context above demonstrates the president's attitude

toward Poland, reaffirming their inseparable ties. The president underlines this bond through the xyz construction, insisting that a dream is equivalent to freedom. Notably, apposition allows us to capture what a dream is. These three noun phrases, "an ancient dream," "a recurring dream," and "the dream of freedom," exhibit the same dream: freedom. Therefore, the construction in question can be paraphrased as "this special kinship is the kinship of the dream of freedom," which is a unique instance compared with the examples given in the previous studies (Sullivan, 2013; Dancygier and Sweetser, 2014) in that "kinship" itself is metaphorical. The dream metaphor further epitomizes this metaphorical lexicon, and, in so doing, the first metaphor renders the second meta-metaphorical. The source domain for the "kinship" is elaborated via the source "dream,"[6] so the example falls into a new category source-source-source (SSS) pattern. By using this pattern, the commonality between the U.S. and Poland is portrayed by the family metaphor, which is further explained through the dream metaphor, suggesting that acquiring freedom is their common ground. The antithetical pair of freedom and not having freedom is best understood as the distinction between communism (or those who do not embrace American freedom) and American freedom.

6 Conclusion

This study sought to answer the RQ with the CMA approach, using software ATLAS.ti and AntConc to analyze 11 speeches qualitatively and supplement the analysis on freedom in presidential speeches or the lack thereof. Section 1 presents the definition of freedom in the *OED* and briefly mentions several types of freedom. As the inaugural address is symbolic speech, I first analyzed the central source domains: BREEZE, LEAVES, KITE, STORY, HOME (DOOR), and JOURNEY. The breeze metaphor expresses the theme of freedom well, but this is not to say that other metaphors are neglected or separated from each other. In contrast, they created a web-like connection to foreground freedom based on the metaphor DEMOCRACY IS A HOME. With the journey metaphor of high frequency, freedom is held to lead to a democratic home. The compatibility of these two indispensable ideas accords with the n-gram data, proving that the collocation "freedom and democracy" is widely employed.

In the book *Speaking of Freedom*, we observed source domains used over four times that encompass fifteen source domains, and this study focused on DOOR, HOUSE, FOOD, GIFT, KITE, THREAD, BREEZE, and PLANT. Each source domain is essential to its own right to attract attention to freedom. At any rate, it is conceived of as both a tangible and intangible object, thereby conjuring up a concrete image of freedom, otherwise conceptualized as a colorless abstruse concept. The following list displays the conceptual metaphors discussed in this study.

・PURPOSEFUL SOCIAL ACTIVITY IS TRAVELING ALONG A PATH TOWARD A DESTINATION
・DEMOCRACY IS A HOME
・DEMOCRACY AND FREEDOM IS A LANGUAGE
・HISTORY IS A BOOK
・NATION IS A PERSON
・NATION IS A FAMILY
・FREEDOM IS A PATH TOWARD A HOME OF DEMOCRACY
・FREEDOM IS A KITE
・FREEDOM IS A GIFT (FREEDOM IS A VALUABLE POSSESSION)
・FREEDOM IS A PLANT
・FREEDOM IS THREAD
・FREEDOM IS FOOD
・THE PROCESS OF ACHIEVING FREEDOM IS FIGHTING
・THE WHITE HOUSE IS THE SOURCE OF FREEDOM

Essentially, the president views target freedom via multitudinous conceptual domains, but few of them reveal a clear-cut definition of freedom. Perhaps this might be one of the strategies or rhetorical techniques to promote American freedom, hiding other aspects of it, or as the conceptual metaphor, THE WHITE HOUSE IS THE SOURCE OF FREEDOM, signifies that the president resorts to this central motif to globally transmit the American ideal. To find a more plausible definition of freedom in his speeches, it is necessary to enlarge the scope of the analysis. It is possible, however, that other speeches might not explicate the definition of freedom

---

[6] Lakoff (2006: 31) posits that "dreams are seen as lifetime purposes. 'The American Dream' is based on this metaphor. Freedom then becomes being free to *live the dream*, with nothing holding you back or keeping you down."

but rather that his intention is to proliferate the idea that America is such an impeccable place.

As this study only focused on data aligned with the RQ, further qualitative/quantitative research is needed to gain more systematic data. For a more detailed analysis, I would like to incorporate the construction grammar approach (e.g., Goldberg, 2019; Hilpert, 2019) into the investigation. This perspective will help to examine what is being done in discourse to further cogitate upon effects and acts by metaphor (e.g., Boeynaems et al., 2017) in relation to a variety of constructions.

Appendix A

Table 3

Major Source Domains for Freedom in the Eleven Speeches

speeches	source	context
Remarks to the Citizens of Mains Remarks on Presenting the Presidential Medal	force	As the forces of freedom and democracy rise in the East. The forces of freedom are putting the Soviet status quo on the defensive. Lech Walesa has shown through his life and work the power of one individual's ideals when combined with the irresistible force of freedom.
Academy Commencement Ceremony	plant	The economic foundation of this new era is the proven success of the free market, and nurturing that foundation are the values rooted in freedom and democracy.
Remarks to the Citizens of Michigan	breeze	I spoke of the new breeze of freedom gaining strength around the world.
Remarks at the Solidarity Workers Monument Remarks at Boston University Remarks on Presenting the Presidential Medal	fight	freedom fighters played a major role in winning the Second World War. And I remember well about 8 years ago when you joined us in Yorktown in 1981 to celebrate the bicentennial of that first Franco-American fight for freedom. They know how to defend freedom. They know how to fight for freedom.
Remarks to the Citizens of Mains Remarks on Presenting the Presidential Medal	journey	The path of freedom leads to a larger home, a home where West meets East, a democratic home, the commonwealth of free nations. you and the union have been pathbreakers for freedom, continuing the support for free trade unions around the world. Now my country has entered the road of freedom.
Remarks to the Citizens of Mains	thread	And weaving together the slender threads of freedom in the East will require much from the Western democracies
Inaugural Address	kite (breeze)	freedom is like a beautiful kite that can go higher and higher with the breeze.
Inaugural Address	nutritional supplement	a world refreshed by freedom seems reborn a nation refreshed by freedom stands ready to push on.
Remarks to the Citizens of Mains	gift	We must recall that the generation coming into its own in America and Western

		Europe is heir to gifts greater than those bestowed to any generation in history: peace, freedom, and prosperity. But we can take that precious gift of freedom, preserve it, and pass it on, as my generation does to you
Remarks to the Citizens of Mains	food	the hunger for liberty of oppressed peoples who've tasted freedom
Academy Commencement Ceremony Remarks on Presenting the Presidential Medal	language	Everywhere those voices are speaking the language of democracy and freedom Spanish, German, Chinese, Russian. And yet from these varied lips comes a word all can understand: freedom. And with one voice, the people of the world have spoken: freedom
Remarks on Presenting the Presidential Medal	house	And today the waiting is over. Lech Walesa, man of freedom, is at the White House. We think of it as the house of freedom.
Inaugural address	door	Great nations of the world are moving toward democracy through the door to freedom.
Remarks at the Solidarity Workers Monument	dream	This special kinship is the kinship of an ancient dream -- a recurring dream -- the dream of freedom.

References

Boeynaems, A., Burgers, C., Konijn, E. A., & Steen, G. J. (2017). The effects of metaphorical framing on political persuasion: A systematic literature review. *Metaphor and Symbol*, 32(2), 118-134. https://doi.org/10.1080/10926488.2017.1297623.

Brooke-Rose, C. (1958). *A Grammar of metaphor*. Secker & Warburg.

Bush, G. H. (2009). *Speaking of freedom*: *The collected speeches*. Simon & Schuster.

Cameron, L., Maslen, R., Todd, Z., Maule, J., Stratton, P., & Stanley, N. (2009). The discourse dynamics approach to metaphor and metaphor-led discourse analysis. *Metaphor and Symbol*, 24(2), 63-89. https://doi.org/10.1080/10926480902830821.

Campbell, K. K., & Jamieson, K. H. (1990). *Deeds done in words*: *Presidential rhetoric and the genres of governance*. University of Chicago Press.

Charteris-Black, J. (2004). *Corpus approaches to critical metaphor analysis*. Springer.

Charteris-Black, J. (2014). *Analysing political speeches*. Palgrave MacMillan.

Engel, J. A. (2010). A better World... but don't get carried away: The foreign policy of George H. W. Bush twenty years on*. *Diplomatic History*, 34(1), 25-46. https://doi.org/10.1111/j.1467-7709.2009.00831.x.

Foner, E. (1999). *The story of American freedom*. W. W. Norton & Company.

Goldberg, A. E. (2019). *Explain me this*: *Creativity, competition, and the partial productivity of constructions*. Princeton University Press.

Goossens, L. (1990). Metaphtonymy: The interaction of metaphor and metonymy in expressions for linguistic action. *Cognitive Linguistics*, 1(3), 323-342.

Group, P. (2007). MIP: A method for identifying metaphorically used words in discourse. *Metaphor and Symbol*, 22(1), 1-39. https://doi.org/10.1207/s15327868ms2201_1.

Hart, C. (2008). Critical discourse analysis and metaphor: Toward a theoretical framework. *Critical Discourse Studies*, 5(2), 91-106. https://doi.org/10.1080/17405900801990058.

Hilpert, M. (2019). *Construction grammar and its application to English*. Edinburgh.

Lakoff, G. (1999). *Philosophy in the flesh*. Basic Books.

Lakoff, G. (2002). *Moral politics*: *How liberals and conservatives think* (2nd ed.). University of Chicago Press.

Lakoff, G. (2006). *Whose freedom?*: *The battle over America's most important idea*. Farrar, Straus and Giroux.

Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. University of Chicago Press.

Lim, E. T. (2002). Five trends in presidential rhetoric: An analysis of rhetoric from George Washington to Bill Clinton. *Presidential Studies Quarterly*, 32(2), 328-348. https://doi.org/10.1111/j.0360-4918.2002.00223.x-4918.2002.00223.x.

Musolff, A. (2016). Political metaphor analysis: Discourse and scenarios. Bloomsbury.

Reijnierse, W. G., Burgers, C., Krennmayr, T., & Steen, G. J. (2018). DMIP: A method for identifying potentially deliberate metaphor in language use. *Corpus Pragmatics*, 2(2), 129-147. https://doi.org/10.1007/s41701-017-0026-7.

Sullivan, K. (2013). *Frames and constructions in metaphoric language*. John Benjamins.

Van Dijk, T. A. (1997). What is political discourse analysis? *Belgian Journal of Linguistics*, 11, 11-52. https://doi.org/10.1075/bjl.11.03dij.

Ventura, P. (2016). *Neoliberal culture*: *Living with American neoliberalism*. Routledge.

WAUDAG (1990). The rhetorical construction of a president. *Discourse and Society*, 1(2), 189-200. https://doi.org/10.1177/0957926590001002004.

(dictionary)

Oxford English Dictionary Online. Retrieved from https://www.oed.com.kwansei.remotexs.co/

執筆者紹介（掲載順）

渡辺　秀樹	大阪大学大学院言語文化研究科　教授
大森　文子	大阪大学大学院言語文化研究科　教授（編集）
岡部　未希	大阪大学大学院言語文化研究科　博士後期課程２年
竹森　ありさ	大阪大学大学院言語文化研究科　博士前期課程１年
Luke Malik	大阪大学大学院言語文化研究科　特任准教授
友繁　有輝	関西学院大学国際学部・国際学研究科　専任講師

言語文化共同研究プロジェクト ２０２１

英語のレトリック・日本語のレトリック

2022 年 3 月 31 日発行

編集発行者　大阪大学大学院言語文化研究科

この用紙は人類環境浄化のため再生紙を使用しています。